

2013年3月 第32号

# 人環フォーラム NO.32

HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM

対談：大学の教養教育を考える  
長谷川寿一／間宮陽介

特集：科学・技術の過去と未来  
瀬戸口浩彰／杉万俊夫



京都大学大学院人間・環境学研究科



## 『人環フォーラム』の趣旨

21世紀における人類の生存は、現在直面している地球をとりまく環境の危機をどのように乗り越え、地球上の多様な諸民族の持続的な共存の道をどのように見いだしてゆくことができるかにかかっている、といえましょう。「自然と人間との共生」という理念のもとに平成3年に設立された京都大学大学院人間・環境学研究科（略称「人環」）は、こうした21世紀における人間と環境との新しいかわりを模索してゆくため、『人環フォーラム』を発刊することになりました。本誌では、人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえに立って、精神的豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問いつづけてゆきたいと考えています。



## ●目次——人環フォーラム32——

|                                             |       |
|---------------------------------------------|-------|
| 巻頭言                                         | 1     |
| 外国人研究員の提案するこれからの外国語教育                       | 大木 充  |
| 対 談                                         | 2     |
| 大学の教養教育を考える                                 | 長谷川寿一 |
| 司会 間宮陽介                                     |       |
| 特 集：科学・技術の過去と未来                             |       |
| 野の植物を活かす「これまで」と「これから」／瀬戸口浩彰                 | 14    |
| 文系が見た福島原発事故／杉万俊夫                            | 18    |
| リレー連載：環境を考える                                |       |
| トウモロコシとカン／小島泰雄                              | 22    |
| サイエンティストの眼                                  |       |
| 二度目の苦難の道を歩む超伝導研究                            |       |
| —銅酸化物高温超伝導理論の確立を目指して—／森成隆夫                  | 26    |
| 知の息吹                                        |       |
| 資源の自治的共同管理制度が地域環境に果たす役割／廣川祐司                | 28    |
| 遺伝子が物語る高山植物の歴史／池田 啓                         | 32    |
| 社会を斬る                                       |       |
| 梃子と支点／那須耕介                                  | 36    |
| フロンティア                                      |       |
| 再参入コミュニティ：日本、アメリカ、ロシアにおける                   |       |
| コリアン移民の民族差別リスク管理／オレグ・パホーモフ                  | 38    |
| ヒトの生体内筋細胞量の定量技術の確立—スポーツ・健康科学から              |       |
| 高齢者を考える—／山田陽介                               | 39    |
| 奈文研の散歩道                                     |       |
| 奈良の庭園—古代から近代まで—／小野健吉                        | 40    |
| 文学の周辺                                       |       |
| ゴースト・ダブリンの幻—ジェイムズ・ジョイスの「死者たち」を読む／小島基洋       | 42    |
| 世界の街角                                       |       |
| 「サン＝シュルピス広場—ありふれた日常を見つめる場所」／塩塚秀一郎           | 44    |
| 国際交流セミナーから                                  |       |
| グローバル化と多言語主義—全ての言語は「対等（イコール）」であるが、          |       |
| 英語は他の言語に比べ、より「対等（イコール）」である／ベル・アッペース・ネダール    | 46    |
| フィールド便り                                     |       |
| 掛け合い歌を書き起こす—中国貴州省の「山歌」／梶丸 岳                 | 52    |
| 書 評                                         |       |
| 林 貴啓著『問いとしてのスピリチュアリティ—「宗教なき時代」に生死を語る—』／澤井 努 | 54    |
| 金子守恵著『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術—』／森下 翔       | 55    |
| 岡田敬司著『自律者の育成は可能か「世界の立ち上がり」の理論』／藤田雄飛         | 56    |
| 大倉得史著『育てる者への発達心理学—関係発達論入門』／浜田寿美男            | 57    |
| 人環図書                                        | 58    |
| 細川英雄／西山教行編『複言語・複文化主義とは何か』                   |       |
| 河崎 靖著『オランダ語学への誘い』                           |       |
| 奥田敏広著『ワグナーと恋する聖女たち—中世伝説と現代演出の共演』            |       |
| 瓦 版                                         | 59    |

研究科ホームページ

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan>

『人環フォーラム』ホームページ

[http://www.h.kyoto-u.ac.jp/publication/jinkan\\_forum/index.php](http://www.h.kyoto-u.ac.jp/publication/jinkan_forum/index.php)

『人環フォーラム』リポジトリ（WEB公開ページ）

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/93000>

# 外国人研究員の提案するこれからの外国語教育

大木 充

— OHKI MITSURU [京都大学名誉教授]



在職中は、外国語教育論講座の同僚だった西山教行氏と共同で五名のフランスの研究者を人環の外国人研究員として招聘した。彼らには、われわれとの共同研究と学生に対する講演や授業を通じて、人環の学術研究の発展に多大の貢献をしていただいた。

招聘した先生方は、いずれも私たちの期待に添えてくれた。特に、ツール大学カステロティール氏とメーヌ大学カンドリエ氏の研究が関係している異文化間コミュニケーション能力の養成は、日本の大学における英語以外の外国語教育にとって重要な課題である。しかし、ここでは、二〇〇七年度に招聘したアンリ・オレック、ナンシー第二大学名誉教授と二〇一二年度に西山氏が招聘したクロード・ジェルマン、ケベック大学名誉教授の研究を取り上げたい。それは、彼らの研究が今日の日本の教育行政が抱えている喫緊の課題に深く関わっているからである。中央教育審議会の大学分科会は、二〇〇八年十二月に「学士課程教育の構築に向けて」という答申と二〇一二年三月に「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」という報告を行っている。二〇〇八年の答申の主旨は、グローバル化にともない学士課程教育の質の維持と向上、大学全入時代を迎えて質の保証が求められているというものであるが、大学で「生涯を通じて学び続ける基礎的な能力を培う」ことの重要性について言及されている。そして、二〇一二年の報告書ではこの学士課程教育の質的転換を実現するには「総学修時間の増加・確保」が重要であることがクローズアップされている。総学修時間の増加・確保は「授業のための事前の準備」と「事後の展開」によって実現される。そして、このふたつは、「大学における学修の本質である主体的な学びそのもの」であると述べられているが、実行するには、オレック氏の提唱している「自律学習能力」が必要である。氏は、外国語学習についてであるが、

数々の論文で、自律学習能力とは何かを説明し、その能力を教育機関でどのようにして養成するか具体的に示している。

一方、ジェルマン氏の研究は、日本の外国語の「教育システム」、「カリキュラム」に多くの示唆を与えてくれる。日本では二〇一一年度から小学校での外国語（英語）活動が必修になった。その結果、義務教育と高校で行われている英語の授業数は十二年間の累計で千百十五になる。こんなに長い間時間をかけて勉強しているのに英語が話せないとよく言われるが、それは、ジェルマン氏がネットン氏の共同研究で究明した外国語で自然なオールコミュニケーションができるようになるための三つの条件を満たすような教育をしていないからである。その条件とは、彼らによると、①集中して学習する期間がある、②暗示的能力を養成するような授業をする、③現実の言語使用と同じようなコンテキストでコミュニケーションする。この三つの条件は、カナダで実際に行われたフランス語の実験授業の結果えられたものである。時間だけだけでなく長くかけても、そのかけかた、授業方法が間違っていない、望む結果はえられない。どこかの市の市長に小学校一年から英語を始めてもむだであることを教えてあげたい。二〇一二年に政府のグローバル人材育成推進会議の中間まとめに基づいて文科省が公募した事業に四十二大学の申請が採択されたが、この事業が成功するか否かは、各大学が、ジェルマン氏の三条件を満たすような事業を実施できるかどうかにかかっているように思われる。京大でも工夫次第で応用できると思われるのは、フランス語などで現在実施しているインテンシブコースの二年間分（三百十五時間）を半期に集中して行う方法である。ジェルマン氏らの実験では、五ヶ月間で三百時間かけている。真剣に外国語のできる人材の育成を望むなら、このくらいの大胆な改革に取り組む必要があるだろう。

## 大学の教養教育を考える

長谷川 寿一  
Toshikazu HASEGAWA間宮陽介  
Yosuke MAMIYA

本対談が持たれたのは昨年の一二月二九日、京都大学では「国際高等教育院」構想がにわかに現実味を帯び、これに対し人間・環境学研究科では、同構想に対して強い反対運動が繰り広げられているところであった。大学の教養教育とは何か、教養教育はいかにあるべきか。教養教育のあり方は教員ひとりひとりに突きつけられた問題であり、このような問題意識は本対談にも反映されている。もともと、「大学の教養教育を考える」というテーマは国際高等教育院構想に触発されて設定されたわけではなく、春の編集委員会ですでに決まっていた。総合人間学部が教養教育の主要担当部局である以上、そのあり方についての議論を避けるわけにはいかない。『人環フォーラム』誌においても、教養教育をめぐる特集や対談を組もう、まずは東京大学教養学部長との対談を、というのが委員会が決まった結論であった。結果的にはタイムリーな企画になったわけである。

広々とした学部長室片隅の衝立の陰にまっ白なワンちゃんがおとなしく寝そべっているのに気づいたのは対談が終わった後のことである。長谷川先生の愛犬「キクマル」君で、大学近くにお住まいの先生が世話をかねて大学に連れてくるのだそうである。人なつっこいこと、この上なく、大学の人気者となっているのもむべなるかなと思われた。

## ●長谷川寿一（はせがわ としかず）

一九五二年神奈川県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科教授。現在、同研究科長ならびに教養学部長。専攻は人間行動進化学、行動生態学、進化心理学。インドクジャクの配偶者選択、ヒト・類人猿の生活史戦略と配偶戦略、自閉症者（児）の認知などが主たる研究テーマである。共編著に、『進化と人間行動』（長谷川眞理子との共著、二〇〇〇年、東京大学出版会）、『心の進化 人間性の起源をもとめて』（松沢哲郎共編、二〇〇〇年、岩波書店）、『進化と人間行動』（長谷川眞理子との共著、二〇〇七年、放送大学）、『こころと言葉 進化と認知科学のアプローチ』（C・ラマル、伊藤たかね共編、二〇〇八年、東京大学出版会）などがある。

## ●間宮陽介（まみや ようすけ）

一九四八年長崎市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。コモンズをはじめとして、都市政治領域の諸問題などを空間論の視点から構成しようとしている。主な著書に『モラル・サイエンスとしての経済学』（ミネルヴァ書房、一九九六年）、『ゲインズとハイエク』（中央公論社、一九八九年）、『法人企業と現代資本主義』（岩波書店、一九九三年）などがある。

## 一九七〇年前後の駒場

**間 宮** 予定より早めに来たものですから、久しぶりに駒場のキャンパスを回ってみました。入学が昭和四十三年、ストライキが起こった年ですから、もう四〇年以上経ちます。大学を出てから何度か駒場を訪れたことはありますが、じっくり見て回ったのははじめてなんです。

**長谷川** 間宮さんは科類はどちらだったんですか？

**間 宮** 文科二類、経済学部です。

**長谷川** ああ、そうですね。

**間 宮** 懐かしく、昔が思い出されました。

**長谷川** 駒場寮もなくなってます。

**間 宮** そうですね。時計台付近はあまり変わっていないですが、奥の駒場寮のあたりはずいぶん変わりましたね。

**長谷川** 駒場寮は京都大学という吉田寮みたいなところで、学生自治の本拠地だったんですよ。老朽化し、維持費もかかるうえに、住む学生も減ってきた。学生と粘り強く話し合い、ときにはぶつかることもありましたが、取り壊すことになり、土地を空けて、跡地に学生の福利厚生施設と図書館を建設しました。

**間 宮** 駒場寮は出入り自由で、誰が住人か外部の人間か、分からない。それをいいことに、どろぼうが住み着いたこともありましたが（笑）。寮を根城にして学内で泥棒を働くわけです。一、二年、学内で盗みをして生活していたらしいです。我々もよく友人の部屋に寝泊まりしました。壁は落書きだらけで、「国士無双達成！昭和〇年〇月〇日」なんて書かれています。まあ愉快なところでしたね。

**長谷川** 九〇〇番教室はまだあるんですね。内部はずいぶん変わりましたが、そのとおりですね。

**間 宮** 九〇〇番教室といえば、思い出するのが三島由紀夫。六九年の五月でしたか、ストライキが終わるか終わらないかっていうころ、三島由紀夫を呼んで、三島由紀夫vs東大全共闘という討論集会をやったんです。

**長谷川** ありましたね、そういえば。

**間 宮** 私もその場にいたのですが、三島は半袖のポロシャツ姿で、壇上の学生は学生服。対照的でおかしかったですね。三島が、「も

し全共闘が天皇陛下万歳と言ってくれば、私も安田講堂に立てこもったのに」なんて言って、ずいぶん話題になりました。

**長谷川** 三島が亡くなるちょっと前くらいですかね。

**間 宮** 私が本郷に行って、三年のときでしたから、そのくらいですね。晩秋の肌寒い日で、本郷の森川町食堂で飯食ってたら、テレビで臨時ニュースをやっている、三島が市ヶ谷の自衛隊駐屯地で割腹自殺したと。

**長谷川** じゃあその一年半前ですね。

**間 宮** そうですね。討論集会のときは元気そうで颯爽としていましたが。駒場の学生だったころ、私は目白のある学生寮にいたんです。村上春樹がいた寮で、彼の小説にもちょくちょく出てきます。左もいれば右もいる。楯の会の学生もいたんです。事件のときには私はもう寮を出ていたんですけども、友人に聞いたたら、後を追うかもしれないからよく見張っとけなんて言ってたみたいです。

## 教養教育の現状

**間 宮** あれから東大もずいぶん変わったでしょうね。法人化後は変わることが自己目的化しているようで、どの大学も変身に必死になっているように見受けられます。われわれの総合人間学部でも、現在、教養教育のあり方をめぐって大きな問題が生じています。東大教養学部と京大総合人間学部は教養教育の担当部局という点で似たような位置にあるわけですが、東大とくに駒場において何が変わり何が変わらないか、あるいは現在どのような問題を抱えているか、お聞かせ願えません。

**長谷川** 古き良き教養学部というのは昔の話で、現在は大綱化、重点化という二つの改革を経て大きく変わりました。重点化のときにこちらに大学院（総合文化研究科）をつくり、先生方の所属が学部から大学院に変わりました。ただ大綱化の後でも国立大学で教養学部というものを抱えて、学生に教養教育をするっていう自負はありますね。その部分は間宮さんのおっしゃった変わらない部分。本郷の先生と一番違うのは、学生との距離。入学したての学生の目の輝き、あれを僕は間近に見ているんだっていう気持ちですね。学生に対する愛情みたいなものは本郷の先生には負けないという



つもりではおりますね。

**問 宮** 本郷の先生たちは駒場の教養教育にはかなりタッチされているんですか。

**長谷川** 科目にもよりまずけれども、たとえば法学や経済の場合は専門の頭出しが二年生の授業から入りこんでいきますし、それから進学振分けという制度があつて、かつては二年生までフルに教養学部授業だったんですが、今は一年と半分、進学が内定します。四学期という二年目の後半には、週一日を残して残りの日は専門教育となっていますから、実際には教養教育は一年半プラスちよつとというところです。

**問 宮** 教養学部の学生が本郷に行くということはないんですか。

**長谷川** 四学期は学部によつては、先生方がこちらに来て授業をする学部もありますし、たとえば農学部とか工学部とかは四学期から学生を本郷に呼んでやっていますね。学部によつて濃淡がありますけども、一部は四学期になるともうほとんど本郷に行っちゃう。

**問 宮** 教養教育と専門教育の境目は非常に微妙で、そこら辺の仕分けはどうなんでしょうか。むしろ、教養教育に固有の教育、科目っていうのはあると思うんですが、今は専門だつてかなり幅が広がっていますから、教養とダブるところがあるんじゃないですか。

**長谷川** 学生の側からみると、教養教育に固有の部分っていうのは、理系文系科類を越えて、同じ教室で同じ授業を聴くという部分です。これはたとえば京大さんでも早稲田さんでもそうですけど、ある学部に行けば、そのホモジニアスな仲間たちと同じ授業を聴く。でもここ駒場では、隣に座っている連中は法学部に行く奴かもしれないし、こつちのは医学部に行くような連中かもしれない。教員が展開する授業をそれぞれ違う想いで聴いているっていう、そういう空間があるっていうのが一番駒場らしい授業ですね。カリキュラムを申しますと、専門基礎の部分が基礎科目、その上に総合科目、それから主題科目っていうのがある。基礎科目はいわゆる科類別で、だいたいクラス指定で聴くわけですけども、総合科目と主題科目に関しては科類を越えてほしい自由選択できる、そういう科目構成になっています。

**問 宮** そうですか。

**長谷川** それもかなりの科目数を展開しています。そのほか、学生

たちは課外活動、サークル活動なんかで、科類を越えて付き合いがあるんで、教養学部の場合にはやはり学部にとられない教育と学部にとられない人間関係っていうのが特徴だと思います。

**問 宮** カリキュラムの編成とか科目の設定というのは、どういった組織で決めるんでしょうか。

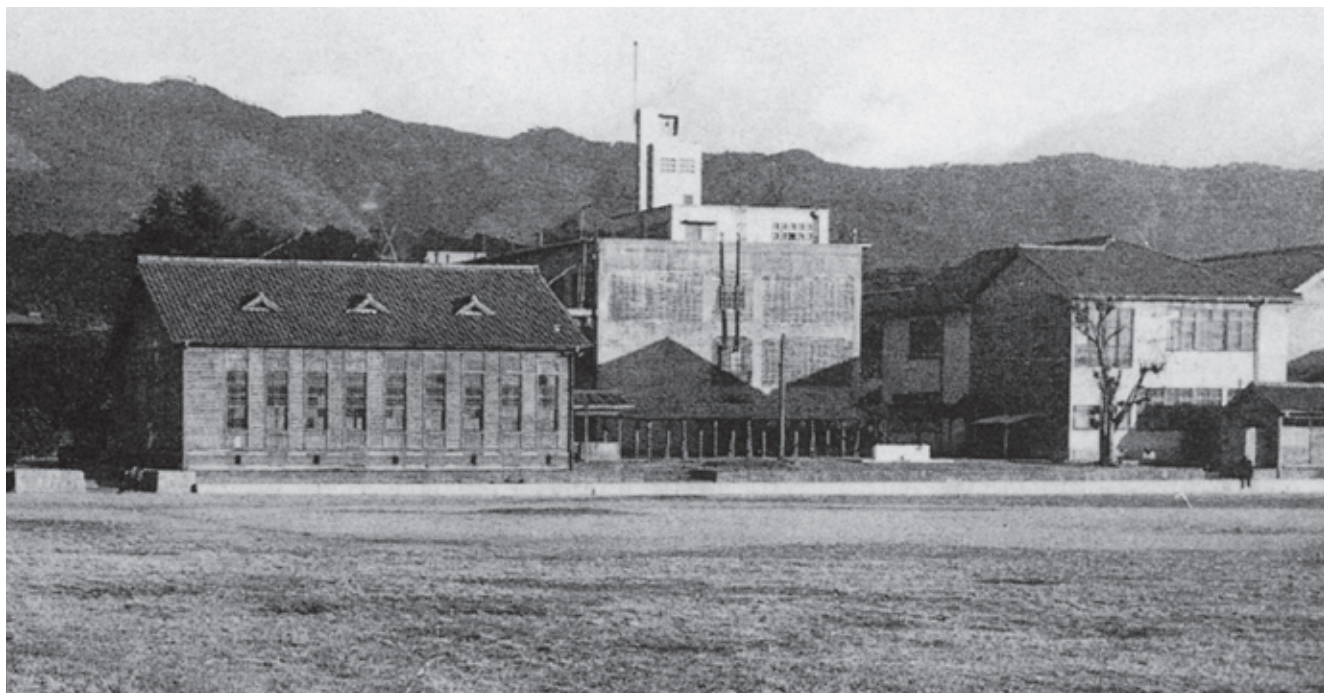
**長谷川** 大学院は専攻で編成しますが、学部については部会っていう、昔でいうと教室ですね、物理だとか化学だとか、法学だとか国際関係だとか、その部会が集まったものが前期課程運営委員会っていう教育母体をつくつて、さらにそこに教務委員会があり、それでカリキュラムの設計をしています。ですから前期課程は昔ふうにいえばいわゆる教室が責任をもって運営をするというかたちです。

#### 京大の国際高等教育院構想

**問 宮** 私どもの大学でいま日程に上っている国際高等教育院っていうのは、これまでの教養教育は企画と実施が二元的だったというので、それを一元化することを狙っている。駒場の場合は教養学部ですから、もともと二元的なんです。

**長谷川** 二元的っていうのはどういう二元的なんですか。

**問 宮** 高等教育研究開発推進機構という長つたらしい名前の部署が十年ほど前にできて、そこが企画を担当するわけです。それができる前は総合人間学部、人間・環境学研究所が主体となつて、他学部からも委員たちが入っていましたが、教養教育を企画して教育にあたっていた。それでは全学的見地に欠けるということで、高等教育研究開発推進機構をつくつて企画部門を独立させ、選任のスタッフも、数は少ないですが、張り付いている。そこが全学共通教育の企画を担当して、総合人間学部と理学部の教員が実働部隊として教養教育を行っているわけです。だからわれわれは教養教育と学部専門教育と大学院教育の三つを担当していることになる。それを一元化するために国際高等教育院をつくらうというのです。二百人の専任を置いて、うち総合人間学部・人間環境学研究所からは学部・大学院教育を担当する者を残して、大半は教育院に移籍させるという寸法です。その人たちは一般教養だけをやればいいということですが、建前上は教育もやるし研究もやるということですが、本音とし



(旧) 教養部 吉田グラウンドから見た教養部校舎 (1950年代) (京都大学 百年史より)

ては教養教育に専念してくれということなんです。このような教育と研究の分断に対して、我々総人・人環は反対しているんです。教える内容は日々変わっていくわけで、どんな学問分野だって研究をやらないと教育はできない。教育と研究は一体であるはずなのに、教えるだけだというのは大いに問題です。

**長谷川** おっしゃる通りだと思います。我々も大学院ができて、本籍が総合文化研究科という大学院になって、かつては本郷と兼担しながら細々と大学院教育をやっていたのが、いまでは自分たちが主体となって研究者養成をしている。そして、研究している後ろ姿を一、二年生に見せたいと。一、二年生のフレッシュな連中が一流の研究者に教えてもらおう、そこが結構大事だと思うんですね。それを、こういったら失礼ですけど、東京の私大のように、先生方が教養部と専門学部に分属して、教養の先生は大学院生教育はできないということになれば、教養の先生方は例えば同じ法学なり心理学だったとしても、大学では二流扱いされる、これだったら高校の先生とあまり変わらない、というお話をよく伺うんですけど。京大にしても東大にしても、トップレベルの大学で一、二年生が接する先生ってというのは、やっぱり同時に一流の研究者じゃなきゃいけないと思いますよ。

**問 宮** 京大出身のある宇宙物理学者が言っていたんですが、その人が大学に入ったときに、もう定年まじかだったと思うんですけど、湯川秀樹がまだ講義をやっていたそうです。それを聴いた人だけでも、講義はお世辞にも上手いとはいえなかった。それでも、この人があの湯川秀樹かと思うと、それだけで励みになった、その人がここにいるというその存在だけです。すごい教育効果があった、そういう述懐しています。それがだんだん研究者と教育者が切り離されて、教育だけやっておればそれで結構というふうになっている。これでは専門学校と変わらないわけですね。そういう傾向がなんか最近ずいぶんできています。近年、「大学改革」が盛んですが、京大ではずっと前から、私が京大に来たのは二十年前ですが、その時分からすでに、一般教養をどうするかという問題はあったんです。教養教育を大学にどう位置づけるかということは基本的な問題ですよ。ところが今回の国際高等教育院の話はどうもそれとは違った筋の話だという気がする。今年に入って文科省から大学改革実行プ



ランというのが出されました。あれを読むと大学改革が国の要請として出ている。すなわちグローバル化に即応した学生をつくるというのが大学改革の主旨。英語をぺらぺらしゃべる学生を育てると。そのためには改革を行わなければならないし、改革を実行するためには大学のガバナンスを強化しなければならない。グローバル化とガバナンスというのが二つのキーワードですよ。大学に端を発する内発的な改革ではなく、外発的な改革というのが率直な印象です。このような形で「改革」を進めていくと、大学から教育のもつべき人間的な要素っていうのが無くなっていく気がするんです。大学の基礎には学生と教師のフェース・トゥー・フェースの関係があって、それが大学の核になればならない。それが「改革」によって消えていくのではないかと懸念があるのです。

**長谷川** ああ、そうですか。細部については存じ上げないのであまり口出しはできないのですが、法人化してから総長のリーダーシップやガバナンスが問われているのは東大でも同じです、秋入学の問題とかね。一般教員の気持ちと少しずれがあるようなところは東大でもないわけではないですね。今、問宮さんがおっしゃった学生と教員の間の一对一の関係っていうのは京大ではどういうかたちですか。一般教育っていうとどうしても大人数の教室でっていうふうになりがちなんですけど。

**問宮** たとえば私どものところでは、一般教育でポケットゼミというのをやっています。少人数のフェース・トゥー・フェースに近い形のゼミで、教室ではなくて教員の研究室でやることが多いんです。それがかなり好評なので、総合人間学部でも取り入れています。**長谷川** それは実質的な担任制度のようなもの？

**問宮** 担任制ではありませんが、受講者には勉学上の指導も行っています。ほかにアドバイザー制度っていうのがあって、学生が希望する先生の下で勉学に関するさまざまなアドバイスを受けます。また副専攻制度というものがあって、学生は自分の属する専門分野以外の特定分野を副専攻に定め、履修することが義務づけられています。主専攻は理系でも、副専攻は文系ということもありうるわけです。学問の幅が広がることはもちろんですが、それ以上に教員との直接的接触の中から得るところが多いのではないかと思います。このようにいろんな工夫はしているんですけども、それが果たし

てうまく機能しているかどうか。

#### 駒場寮と吉田寮

**問宮** その点、駒場寮の果たした教育的役割は大きかったんでしょうね。駒場寮をなくすとき、宇沢弘文先生が来て、若手教員とやりあったそうです。宇沢先生は旧制高校は教育制度としては最高だったと、常々いつておられます。いろんな面白い話もされて、昔は「ビッテbite」という制度（？）があって、単位が取れなくて卒業できないという学生がいると、友人が先生のところに行って、「ビッテ」と頼み込む。「どうかお願いします」という係がいたそうで、古き良き時代ですね。ただ今はどうでしょうか。時代が変われば大学も変わらざるを得ない。常に周りの環境が変わっていきますからね。しかし変わっては困る部分もある。環境が変わったときに大学がどう対応するかという問題は百年、二百年前からあったわけで、大学の歴史は時代との葛藤の歴史ですよ。



旧制一高寄宿舎の面影を残すアーチ



**長谷川** おっしゃる通りだと思います。駒場寮をなくして、そこに

学生の福利厚生施設を建て直したら、学生には非常に評判がよく、学生たちはよく利用しているんですけども、じゃあ寮のほうはどうなったかっていうと、少し離れて三鷹のところに、昔から三鷹寮がありましたけれども、あそこを大きくしたんですね。でも通学時間が片道で五十分くらいかかりますし、学生の自治活動を制限する寮だったので横のつながりができないような寮になっているんですね。ですからせっかく国際宿舍と銘打っていても、学生たちが共同作業をするようなかたちになっていない。本来であれば寮生活っていうのは助け合いとか相互扶助だとか人間関係の相互理解なんかにとっても良い場所なんですけども、それが失われている。個人的にはもう一度新しいかたちの駒場寮をこっちのキャンパスにつくれば、その中で外国からの留学生と一般学生とが同居し生活空間を同じくし、通学時間もほとんどないので密度の濃い教養教育ができるんじゃないかと思うのですが。特に一年生のときなんかはそれがすごく重要だと思うんです。

**間宮** 京大の吉田寮っていうのは古びた寮で、取り壊すという話がありました。

**長谷川** それじゃ、学生さんは？

**間宮** 学生は取り壊すことに大反対なんです。我々からしますと、きれいになればそのほうがいいんじゃないかと思うのですが、反対なんです。寮費が高くなるということもあるんでしょうが、やっぱり愛着があるんじゃないでしょうか。あそこには、夫婦も住んでいたことがあるらしいですよ（笑）。木造のほんとうに汚い建物ですけど、愛着があるんでしょうね。東大はいろんなところに寮がありましたね。伝染病研究所の近くにも。

**長谷川** 白金ですね。

**間宮** 女子寮でしたね。

**長谷川** 白金の女子寮はもう廃寮になりましたね。豊島や追分の寮は建て替えてまだ残っています。

**間宮** 今は寮に入る人もあまりいないんでしょうね。

**長谷川** いえいえ、そういうことはなくて、経済的に寮に入れると非常に助かりますので、寮は常にフルの状態で、選考するのが大変です。昔の駒場寮はさすがに空き室がたくさんありましたけども、

三鷹寮はあんな狭い個室でどうなんだと思うんですけど、常にフルですね。

**間宮** いまの学生には、人と人の付き合いは結構あるんじゃないか。

**長谷川** たとえばサークルとかクラスとかが同じところではそれなりにあると思いますけれども、それがより大きな広がりになるかっていうと、なにかこじんまりした仲良し集団といふところにとどまっているような印象を受けますね。

**間宮** 私は何か二極分解しているような気がしていますね。片方にはいいわいがやがやのにぎやかな関係があり、もう一方には引きこもりがある。別に独居しているわけではないでしょうが、人間関係を特定の関係に限定してしまう傾向が片方にはある。大学に出てこない学生がかなりいるものですから、アドバイザーが学生にメールや電話で呼び出してもなしのつぶてです。どうしたらいいのか、こちらが途方に暮れてしまいます。

**長谷川** いやいや、最近はあるんじゃないでしょうか（笑）。やっぱりそれくらい手をかける必要がある。

**間宮** これも葛藤ですよ。あまり手をかけると学生をますますスポイルしてしまうし、放っておくとますます大学から離れていく。どうしたらいいか、本当にわからないですね。大学院だって学生課をつくらなければいけないんじゃないか。昔とはずいぶん違いますね。

**長谷川** その通りだと思いますね。二十代前半の死亡要因のトップが自殺っていう国は日本だけなんですってね。事故や病気をしのいで。日本の場合二十代前半の自殺率が非常に高いのが近年の大きな問題だといわれていて、やはりそれだけ心の悩みを抱えている人がいるってことで、とても大きな問題だと思います。うちも担任制度はあるんですけど実際にはほとんど機能していないので、できればアドバイザー制度を導入したいというふうに思っているんですが、まだそれが実現できていないので。

**間宮** 京大も悩み相談の制度はありますが、それがはたしてうまく機能しているかどうか、わからないですね。東大もメンタルな面での指導や相談をやっているのですか。

**長谷川** 一応学生相談所で対応しています。専任教員はさほど多く

はないですが、非常勤のカウンセラーの方にそれなりの数お願いしています。だいたいお一人の方のカウンセリング時間が三〇分って言ってましたかね。ほとんどの相談枠は常にフルだっているように聞いています。

**問 宮** メンタルな問題を抱えた学生は駒場と本郷と比べるとやっぱり駒場なんですか。

**長谷川** それはちよっと今数字がないので何とも言えませんけれども、あんまり変わらないような気がします。特に駒場が多いというわけではなく、学内の自殺学生数で見ても、特にどっちかが多いっていうわけではないと思いますね。

**問 宮** 大学に入るまでのその人の歩んできた道と入ってから環境、その落差が大きいと戸惑ってしまって、学校にも来なくなるということがあるんですけど、環境の落差という点は戦前の日本にも私どもの時代にもあったわけです。地方から東京の大学に入りますと、文化的な落差があまりに大きすぎて、自分が矮小に感じられる。

**長谷川** よくわかります（笑）。

**問 宮** 漱石の三四郎なんかそうですね。本郷に行つて、専門の勉強を始めると、すごくギャップを感じる。東京出の学生はとにかくできる。それもガリ勉秀才というのではなく、文学も読めば、思想書も読む。癪にさわるくらい余裕があるのです。

**長谷川** 問宮さんはどちらですか。

**問 宮** 九州の西端、長崎なんです。

**長谷川** それは大きな文化的ギャップがありますね。

**問 宮** ものすごいギャップですよ。駒場はまだ高校の延長といたところがありますが、本郷に行つて専門のゼミに入ると、東京出の学生はもう洋書を読んでいる。当時はアマゾンみたいなものはありませんから、自分で為替を買って外国の本屋から直に取り寄せるんです。そういうのを見ていますと、まったく異次元の世界ですよ。

**長谷川** それは今も昔も変わらないと思いますけれども、新入生が大学生活に適応するときの装置としては一つはクラス。それから一つはサークルですかね。京大さんも語学で大体クラスは分かれるんじゃないでしょうか。

**問 宮** そうだと思いますが。

**長谷川** 我々のところは初修外国語。問宮さんのときもそうだと思いますけども、ドイツ語クラスとか、フランス語クラスで、およそ四十名くらいのクラスができて、そこでオリエンテーション合宿っていつて一緒にいたり、しょっちゅうコンパやったり、それから上のクラスが下のクラスの面倒を見るっていう制度があったりして、そこで何か問題があったら気軽に相談するっていうクラスが一つ。それからサークルはたくさんさんのサークルがあつて一人でいくつものサークルを掛け持ちする学生もいます。そういうふうに、風糸が切れないような仕組みができていうのが駒場の一般的な学生ですね。ただそれでもやっぱり不適應になっちゃう学生さんはいます。

**問 宮** 私が入ったときは文一、文二のドイツ語クラスでした。夏休み前にストライキに入つて。でもそれをきつかけとしてクラスの中でいろんなことを議論するわけですよ。そういったこともあつてかなり密なクラスでした。その中には役人出身で今度山口県知事になった人もいました。京大でもクラス制はありますが、東大ほどいろんな機能を果たしているわけじゃないのは。クラス単位で何かやるという話はあまり聞きません。クラス制って今でも文一、文二っていう割り方ですか。

**長谷川** 文一・二、文三、理一、理二・三の四区分ですね。それから進学振分け制度っていうのがある関係で、クラスの互助制度、試験対策の組織があるんですね。試験の対策をするんでシケ対っていうんですけれども。自分はこの科目の担当、あの科目の担当っていう。ノートテーカーがお互いにノートを融通しあったりするんです。みんなでクラスの点数を高くしようってね。なんかいかにも東大らしいんですけどね（笑）。ちよっと京大の先生からすると考えられないかもしれないですけど。



京都大学 吉田寮



**問 宮** いや、京大でもそうじゃないですか。最近ではどの大学でも試験対策に熱心で、ある私立大学で非常勤をやっていたとき、大学の教務課から試験範囲の詳細を求められてびっくりしたことがあります。なんでも、掲示板で公表するとかで。駒場の頃、九〇〇番教室で講義をやっていたとして、法学（文一）と経済（文二）の学生では熱意がずいぶんちがうんです。一番前の席をとろうというので、前の晩、駒場寮に泊まって、朝一番で最前列の席をとる。そういう学生が文一にはいましたね。希望の官庁に行けるかどうかは大学時代の成績が左右するらしいですからね。ガリ勉タイプは今も昔も変わりません。

**長谷川** 座席をクラスの連中に配るといふようなことはしていません。

**問 宮** 机の上にバーッと本を置いて、仲間の席もとるんです。自分だけのじゃなくて。

**長谷川** そういう互助組織みたいなものかなり浸透していて、クラスの結束というのは進学振分けがあることによって強まっている部分もある。それも善し悪しなんですけれどね。京大との大きな違いは、進学振分けっていう第二の入試みたいなものがあること。今では文二も全員が経済（学部）に行けるわけではないんですよ。

**問 宮** そうですか。

**長谷川** 経済の定員のながしは文二以外からとることになっていますので、文二の学生がすごくよく勉強するようになったって。以前は、文二は文一と文三より点数がちよっと低かったんですけど、今は文二も同じように勉強しないと経済に行けないっていうことですね。

**問 宮** 経済に行けないと、ほかのところに行かざるをえないわけですね。

**長谷川** そうですね。点数が低いところもありますので。文学部のある学科とかですね。でも進学振分けにも良い部分と悪い部分とがあつて、うちの学生は概して京大の学生さんよりも勉強はすると思うんですけども、本当に自分が勉強したいものを勉強しているのか、点数をとるために本当はとりたくないような科目を選択して

いるのではないか。そのところが今非常に問題になっていて、進学振分け制度を改革しよう、いまそういうタイミンクにきています。  
**問 宮** 勉強には、いろんなかたちの勉強があると思うんですけども、ふつうは本を読んで試験のために勉強するっていうことですね。いわゆるタメにする勉強。しかし中には、たとえばプラトンのめり込んで、プラトンを読むためにギリシア語を学ぶとかたちの勉強もある。以前は試験勉強を犠牲にして、ギリシア語を学ぶ、ラテン語を勉強するという学生がいたと思うのですが、そういう学生はだんだん減ってきているのではないのでしょうか。かつての京大にはいわゆる試験勉強はあんまりしないんだけれども他の何かにめり込むという学生がかなりいたような気がする。

**長谷川** おっしゃる通りです。それがやっぱり東大と京大のカラーの違いで。要するに京大の場合には先が保証されているわけですから、いろんなこと、自分がやりたいことを幅広くできるわけですが、東大の場合には第二の入試といつてもいいような進学振り分けがあるので、余計なものに手を出すくらいだったら点数を上げなきゃっていう暗黙のプレッシャーがあるわけですね。ですからそのところをなんとか変えたいというふうに思っているのです。

#### 教養とは何か

**問 宮** 我々のところでも今回の教育院の問題をきっかけに、教養とは一体何なのか、我々は教養についてどのように考えて来たのかっていうことが意識されるようになりました。私も折に触れて考えるんですけども、やっぱりよく分からないですね。東大では教養とはかくかくしかじかであるというふうな議論はあるんでしょうか。

**長谷川** 教養学部の立ち上げのときの矢内原先生の言葉の中に、「偏らない知識を身につけるため」とか、「人格の陶冶」とかそういうのが謳われているわけですけども、そういう古典的な教養っていうことの他に、この時代における教養とは一体何なのかという、教養教育の問い直しはいろんなかたちで議論されている。ただどうしても一つの答えがある話ではないので、学生に対して答える答え方は僕の中では大体決まっているんですけども、それが他の先生と共に

有されているかといえば、そういうわけでもないですね。

**問 宮** 私たちの総合人間学部は、かつての教養部を解体してできたところで、いろんな分野の先生が教えているわけです。学生はいろんな分野を勉強するんですけども、下手すると広く浅くになっしまいそうです。総合人間学部から大学院に入ってくる学生も、「自分は学部のころ新書の神様と呼ばれていた」と誇らしげにいう。間口が広いのはいいんですが、それをどう深化させるかっていうのは重要な問題です。常々学生に対していつているのですが、総合人間学部や人間・環境学研究科というところは、ある学部とある学部を足して二で割るところじゃなくて、ある学部のことも一やって、また別の学部のことも一やって、また一やって、一＋一＋一＝三くらいで勉強しないと駄目なんだ。こうなるとまた教養と専門の話に舞い戻るわけです。教養ばかり追い求めると専門性がなくなる。しかし専門だけを追求すると重箱の隅を突つくことになる。その兼ね合いが非常に難しい。

**長谷川** やっぱり学生の気質にもよると思います。満遍なく勉強したい学生もいるし、ほっといたって脇目もふらず深いところについてやう学生もいる。バランスのとれた横にも縦にも学ぶ姿勢をもった学生の数をどうやって増やすかですね。今うちでは昨今の大学教育のキーワードになっている「アクティブラーニング」、受け身の



東京大学教養学部 時計台

学びにならないで、予習復習をきちんとして、そのぶん先生方もその予習復習をきちんとみるといような授業をなるべく増やそうと心がけているところです。これまではその科目のために予習も復習もしない学生が多かったんですが、いまでは一日四時間ぐらい予習・復習にあてなければいけない、そういう授業も中にはぼつぼつ出ていますね。

**問 宮** 予習復習を徹底させるわけですね。

**長谷川** そのためには教室のデザインといいますが、施設も少し変えなきゃいけない。黒板があつて教卓があつて、机が並んでいるっていう高校の教室に似たような、あるいは予備校の教室に似たような教室も未だにありますけども、そうでないもつとフレキシブルな教室をつくって、教師の側も学生の側も新しい学びのスタイルをつくりあげる、そういう方向に少しずつ移行しつつあります。

#### 大学の存在理由

**問 宮** 最後に大学の役割についてお聞かせ下さい。いま大学のミッションの再定義という言われてますね。つまり大学っていうのは一体何をするとところなんだと。大学はもはや教師や学生にとつての所与ではない。大学とは何かという根本にまで立ち返らなきゃいけないような状況になっています。しかしミッションを厳格に定義して、大学は何々のために存在し、何々を教育するところだということになってしましますと、大学は大学を取り巻く環境に従属するものになり、大学固有の存在理由がなくなってしまうような気がするんです。私は最近、コモンズを研究している関係で、日本の入会、山林原野や漁場についての本を集めているのですが、たいていは戦前から戦後にかけての本、それも生半可な研究じゃないんです。緻密で重厚、全数巻という本もある。古本屋でもあんまり手に入らないものがあつて、そういう本を読みますとね、これが大学なんじゃないかなって思う。五十年、六十年と図書館に収蔵されていて、おそらく誰も読まなかったであろう本があるわけです。それをたまたま入会に関心を持った者が借り出して読んでみると、「うわーすごいな」と目を丸くするわけです。いわゆる役に立つ本、時代の要求する本ばかり集めていると、こういう本は残らなかった



でしょうね。だから大学というところは知のアーカイブみたいなところがあって、普段は使われないけれども、後世ひょっとしたらある人が使うかもしれない。そうした可能性のために大学は存在すると思うんです。

**長谷川** 特に教養教育はそうだと思います。ステイブ・ジョブズがアップルを立ち上げたときに、彼は大学を中退していたわけなんですけども、大学に通ったところ勉強したのが、英語の古い書体とか書式のカリグラフィ、ああいった学問に没頭したわけですね。それが、アップルが最初にコンピュータを立ち上げたときにウィンドウズにはないアップル特有のフォントをつくるのに役立った。単なるテクノロジーじゃなくて、アートとテクノロジーが交差するところで仕事をし、みんな「おっ」っていう製品を作り上げた。ステイブ・ジョブズがPOPを出したときに使ったスライドがあるんですけども、そこに矢印が示されている。あっちに行くと何々、こっちに行くと何方面みたいなやつで、片方がテクノロジーって書いてあって、片方にリベラルアーツって書いてあるんですよ。リベラルアーツに支えられないテクノロジーというものは意味が無いというの彼の持論です。テクノロジーっていうのは何か揃えておけば自動的に生み出されるというものじゃない。何の役に立つかわからないようなパーツがいろいろあって、それを組み合わせ、試行錯誤することによって技術ができる。そういうものですよ。

**問 宮** そうですね。大学には過去からの蓄積があるから、将来のためにそれを役立てることができる。ふだんは誰も見向きもしなかったものが、あるとき永い眠りから覚める。だから、大事なのは学生たちの関心ですよ。関心や興味が知のストックを甦らせる。「たたけよ、さらば開かれん」というのは大学にこそよくあてはまる。何をやりたいかが先にあって、それが大学で蓄積されてきたものを生き返らせる。グローバルゼーションに対応するために全ての講義を英語でやるっていう大学も出てきましたけれど、自分が外国に出て何をやりたいか、それがあれば語学っていうのは独学でも学べますよね。

**長谷川** まあ、必要に応じてですね。

**問 宮** 必要という内面からわき上がるものを持たないと漫然とした大学生活を送る。大学が顧客の必要を見つけてサービスを提供

するのではなく、学生が自分の必要に応じて大学からサービスを引き出さなければいけない。同じ本でも四十年前に読んだときと今とで印象がまったく違うのは、問題関心の深さが違うからです。

**長谷川** 僕がよく言うのは、専門っていうのは賞味期限がせいぜい五年で、専門学部で専門のことを教えても一生その専門で食えるわけがないと。大学っていうのは、特に大学一年生のときに「ああいうことも習ったかな」みたいな、その人生的肥やしみたいな部分が非常に重要で、一、二年生の間にしっかりと耕して、しっかり人生の堆肥みたいなものをたたき込む。それが後の成長を支えていくんだと思う。目の前の役に立つことだけを教えるのではやっぱりいけないと思いますね。



折田彦市（元第三高等学校校長）像  
（京都大学 百年史より）

### 大学の将来

**問 宮** 大学というのは常に二律背反的な矛盾した要素を抱え込んでいますね。最初に言った流行と不易という関係もそうだし。そのようないろんな矛盾を抱えているものだから、大学の改革は永久的な改革になるわけで、これで改革は完了、というわけにはいかない。改革が完了して定常状態に入ったと思っても、また新しい問題が出て来ますからね。留まるところがないわけですよ。

**長谷川** 僕も三十年前の人文・社会・自然の三分野をとるような一般教育に、あの時代に戻ればいいなんてことも思っていない。カリキュラムにも賞味期限があって、絶えず見直しをしていく必要があると思います。完成型の教育っていうのはたぶん無いのだと思います。

**問 宮** ただ、先へ先へ進んでいっても昔のほうが良かったという面が必ずありますからね。過去の教育を捨て去ってしまうとまた大きな問題が起こってきますしね。

**長谷川** もちろんそうですね。

**問 宮** 永久的な改革といいましたが、この十年、二十年、われわれの仕事は教育研究にあるよりは大学改革にあるという、笑うに笑えない状況にあるのも確かです。研究や教育はあまりできなくて、改革が仕事みたいになっていないでしょ。改革をやるんだったら、大学教員にも少し時間と余裕を与えるような改革もやって欲しい。時間をくれるような改革っていうのはないんでしょうかね。

**長谷川** こんなこというとまた怒られちゃうかもしれないですけど、一つは学生の人数を少し絞り込んでもいいとは思っているんです。若者の人口が少なくなっているのに学生定員はそのまま、教員だけは定員削減くらって、京大でもそうだと思いますけども、うちの学部でももうこの先生の後はとれないっていうのがどんどん出てきています。負担の増大につながっていますので、大学で教える学生の適正規模っていうのもそろそろ考えていい時期じゃないかと思っています。

**問 宮** そうですね。大学の規模があまりにも大きくなり過ぎましたね。あれもこれもやることを要求されて、今では地域貢献とか高大連携とかを担わされている大学も多い。確かに何らかの地域貢献は必要でしょうが、大



旧第三高等学校正門および門衛所（1897年竣工）（京都大学 百年史より）

学間競争が激化して、生き残るためにあれもこれも背負わざるをえなくなっている。その点、東大は余裕があると思いますが。拡大路線をとると、きりがなくなるんじゃないか。縮小していくという方向もありますよね。

**長谷川** そうじゃないと若い人たちが研究者になりたいと思わないですよ。先生方があんなに忙しいんだったら。先生って忙しい割に、給料もあんまり良そうじゃない、とかって言って。本当に、我々大学教員の人材育成っていうのは今すごく難しい段階にきていると思います。

**問 宮** 憧れるような職業じゃだんだんなくなってきましたね。

**長谷川** そうなんです。学生から光って見えるかっていうと、なんか先生方が疲れているような感じがして。

**問 宮** 教養科目の科目数っていうのは、我々のころはそれほど多くなかったですよ。人文・社会・自然それぞれ十二単位。それぞれ最低三科目とればクリアしたわけです。今はもつと多くなっている、広がっているんですよ。

**長谷川** 総単位数でいうと大綱化以降、全国でみると少し少なくなっているんですけど、バラエティは増えていますね。東大の場合はほとんど変わってないんですが、全国の一般的な大学は大綱化以降、一般教養の履修単位数は減っているのが実情だと思いますね。

**問 宮** 教養学部では標準的なコマ数は一人の先生あたり何コマですか。

**長谷川** それは理系、文系、文系の中でも人文、社会、外国語でずいぶん違いますよね。一番多いのはやっぱり外国語の先生ですね。半年単位で考えて、外国語ではお一人四ぐらいじゃないでしょうか。人文社会だと二コマか三コマですかね。

**問 宮** その二つというのは、一般教養ですか。

**長谷川** ここは三、四年生の授業もあるので、大学院以外のコマ数です。大学院まで入れるともっと増えると思いますけども。

**問 宮** 大学院をのけて二つないし四つということですか。

**長谷川** 三、四年生のコースまで入れると五が多い方で、たとえば僕なんかだったら心理学や初年度ゼミなどを教えますが、半年で三くらいでしょうか。

**問 宮** ある年は二コマで、別の年は四コマというふうに順繰りや



るっていうことはないんですか。

**長谷川** 先ほど申し上げた部会、昔でいうと教室で、外国語の先生方はサバティカル制度を設けているので、きちんと順番で半年あるいは一年休めるというのが制度化されています。けれども自然科学系では多くの先生方は基本的に研究室で実験なさいますので、授業コマ数はそんなに多くないんですけども、長期の休みっていうのはないですね。

**間 宮** 京大ではもう教養教育なんていいじゃないかという人もいますよ。外国語さえやってくれればいい、教養に張り付いているポストを再配分してくれ、と。

**長谷川** さすがに東大にはないですね（笑）。

**間 宮** 東大は教養に関しては教養学部という独自の制度をもっているおかげで、ずいぶんインディペンデントで自主的にやっているように見えますね。

**長谷川** そのぶん改革もしなきゃいけない。さっき間宮さんがおっしゃったような改革疲れは教員にのしかかっていますけれども、本郷に対して全学学生の半分を預かっているという自負がありますので。自負と責任ですよ。

**間 宮** 激務で大変でしょうけれども、お体を壊さないようにお願い



人間・環境学研究科（右）（京都大学 百年史より）

います。任期はあとどれくらいですか。

**長谷川** あと三ヶ月なんです。

**間 宮** よかったですね（笑）。我々の研究科長なんかも激務で気の毒なくらいですね。

**長谷川** 今どなたでしたっけ。

**間 宮** 富田（恭彦）さん、哲学の先生です。今二期目なんです、よく体をこわさないものだと感じます。今日はお忙しい中、貴重な時間を割いていただいて、本当にありがとうございました。



対談終了後、キクマル君と記念撮影

# 野の植物を活かす

## 「これまで」と「これから」



瀬戸口浩彰（せとぐち ひろあき）  
一九六二年東京生まれ。日本歯科大学歯学部、東京都立大学理学部  
助手、京都大学総合人間学部助教を経て、現在 人間・環境学研  
究科、相関環境学専攻教授。専門は植物の進化と保全、分類に関する  
研究。

本稿は東日本大震災からまだ一年間を経ない平成二十四年二月に、本研究科が主宰した公開講座の発表内容に基づいている。この講座は、地震予知や原子力発電に代表される科学技術に対する不信感が社会で高まったことを受けて、科学技術への対峙について、過去を振り返るとともに将来を考えようという趣旨で開かれた。私が主張したかった内容は、事実に基づいた科学技術と、これに人の期待や損得勘定を重ねた科学技術の応用は、大きく異なることである。本稿では、日本人の食生活に欠かせない重要な植物・ダイズを例にして、この作物がいかに長期にわたる連綿としたサイエンスによって、現在の私たちに恩恵を与えているかについて述べたい。科学とは、人間の世代を超えた長期的なスケールで発展するものであることを忘れてはならない。

### 身近な植物ダイズ

ダイズは、私たち日本人や東アジアの人々にとって、味噌や醤油、豆腐などの食材として身近な植物である。また、油脂は食用や印刷用インクに使われ、その搾り粕は家畜の飼料に利用される（ダイズの種子は、約四〇％がタンパク質、二一％が脂質、

三四％が炭水化物、そして五％が灰分である）。残念ながら日本では生産量が少なく、その大部分をアメリカなどに依存している。アメリカはダイズを国家の戦略的農作物に指定しており、その改良に熱心であり、改良に貢献しようる研究に対して膨大な国家予算を投じてきた。

ダイズの学名では *Glycine max* (L.) Merr. という。私が子どもの頃は、枝豆とは枝葉と根が付いた植物体のまま束ねられているものであった。莢を枝から外すのは、子どものお手伝いである。子どもは無意識にも、ダイズの根に粒（根粒・バクテリアを宿した根の組織で、このバクテリアは空气中に八〇％存在する窒素を固定して、最終的にはタンパク質合成に貢献する）が付いているのを見ていたものである。

さて、本題である。このダイズは野生の植物を人間が改良したものであり、その野生種が日本国内でも、河原などにふつうに生えていることを、あなたは知って居るであろうか？ しかも、その見かけが、ダイズと違って蔓になり、他の植物に巻き付いているとしたら…

### ダイズの先祖は蔓になる雑草

このダイズの野生種は、ツルマメという（図1）。学名は「グリシンソヤ」 *Glycine soja* Sieb. et Zucc. という。「おやこ」と思った方も居られよう。野生種のように醤油を意味する *soy*（ラテン語の語尾変化の関係で *soja* になっている）という名前がしっかりと付けられている。しかも、その名前を付けた二人のうちの片方は、Sieb. とあるように、江戸時代末に長崎出島に來ていたシーボルトである。シーボルトは、出島に出入りする蘭学者・医学者の弟子に頼んだり、出島で飼育している牛・馬の「かいば」の中から、植物を集めた。そして日本人の画家に精緻な植物図を描かせ、



図1 ダイズの野生種ツルマメ（上）と栽培ダイズ（下：弥彦むすめという品種。新潟県弥彦村にて）



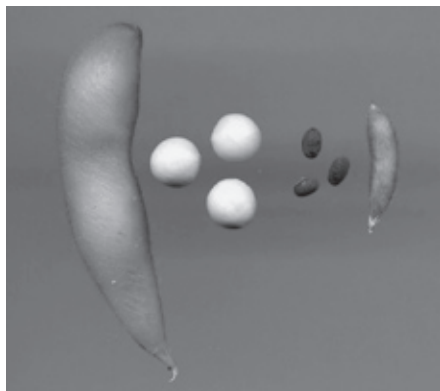


図2 ダイズの莢と種子(左)とツルマメの莢と種子(右)ダイズはエンレイという品種である

標本を作製した。さらに日本人に和名を聞き出して絵画に併記している。日本を追放されて帰国した後には、ミュンヘン大学の植物分類学者ツツカリニー(Nuccari)の学術的な支援を受けて新種を記載していった。Soyは醤油の醬の発音に由来している(昔のツルマメの名前は野豆など)。種小名をsojaにしていることは、この植物が醤油をつくるダイズに関連をもつことを示唆している。シーボルトはこのような蔓になる野生種を、ダイズの祖先種、あるいは近縁種と認識していたのである。

ツルマメは、日本(北海道・鹿児島の本土部)、朝鮮半島、シベリア東部、中国東部(ロシア国境・福建省)、台湾などに幅広く分布する。河原などの草地に、長さ数メートルの蔓になって伸び、京都であるとも八月頃からピンク色の花を咲かせる。豆の莢は、枝豆の莢の六割ぐらいの大きさだが、見かけは立派な「枝豆」である。豆(種子)は小さく、小豆よりも小さい。色は黒っぽい褐色である(図2)。これは皮に

多量のアントシアニンが含まれているからで、この形質を受け継いでいるダイズの栽培品種が、いわゆる黒豆である。

ダイズは、今から四千年以上前から中国において、ツルマメを元にして栽培化が始まったとされる(異なる見解も多くある)。中国国内には現在、二万種類以上の地域栽培品種が存在すると言われる。この中には、蔓になる品種も含まれており、そのほかの形質(豆の色や形、大きさ、花の色、葉の形、植物体の大きさなど)も様々である。様々な大豆の栽培品種には祖先のツルマメの様々な遺伝形質が多様に残されており、これらの多様性を利用して品種改良が試みられてきた。日本や中国も盛んに行ってきたが、それ以上に熱心に取り組み、そして成功したのがアメリカ合衆国であった。しかも、その取り組み方が半端でなく長期的な視点から行われてきたのである。

#### 長期的な揺るぎのない国家戦略

その端的な例が、幕末に黒船を率いてきたペリーの艦隊である(図3)。ペリー艦隊には、日本や周辺地域の植物調査や資源調査が重要な任務の一つにあり、二度目に来日した際(一八五四年)にはダイズやツルマメを収集して帰国している。アメリカ政府はこの時期に、極東アジア地域からダイズやツルマメの収集を行っていた。元来、ダイズもツルマメもアメリカ大陸には無かった植物であるので、この資源植物は極東アジアから収集する必要があったのである。一九〇〇年頃からは、大規模な圃場を

使って本格的な育種開発が始まったようである。長期的な視点から資源収集を続けたことが、いまのアメリカ農業の繁栄につながっていることを私たちは忘れてはいけない。広大な土地で大規模栽培を行い、大量の安価な植物油を生成することが主な目的であった。そしてその搾りかすは加熱したのちに家畜の餌(ダイズミール)に利用したのである。これが、短期間に家畜を肥育するアメリカ特有の低コスト畜産の実現をも可能にした。



図3 1853年にペリーが横浜(Yoku-Hama)に上陸した様子(1853年)  
Lithograph by Sarony & Co., 1855, after W. Heine

アメリカ農務省(USDA)では現在のところ公開分だけでも一八、六〇〇種類のダイズ、および七〇〇種類ほどのツルマメを維持管理して、研究目的の使用に対して無償で頒布している。日本でも、つくば市にある農業生物資源研究所で八、〇〇〇種類以上のダイズと二〇〇種類ほどのツルマメ

## JOURNAL OF AGRICULTURAL RESEARCH

VOL. XVIII WASHINGTON, D. C., March 1, 1920 No. 11

## EFFECT OF THE RELATIVE LENGTH OF DAY AND NIGHT AND OTHER FACTORS OF THE ENVIRONMENT ON GROWTH AND REPRODUCTION IN PLANTS

By W. W. GARNER, Physiologist in Charge, and H. A. ALLARD, Physiologist, Tobacco and Plant Nutrition Investigations, Bureau of Plant Industry, United States Department of Agriculture<sup>1</sup>

## INTRODUCTION

The importance of the relationships existing between light and plant growth and development has been so long recognized and these relationships have been of so much interest to investigators that a very extensive literature on the subject has been developed. For present purposes it

図4 光周性について最初に発表された Garner &amp; Allard による論文

を維持管理しており、こちらも研究目的の使用に対して無償で頒布している。しかしこれらの植物の起源地である日本のほうが、収集資源量はずっと少ない。

ダイズは開花のタイミングが日長時間の影響を受けやすい代表的な植物である。夏至を過ぎて日長が短くなるとともに、茎と葉を茂らせる「栄養成長」を止めて、花を咲かせる「繁殖成長」のステージにシフトする。これは光周性と呼ばれる現象で、中学や高校の生物の授業で教える内容である。この教科書に掲載される内容が発見された一九二〇年の Garner & Allard による研究で、このときに用いられた二つの植物のうちの一つがダイズであった(図4)。しかし、「栄養成長」から「繁殖成長」にシフトするための日長に対する感受性は、品種間で大きな違いがある。これは野生種で

あるツルマメが北緯六四度(シベリア東北部)から二四度(中国広東省や台湾)まで広く分布しており、緯度に応じて光に対する感受性を違えていて、生育地に適した開花のタイミングを測っていることに起因している。ダイズも当時はこれほどまで幅広い緯度ではなかったが、様々な場所で栽培されてきたことから、日長への感受性を違えた、高緯度地域と低緯度地域に適した栽培品種が作成されていたのである。アメリカは広大な土地を活かすために、東アジアから収集したダイズを、さらに「もっと北で」「もっと南で」栽培可能な品種作りに着手した。これがアメリカ農務省が作成した一三種類の成熟期グループ(Maturity Group: MG)である。MGは北から南に向けて、一三の緯度ゾーン毎に00, 01, 02, ..., IXがグループ分けされている(図5)。そして、各緯度に適した種子収量が得られるように「栄養成長」から「繁殖成長」にシフトする品種群が選ばれている。ここで面白いのは、当初に農務省が開発したのは合衆国の内部用であったので、合衆国内の最北部からローマ数字でI, II, III...とMGを作っていたのだが、育種の過程で「もっと北で」「もっと南で」栽培が可能な品種が作成できたために、高緯度地域に向けてはMG 0が開発され、さらに北で栽培可能なMG 00, さらにMG 000が開発されて、カナダでも大豆の栽培が可能になったのである。このMGの数字は、育種の過程において、当初には想定外の品種改良が出来たことを示している。同様にMG Xの開発は、赤道直下でも大豆の栽培が可能

にした。現在、ダイズの生産量が最も多いのはブラジルであるが、それを可能にしたのもアメリカ農務省が作り出したMG Xである。ペリー艦隊が日本でもコレクションをしていたように、連綿と続く長期的な国家戦略がもたらした恩恵であると評価されよう。国家百年の計が世界の食料増産を可能にした典型例である。

どのMGを栽培に用いるかは、生産者にとっては重要なことである。例えば、高緯度地域のMG 0の品種を低緯度のフロリダ州で栽培すると、植物体がまだ小さいうちに開花・結実してしまうために、種子収量が激減してしまう。逆に、低緯度地域用のMG VIIを高緯度のミシガン州で栽培すると、いつまでも茎葉が茂るだけで開花する前に晩秋を迎えてしまう。ダイズの品種選択は、生産者にとって極めて重要なことなのである。図6は、一三のMGを京都大学の北部キャンパスにある圃場で育てた時の一例である(すべてのMGを同じ場所ですべて育てると言う農学的に「意味の無い」

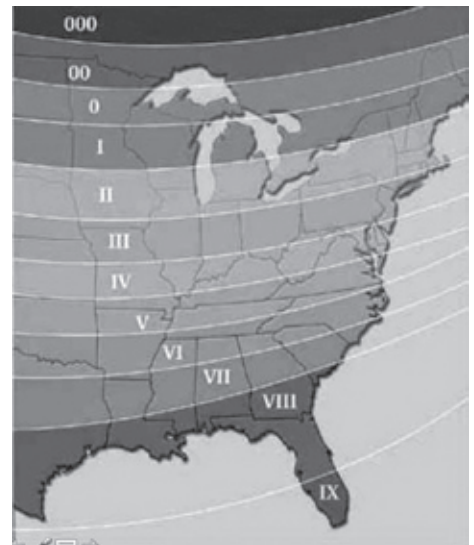


図5 北米におけるダイズの Maturity Group の適用範囲  
出典：The Missouri Soybean Merchandising Council



## MGの遺伝的背景

植物が日長を感じて花を咲かせる仕組みには、三つの段階がある…光受容系、概日時計系、花芽形成系である(図7)。著者の研究室では、このアメリカ産MGが

試験は、これまで誰もやっていなかったもので、初の試みである。六月に一斉に播種したもので、左側がMG 0の品種で、早期のうち大きく成長することを止めて開花結実しており、すでに莢が茶色く変色している。これに対して、右側のMG IXの品種は、ずっと茎を伸ばし続けて、写真を撮影した九月上旬によく開花した。MG 0の品種を南で育てると、広大な農地で巨大なコンバインを使って大豆を収穫するには収支が合わない貧弱なサイズしかできない。



図6 京都大学の圃場で同期間に育成したMG 0(左側: Wilkinというミネソタ州で使われる品種)とMG IX(右側: Jupiterというフロリダ州で使われる品種)。MG 0では莢が完熟しているのに対して、MG IXでは、ちょうど開花が始まっている。2012年9月7日撮影。

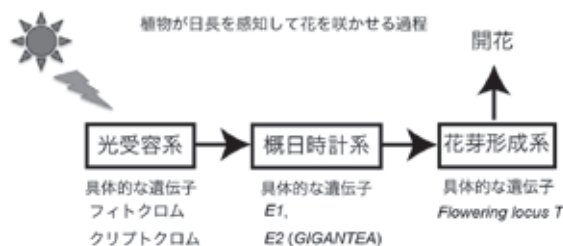


図7 植物が光周期によって開花を制御しているしくみ

種について、E1-E4の遺伝子の塩基配列色素タンパク質を作る遺伝子である。すべての13MGの三品種ずつ、合計三九品種について、E1-E4の遺伝子の塩基配列

緯度に応じて開花時期を制御している遺伝的な仕組みを明らかにする研究をしてきた。ダイズにおける開花時期を制御する遺伝子には8種類があることが長年の研究でわかっていったが、単に染色体上の場所が特定されているだけのものが多い。このなかで遺伝子がハッキリと同定されているのがE1-E4の遺伝子である。日本産のダイズでは、これら四種類の遺伝子だけで、開花時期の制御の七〇%がまかなわれている。E1とE2は概日時計系の遺伝子、E3とE4は光を受容するフィトクロムという

を解析した。

その結果は、まだ論文として受理に至っていないので、著作権の関係で提示できないが、E1とE2の二つの遺伝子が、北で栽培されるMG 000 ~ MG 1において、全ての品種で特別な塩基配列を保有していた。これは遺伝子の塩基配列が変わることによって、遺伝子の機能が低下して、花を咲かせる遺伝子にブレーキをかける力が弱まり、結果として花がすぐに咲くように変化していたのである。

アメリカ農務省は、高緯度用ダイズの品種改良において、これら二つの遺伝子を把握していた訳ではなく、早く花が咲く品種の交配を繰り返すことをしていた。この作業の実質が、E1とE2の二つの遺伝子に突然変異が起きている個体の選抜であったことになる。かくして、アメリカ北部からカナダ中部にいたるエリアでもダイズの耕作が可能になったのである。

いまの日本は人口縮小期に入っているのが実感が無いが、地球全体の人口は急加速で増え続けており、新興国での生活水準の上昇は、ダイズなどの食料への需要も急増させている。現在、世界の大豆生産の大部分はアメリカが開発したMGである。その背景には百年の計で、着実に遺伝子資源を集めて育種を続けたアメリカ農務省のぶれない戦略があったことを認識してほしいと思う。最後に、ペリーの黒船が日本に来る少し前に没した渡辺華山の言葉でこの稿を終えたいと思う。「眼前の繰廻しに百年の計を忘る勿れ」

# 文系が見た福島原発事故

杉万俊夫 TOSHIO SUGIMAN



杉万俊夫（すぎまん としお）  
一九五一年生まれ。九州大学大学院教育学研究科博士課程修了。学術博士（大阪大学）。一九九四～一九九七年日本タリプ・ダイナミックス学会会長。現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。国際応用心理学会フェロー（名誉会員）。専門はグループ・ダイナミックス。

## 私と原発

私の専門分野はグループ・ダイナミックス（集団力学）。社会学や心理学の理論をベースに、組織やコミュニティなど、さまざまな現場を改善・改革するために当事者と協同的実践を行う分野である。福島原発事故が起きるまでの一〇年間、原発は、私にとってそのような現場の一つだった。具体的には、原発という組織の中で、何よりも安全を重視する文化（安全文化）を醸成するにはどうしたらよいかという問題に取

り組んだ。事前のアンケート調査で良好な結果を示した職場の日常活動を徹底的に調査し、それを他の職場に発信していった（写真1）。

それだけに福島原発事故の衝撃は大きかった。自分たちが地道にやってきた実践研究が根こそぎ吹っ飛ばされた感じだった。メルトダウンには至らぬよう、多重防護がなされていると言われていた。かりに全電源を喪失しても、非常用電源で原子炉を冷却しメルトダウンを防ぐことができると思っていた。しかし、……。原発を家屋に例えるならば、「私たちが一階部分や二階部

分の安全に取り組んでいた間に、地中の柱にシロアリがまわっていた」——そんな挫折間に襲われた。原子力の専門家を集めた組織（国の委員会や原発安全のための機関）は、何をしていたのか。あれほど、多重防護の頑健性を標榜していたのに。これほどまで安全神話のシロアリがまわっていたとは（写真2）。

一九九〇年代の初めまで、八時間を超える電源喪失は、原子力安全委員会の想定シナリオに入っていた。それが、「原子力立国」の掛け声とともに、急速に「想定外」にされていった。その動きに疑問を呈する声は、意図的に遠ざけられた。こうして、福島前夜までには、原子力関係者の間で、メルトダウンにつながる長時間の電源喪失は想定外になってしまっていた。

なぜ、想定外になってしまったのか——その根は深い。本稿では、まず歴史の観点から、次いで組織論の観点から、問題の根深さを見ていこう。

## 歴史的観点——専門家抜きの導入

敗戦後七年間の占領下では、わが国の原子力研究は禁止され、サイクロトロンなどの実験設備はことごとく解体された。サン



写真1 福島第一発電所1号機制御室にて（2007年、左：著者、右：吉川榮和京大名誉教授）



写真2 津波に襲われる福島第一発電所

① 杉万俊夫「グループ・ダイナミックス入門——組織と地域を変える実践学」（世界思想社、二〇一三年）を参照。

② 原子力関係者の間では、「原発」という言葉は好まれない。原子力発電（所）という言葉が使用される。「ゲンバツ」という破裂音を含む発音が、一発ドカンを連想させるからだろう。



フランススコ講和条約で独立を回復後、日本学術会議では原子力研究の再開が議論されたが、生々しかった広島・長崎の経験、そして、当時すでに開始されていた米ソの核兵器開発競争に巻き込まれることへの強い危惧から、原子力研究の再開は見送られることになった。

しかし、政治家、財界人の間では、原発導入への機運が高まりつつあった。中曽根康弘を中心とする超党派の政治家集団は、原発導入に向けての議論を進めていた。彼らは、遅々として進まない学会の動きに業を煮やし、一九五四年、補正予算に二億円を上回る多額の原子力研究予算（中曽根予算）を盛り込んだ。それを新聞報道で知った研究者は唖然とした。自分たちの議論を待たずに、そのような決定がなされるなど予想もしてなかったからだ。官僚も、まずは学会が決定するものと思っていた。予算はついたものの、原子力の知識もなく、どう使っていくのかわからない。予算の大半を余す結果となった。

原発導入を積極的に推進した財界の中心人物が正力松太郎だった。正力は戦前に官僚から読売新聞に転身、プロ野球を創設した。戦後は、民放テレビ事業にも進出した。一九五五年、太平洋ビキニ環礁で行われた米国の水爆実験で、第五福竜丸の乗員が被曝、全国的な反核運動、反米運動が巻き起こった。この運動が共産主義化につながるのを恐れた正力は、外国人原子力研究者の招へい、原子力平和利用博覧会など、原子力平和利用の一大キャンペーンを展開した。原子力平和利用博覧会は、一年がかりで全



写真3 第三の火

国十一か所で開催され、三〇〇万人の入場者を集めた。広島では、平和祈念資料館の通常展示を片づけて開催。当初は世論の猛反発を受けたが、結果的には多くの入場者があり、世論も変化した。その後、正力は政界に転身、経済団体を巻き込んで原子力平和利用懇談会を発足させた。こうして、企業からの米国視察も増え、政財界の原発推進体制ができた。

写真3は、筆者が小学校六年生の時に使った国語の教科書、しかも、その冒頭の章「第三の火」である。当時は珍しかったカラー印刷だ。この背後に国策があったのは言うまでもない。しかし、私の学級担任の先生も含めて、ほとんど左翼政党の支持

者だった教員が、未来への希望を込めてこの章を教えていた。先の原子力平和利用博覧会も「第三の火」も、悪魔の火を平和の火に変える科学技術に、広範な国民が素朴な信頼と期待を寄せていたことを示している。

一九五〇年代から六〇年代半ばまでの黎明期を経て、一九六〇年代半ばから原発の大量建設の時代に入る(図1参照)。とくに、一九七〇年代にお

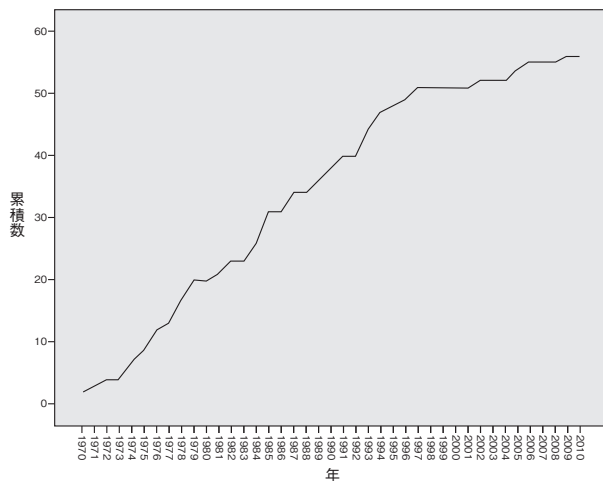


図1 わが国の原発数の変化

ける二度のオイルショックは、原発促進の強力な追い風となった。その追い風は、スリーマイル島原発事故（一九七九年）、チェルノブイリ原発事故（一九八六年）を遠い外国の話にしてしまった。一九九〇年代になると、地球温暖化対策の切り札として原発が評価され、わが国は「原子力立国」を目指すことになる。

### 組織論の観点——「原子力村」の構造

一九六〇年代半ばからの原発推進は、どのような体制で行われたのだろうか。その体制は、巨大な産官学トライアングルだった。まず、官から見ていこう。原子力行政の特徴は、文部省（現・文科省）と通産省（現・経産省）の二元的コントロールがなされたことだ。しかも、文部省では科学技術庁、通産省では資源エネルギー庁という外局が中心となった。前者は開発研究、後者は実用化という分担はあったが、互いの勢力拡大が試みられたことは言うまでもない。

総理府（現・内閣府）には、原子力行政の最上位機関として原子力委員会が設置された。原子力の安全規制については、総理府の原子力安全委員会と、通産省の原子力安全・保安院というダブルチェック制がしかれた。しかし、ダブルチェック制は、下手をするとな責任体制にもなりかねない。

また、通産省の中では、資源エネルギー庁が原子力を推進し、原子力安全・保安院が安全規制に当たるという仕組みがとられた。これは、原子力推進のアクセルを踏む組織

と、安全重視のブレーキを踏む組織が、同じ通産省の中に存在することを意味している。「原子力立国」の大きな流れの中で、アクセルがブレーキよりも優越することは必然であろう。

次に、産官学トライアングルの産に目を転じよう。原子力産業は、原発を一部とする巨大な産業システムである。図2に示すように、ウランの採鉱から使用済燃料の処理までを包含する。また、発電所を中心にそれぞれの施設を建設するメーカーなしに原子力産業は存在しえない。このような巨大な原子力産業は、原子力行政を司る「官」と原子力の研究開発を受け持つ「学」と巧みに協調しつつ、原発促進を進めてきた。

その「巧みな協調」は、「官」に対しては、官僚の天下りを受け入れ、「官」とのパイプとすることによって行われた。一方、「学」に対しては、多額の研究費や研究上の便宜を供与することによって、原発推進の学問的支持を獲得することによって行わ

れた。ここに、多くの御用学者が生まれることになる。

以上、産官学の原子力村トライアングルについて述べてきたが、このトライアングル以外に、マスコミ、一般市民の存在を忘れてはならない。マスコミは、原子力業界で安全を脅かす事件が起こるたびに、それをセンセーショナルに報道してきた。しかし、その報道は、原子力に関する明確な将来ビジョンに基づいたものではなかった。もし明確な将来ビジョンに基づく報道をなすのであれば、事故やトラブルのみならず、原子力業界でなされた前向きな努力に対する評価も報道されるべきだろう。しかし、筆者が知る限り、そのような報道がなされたことはほとんどなかった。つまり、マスコミの基本スタンスは、悪役である（より正確には、必要悪である）原発の失態をセンセーショナルにたたき、読者・視聴者の関心を煽る域を出なかった。

では、一般市民はどうだったのだろうか。一般市民と言っても、原発立地地域に住む

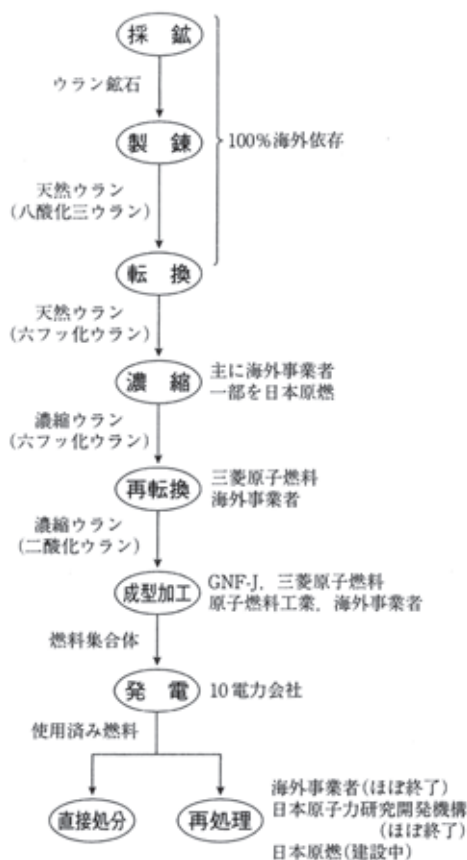


図2 核燃料サイクルの流れ (3)

③ 出典「新版・原発を考  
える50話」(西尾漢、岩波  
ジュニア新書、二〇〇六年)。



住民と、原発から遠く離れた地域に住み、電気の恩恵だけを受ける人々を分けて考える必要がある。原発立地地域の住民は、総じて原発についてよく知っている。また、原発に雇用される人、原発関係者を顧客とする人々など、経済的に原発に依存して生きている。彼らは、総じて、原発に肯定的だ。

一方、原発から遠く離れた地域（都市部）に住み、原発の恩恵だけを受ける人々にとって、原発は、NIMBY問題そのものである。「その施設が必要なのは十分わかる。でも、Not In My BackYard（自分の裏庭に作るのは、まっぴらごめん!）」。そんな一般市民には、電気はコンセントから湧き出してくるものだ。それが、原発で発電された電気であろうと、火力発電所で発電されたものであろうと関係ない。水道の蛇口をひねれば水が出てくるように、コンセントから電気が湧き出てくるのは当たり前なのだ。

行動を決めるもの——  
「他の人は皆こう思っているだろう」

私たちは、自らの意思によって自らの行動を決める場合もあるが、多くの場合は、「周りの人々は皆こう思っているだろう」という判断によって行動を決する。株の売買は、その典型だ。「多くの人たちは、この株を買いに出るだろう」という予想によって株を買いに出る。欧米ほどには、「個」の観念が確立していない日本では、このようなメカニズムが欧米よりも強く作用する。しかし、それ自体は、決して欧米

よりも日本が劣っていることを意味しない。東日本大震災の後も、避難所で日本人が示す秩序だった行動には、外国から賛辞が送られた。その秩序だった行動は、「周りの人は、自分勝手をしてはいけないと思っている」と、みな思っていたからだろう。

では、避難所と原子力村の違いはどこにあったのか。原子力村という言葉は、しばしば批判の言葉として使われる。しかし、原子力のような特殊な技術を土台とする世界が「村」を形成するのは当然である。むしろ、村のあり方にこそ、問題があったのではない。村の中には、意見や利害を異にする集団が存在する。しかし、いかに意見や利害が異なっていようと、村の存続のためには、時として集団同士で激しく議論を戦わせる必要があるだろう。

しかし、先に述べた歴史のように、わが国の原発導入は、一部の政治家と財界人による強引な決断によって推し進められた。原子力の研究者も、当初は「蚊帳の外」だった。また、組織論で述べたように、その後の原発推進体制も、個々の関係者が自らの利益を追求することが最優先され、「原子力村」全体、あるいは、国家的規模での判断などほとんどなされなかった。このように、個々の集団が自らの権益だけに捕われていたこと、他の集団との関係は、自らの権益を守るためにのみ保持する関係になってしまったこと、そして、自らの権益にとつての村しか考えなくなったこと——そこに、「皆、想定外と思っている」と安直に思いあつてしまう原因があつたのではなからうか。

今後——リスク概念の再検討

福島原発事故について論評するからには、今後の原発について見解を述べるのが義務だろう。従来、原発を採用するか否かの判断には、リスクの概念が用いられてきた。リスクは、ダメージと（ダメージを受ける）確率の積と定義される。ちなみに、福島原発事故のようなマルチダウンは、発生確率が百万分の一と見積もられていた。しかし、このようなリスク評価そのものに問題はないのだろうか。

いかに発生する確率が微小であろうとも、発生事象を社会が受け入れることができるかどうか——まずは、この判断が必要だろう。自動車事故も航空機事故も、発生すれば、遺族は悲嘆に暮れるし、裁判闘争にもなる。しかし、自動車事故も航空機事故も、社会的に受け入れられている。したがって、あとは上記のリスク評価で採否を判断できる。しかし、マルチダウンのような事故は、果たして社会的に受け入れられるものなのだろうか。福島事故は、その判断を大きく変化したのではない。原発が、リスクによる判断を超えたダメージを与えうる技術であること——これが福島事故の最大の教訓だろう。



暖め、そして部屋の端に配された煙突から排気されてゆく(図2)<sup>②</sup>。このようにカンは、煮炊きという日常生活に欠くことのできないエネルギーの利用に際して生じた熱を、暖房として再利用するものであり、資源の有効利用という観点からしても、すぐれたシステムである。

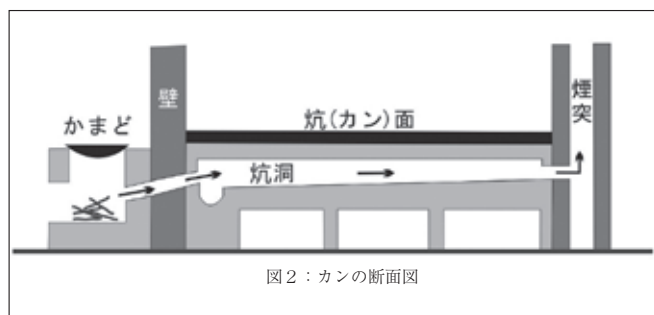


図2：カンの断面図

熱利用の構造からわかるように、カンは「オンドル」と呼ばれる朝鮮半島の床暖房システムと類似している。張国慶は、中国の南方ではベッドが、北方ではカンが使われていることに注目して、その来歴を検討し、中国ではベッドで眠る習慣が先行していたが、高句麗においてカンが発明され、それが中国北部一帯にひろがっていったとする<sup>③</sup>。高句麗は、七世紀に唐と新羅の連合軍に滅ぼされるまで、朝鮮半島から中国東

北を支配していた国である。カンとオンドルは、中国東北と朝鮮半島の伝統的な暖房システムとして共通した歴史をもっているのである。

中国では東北地域だけでなく北方の農村で広くカンが使われている。中国西北部に位置する黄土高原で調査している際にも、カンに腰掛けて農民の話を聞いた。また山東のカンについての研究では、山東省の西南部ではベッドが使われ、省都である済南あたりの中部ではベッドとカンが兼用され、さらに東の半島部に入るとカンが卓越するとされる<sup>④</sup>。北方のカンと南方のベッドの境は、およそ黄河あたりと考えることができそうである。

### バイオマス・エネルギー

二〇一二年夏の調査は、地理学の研究者たちと長春に出かけた。全国各地から集まった総勢一〇名で、総合的に中国東北の地域構造に関する調査研究を進めるためである。それぞれが、都市の歴史構造、経済の現状、観光開発、民族の形態などの分担した研究テーマをもっており、私が担当するのは農村と農業の変化である。

長春は人口三六〇万人(二〇一〇年市区人口)の大都市であるが、市街地周辺には中国の穀倉地帯の一つに数えられる広大な農地がひろがっている。夏になるとそこでは、トウモロコシと米が主に作られている(写真3)。二〇一〇年の統計では、長春市に属する六区四県市の穀物播種面積は一一五万haであり、このうちトウモロコシ

の播種面積は九〇万ha(七八%)、水稻は一七万ha(一五%)となっている<sup>⑤</sup>。村の中で見たトウモロコシの茎の山は、こうした地域の農業生産のありかたと結びついたものである。



写真3：トウモロコシ畑

数千人にのぼる科学者が討議して作成されたIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の第四次報告書(二〇〇七年)には、「二〇世紀なかば以降に観測された世界平均気温の上昇については、九〇%以上の確率で、人間の活動に由来する温室効果ガスの増加が原因」と記されている。この報告書では、二一世紀に予測される温度上昇は、二酸化炭素の排出を抑えた循環型の社会に移行しても一・八℃、二酸化炭素を現状のまま排出し続けると四・〇℃上昇すると推計されている。こうして地球温暖化が「懸念される」状況から身近な問題へと移行し

② 許東・王雪英「遼寧農村伝統住宅的「炕」研究」遼寧工業大学学报、「二一四、二〇一〇年、七二―七四頁。なお図二は改良型のカンで「吊炕」と呼ばれるもので、七四頁の第八図をもとに作成したものである。

③ 張国慶(一九八七)「北方尚炕」習俗の由来」北方文物、一九八七―七、七九―八一頁。

④ 柳紅偉(一九九五)「山東民居中的炕」民俗研究、一九九五―三、六四―六六頁。

⑤ 長春市統計局編「長春市統計年鑑二〇一〇」中国統計出版社、二〇一一年。



てゆく中で、再生可能エネルギーの一つであるバイオマス・エネルギーが注目を集めるようになっていく。

バイオマスとは生物の量を意味する言葉であるが、一般には生物に由来する資源やエネルギーのことを指す。地球温暖化を抑制しようとする文脈では、自動車などの運輸部門に用いられている石油の代替として、サトウキビやトウモロコシ、樹木などを材料にしたバイオ燃料、とくにバイオエタノールが注目を集めている。バイオマスを燃焼しても二酸化炭素は排出されるが、その二酸化炭素はもとをたどれば植物が大气から取り込んだものであることから、大气中の二酸化炭素濃度を増加させることはない、と解釈されている。

アメリカはここ数年の原油価格の高騰をうけて、トウモロコシからつくるバイオエタノールの生産を急速に拡大しており、すでにアメリカ国内で生産されるトウモロコシの四割はバイオエタノール生産に向けられているとされる。また、石油ショックの頃からサトウキビを用いたバイオエタノールの生産と消費を政策的に推進してきたブラジルでは、一次エネルギー供給量に占めるバイオマスの比率は、三二%にのぼっている。また環境先進国とされるドイツでは、一次エネルギーに占めるバイオマスの比率は八%と、日本の一%を大きく上回っている。

しかしエネルギーの統計をよく見ると、バイオエタノールにのみ注目してバイオマス・エネルギーを考えることの限界に気づく。人口八〇〇〇万を突破したアフリカの

大國エチオピアでは、バイオマスの一次エネルギーに占める比率は九二%にのぼっている。繰り返し飢饉の発生が伝えられるエチオピアで、食糧生産と対抗的な性格をもつバイオエタノールの生産が多いとは考え難い。

そもそもバイオマス・エネルギーは多様なルートから供給されるものであり、大きくは廃棄物系と未利用系の二つのバイオマスに分けられている。廃棄物系のバイオマスとしては、家畜排泄物、都市ゴミ、下水汚泥、食品系廃棄物などがある。家畜の尿と糞からなる家畜排泄物は、水分が多いためにそのまま燃焼させてエネルギーに変えることは難しく、堆肥として利用される場合が多いが、一部は、メタン発酵させたり、おが屑と混ぜて直接燃焼されたりしている。都市ゴミは、都市部で発生する貴重なバイオマスであり、古紙のように分別してリサイクルすることで資源・エネルギーを節減できるほか、焼却による廃棄物発電もひろがりをみせている。下水汚泥は、下水道を通して集められた有機物を食べて増殖した微生物であり、肥料などとして使われるほか、メタン発酵によってエネルギーに転換されている。食品系廃棄物は、鮮度がよければ飼料として再利用されるし、肥料として、メタン発酵に供することもできる。廃棄物の処理にはもともとコストがかかっていることから、こうした廃棄物系のバイオマスはエネルギーとしての利用が積極的に進められようとしている。

系のバイオマスとされる。農業で生産される作物には食料として利用できない部分が少なくない。水稲であれば米として食用に供される一・四倍の重さが、ワラやモミ殻として残される。こうしたバイオマスは農業残渣と呼ばれ、肥料や飼料とされてきた。日本では稲ワラの大部分は田に鋤き込まれ、有機物の農地への還元が行われている。木材の生産では、伐採に際して森林に残される根や枝葉、製材の過程で生じる端材やおが屑、さらに間伐材などが使われないままとなっている。さらに以前は薪炭利用されていた広葉樹や竹・笹、さらに草も多くは未利用である。これら未利用系のバイオマスについては、セルロースからエタノールをつくる技術開発が進められているが、すこし過去に目を向ければ、直接燃焼により盛んに使われてきたものであることに気づく。

直接燃焼とは、太陽エネルギーが光合成によって化学エネルギーのかたちに固定されたものである農作物や樹木、草といった有機物を燃焼させて、熱としてエネルギーを取り出すことである。バイオマスを利用するに当たって、移動や変換のためにエネルギーを使う場合が多いが、直接燃焼はバイオマスが生産される地域において行われ、燃やし方を工夫することで効率を高め得るという利点がある。そもそも、たきぎやまきを燃やして、暖を取り、灯りとし、湯を沸かし、料理を作る、こうした行為は人類の文明の歴史とほぼ重なっている。その時間的な長さ比べると、人類が使い勝手のよい化石燃料を生活のさまざまな局面で使

(6) 国際エネルギー機関の統計(二〇〇九年)。http://www.iea.org/stats/index.asp。項目の名称は「Biofuels and Waste」。以下、他の国のデータも出典と年次は同じ。

(7) 松村幸彦『太陽の恵みのバイオマス―〇〇を出さないこれからのエネルギー』コロナ社、二〇〇八年、一四四頁。

うようになったのは、ごく最近の出来事である。そして近代化という概念がまだ有用であることが示すように、この移行は地域的な遅速をもつて進行しつつある。

日本においてバイオマスの直接燃焼が後景に退いたのは、数十年のオーダーで考えることのできる昔／最近である。京都で言えば、大原女がたきを頭に載せて洛中に売りに来ていたことは、写真にも多く残されているほどの近さで、その風情を記憶している住民もいるはずである。国土の三分の二が森林に覆われているという恵まれた自然環境をもつにもかかわらず、私たちは地域の資源・エネルギーであるバイオマスを捨て、便利で安いが遠方から運ばなければならぬ化石燃料に乗り換えてきた。それは地域が本来的に有してきた、人間と自然との交流に基づく持続可能性、それは「地的統一」としてフランスの近代地理学者が対象化したものを、見失ったことを意味している。

いまもカンを用いている中国東北地域の農村も、日本がたどった道を歩むのであろうか？ こう問いかけることで、歩むべき道が多様であることが見えてくるだろう。たしかにエチオピアでは急速に増加する人口を支えるために、バイオマスの獲得による森林破壊が進んでいるのであるから、手放しに推奨される性質のものではないにしても、カンという文化的な意味も担っている暖房システムを、効率を上げる改善を行うつつ、トウモロコシの生産と結びつけてゆくという開発のあり方は、もう一つの道となるのではないだろうか。日本のような森

林に覆われた山々に囲まれる地域が限られる中国では、薪炭材の供給には限りがある。それゆえに、農作物の残滓を家庭の燃料として使うという生活様式は、地域の持続可能性から見直されてよいはずである。

### 農村の衰退

規則的に並ぶ防風林をアクセントにしながから見渡すかぎり続くトウモロコシ畑を見て、もう一つの農村景観を思い出した。江蘇南京の農村の春の景色である。江南の春という言葉に相応しい、小麦の青々とした絨毯とあわい黄色の花をつけたアブラナが織りなす景色が、二〇年前に南京大学に留学していた頃にはひろがっていたのだが、二〇〇四年に再訪したそこには、春のやさしい陽光は同じだが、一面に土色の世界がひろがっていた（写真4）。

その前年の夏に訪れた際には、水稻とトウモロコシが栽培されていた農地のほとんどは、収穫をすませたままか、耕起だけして放置されていた。



写真4 江南の春のいま

所々でアブラナが作られているものの、冬作の主体であった小麦はほとんど見られなくなっている。農民にこの景観変化について尋ねると、アブラナが小麦よりもすこし

ばかり利益が多く、小麦は生産コストを引くと利益はわずかであること、むしろ農地は使わずに放っておき、県城や南京、上海に出稼ぎに行つたほうが収入が大きいことを教えてくれた。

一九九〇年代末から中国農村は衰退過程に入った、と私は見ている。この江南農村の景観もそのひとつまということができる。農産物価格の低迷が農民の農業に対する意欲を奪い、出稼ぎというかたちでの労働移動が、若者だけでなく次第に基幹的な農業従事者にひろがっていった。しかし五〇代以上の人びとはこうした動きからは離れて、農村にとどまっており、農村には高齢の農民だけが暮らすという日本農村の姿に近づいてゆくように思えた。そしてその通りにこの一〇年が過ぎていった。

ふたたび中国東北地域の農村に戻ろう。ここも農村衰退のただ中にある。政府の補助金によつて穀物生産はなんとか維持されているものの、農村の若者は、農業に従事した経験の無いまま、都市で仕事を求めるようになっていく。しかし、農村に残る年輩の農民たちの言葉に、苦しかった過去に比べて生活が改善されてきたことに対する、肯定的な気分を読み取ることは難しくない。住み慣れた場所が置き換えない友と日々を送る彼らの生活を支えてゆくことは、なにより大切である。その中でカンが引き受ける役割は、暖房という機能に限られない意味を持つている。生活する者の視線に立つて、エネルギーの今後を考えると、選択肢は自ずと見えてくるのではないだろうか。

## 二度目の苦難の道を歩む超伝導研究 —銅酸化物高温超伝導理論の確立を目指して—

森成隆夫

TAKAO MORINARI



森成隆夫（もりなり たかお）

1971年生、熊本県出身。東京大学工学系研究科物理工学専攻博士課程修了、東京大学工学博士。京都大学基礎物理学研究所助手、助教を経て、現在、京都大学人間・環境学研究所 准教授。専門分野は物性理論で、強相関電子系、固体中のディラック電子、量子流体を用いたブラックホールアナロジーなどを手がけている。

はじめに

ヒトが五感で世界を認識する能力はそれほど高くない。自然の本質を見極めようとすることはほとんど当てにならない。そこで様々な実験を駆使し、理論的モデルを立てて解析し、この世界の深奥に迫って行くところに科学の醍醐味がある。一例をあげると、いまや物質の構成要素が原子や分子であることは、ほとんど常識である。しかし、この「常識」が確立してまだ百年くらいしか経っていない。Boltzmann は原子論を唱えたものの、他の物理学者たちの批判に苛まれた。原子を見る事が出来れば原

子論を受け入れるのはたやすかっただろうが、原子は驚くほど小さい。<sup>(1)</sup> 原子をリングの大きさに拡大したとすると、リングは地球の大きさにまで達してしまう。そこで原子論を確立するには、原子の個数を異なる方法で同定し、それらが一致する事を示さなければならなかった。<sup>(2)</sup> このように、一旦、確立してしまえば常識となってしまうことも 確立するまでは苦難の道である。本稿で述べる超伝導研究は、二度目の苦難の道を歩んでいるところである。最初の苦難の道を抜けて理論が確立した後、次なる苦難に直面している。ここでは超伝導研究の概要を述べ、未解決である銅酸化物高温超伝導の理論的解決へ向けた試みを紹介する。

### BCS理論

超伝導が最初に発見されたのは一九一一年である。しかし、超伝導の理論（BCS理論）が Bardeen、Cooper、Schrieffer の三人によって打ち立てられたのは一九五七年であり、発見から解決まで五十年近くかかっている。BCS理論が世に出る前に、Einsteinを含め 錚々たる物理学者たちが超伝導の難問に挑み失敗している。そのため、超伝導は解決不可能な問題とまで言われていたほどである。この最初の発見から、BCS理論による解決までが最初の苦難の道であった。超伝導は相転移の一種である。相転移とは莫大な数の粒子が互いに相互作用する系で現れる現象で 個々の粒子の振る舞いからは想像もつかない

現象が出現する。<sup>(3)</sup> 超伝導は金属を低温にすることで出現する相転移現象である。金属における電気の流れを担っているのは電子であり 高温では電子は金属中を自由に動き回っている。ところが低温になり超伝導状態になると電子は対を形成し、この対の集団が最低エネルギー状態に落ち込むという 高い秩序状態（Bose-Einstein凝縮状態）を形成する。ここで電子が対を形成するというところが超伝導の本質的な部分である。それでは電子の対はどのように形成されるのだろうか。金属は多数の原子が結合したもののだが、原子に束縛されていた電子の一部が原子核の束縛を離れて自由に動き回っている。そのため、原子はイオンとなつて正の電荷を帯びる。このイオンの運動を媒介として、電子に引力相互作用が生じる。電子は負の電荷を帯びているため、周囲のイオンを引きつける。イオンを引きつけた後、電子がよそへ行ってしまっても、イオンの質量は電子に比べてずっと重いため、イオンは元の位置へののろりと戻っていく。このイオンが元の位置へ戻っていく途中の状態は正の電荷が集まった部分が存在する状態であり、他の電子が引きつけられることになる。このような状況は、最初にイオンを引きつけた電子と、イオンの分布に引き寄せられた電子の間に有効的に引力相互作用が働いているとして記述することができる。この引力相互作用によって電子の対が形成される。これがBCS理論の骨子である。<sup>(4)</sup>

(1) 現在では走査型トンネル顕微鏡を用いる事で原子を「見る」ことができるようになっていた。走査型トンネル顕微鏡が百年前に発明されていればBoltzmannは寿命を全うすることが出来たかもしれない。

(2) Einsteinは原子数を決める方法をいくつも提案している。そのうちの一つがBrown運動の理論で、このEinsteinの理論に従って原子数を決めたPerkinは一九二六年にノーベル物理学賞を受賞している。

(3) このあたりのからくりはエントロピーによって理解できる。粒子数が少ない場合には、エネルギーを最小にする状態が実現される。しかし、温度が有る場合にはエントロピーを含めて考える必要がある。エントロピーとは系が取り得る状態の数に関係している。水を例にとると、高温では水蒸気となつて個々の水の分子はほとんど自由に動き回っている。水の分子は空間のどこにいても良い。したがって可能な状態の数は膨大な数になる。一方、低温では水となる。個々の水の分子は、周囲の水の分子のしがらみにとらわれて動けなくなってしまう。このとき可能な状態の数は、個々の水の分子の自由度が小さいため水蒸気の状態にくらべると圧倒的に少ない。このように、物質は高温では可能な状態が多い状態を好み、低温では逆に可能な状態が少ない状態を好む。高温での状態が低温に移り変っていくことで低温の状態に移り変わることを相転移とよぶ。

(4) 正確には、事はそれほど単純ではない。電子は負の電荷を持っており、電子同士は互いに反発している。そして、単純に比較すると引力を圧倒しているのである。BCS理論ではこの反発力は本質ではないとして切り捨てられている。この近似が妥当である事は後の研究によって示された。本質でないものと思いついて捨象して核心をつくる好例である。また、電子対形成においては、電子がフェルミの排除原理に従っており金属中でフェルミ面を形成しているという点も重要である。



## 銅酸化物高温超伝導の発見

一九八六年に Bednorz と Müller は新しい超伝導体を報告した。日本での追試を経て、類似的物質で初めて超伝導転移温度が液体窒素温度（77 K）を超える超伝導が発見された。超伝導に相転移する温度が液体窒素温度を超えているのは唯一、銅酸化物高温超伝導体だけである。銅酸化物高温超伝導体において本質的な構造は銅と酸素が図1右上に示したような二次元的な構造を形成している部分である。黒丸が銅で白丸が酸素を示しており、銅が存在する格子点では電子のスピン（図では矢印でしめしてある）が存在する。 $\text{CuO}_2$ 面と呼ばれるこの基本構造に、電流を担うキャリアを導入すると超伝導が出現する。図1に示したのは銅酸化物高温超伝導体の相図である。キャリアが導入される前は反強磁性

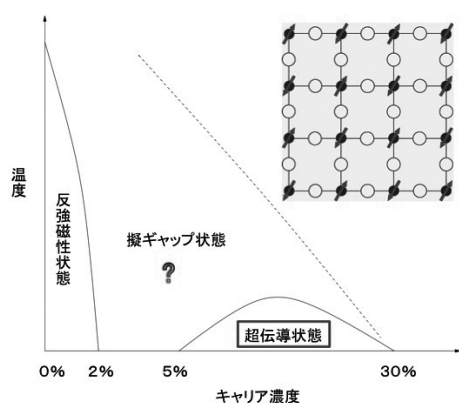


図1

の絶縁体であり、図に示したように隣り合うスピンの反平行に並んでいる。この反強磁性状態にキャリアを注入すると反強磁性状態が急速に破壊され、その後キャリア濃度が5%ほどになったところで超伝導が出現する。超伝導状態自体は、電子が対を形成して凝縮するという点では従来の超伝導と同じである。問題は対形成相互作用の起源である。もし電子とイオンの相互作用が重要であるとすれば超伝導転移温度がイオンの質量に依存することがわかっていり、しかし従来の超伝導体において明確に見られるこの依存性が銅酸化物高温超伝導体では見出されていない。また、図1の相図において擬ギャップと呼ばれる相が存在している。この擬ギャップ相がどのような状態か未だ決着がつかっていない。

## 銅酸化物高温超伝導のスカミオン理論

銅酸化物高温超伝導が発見されて爆発的に研究が進められた。数多くの理論が提案されたが、何が本質で何が本質でないか意見が分かれ未だ確立した理論がない。筆者が提唱しているのはキャリアの周りに図2に示したスカミオンとよばれるスピンの配置が形成されるという理論である。この理論に基づくと、電子間に引力相互作用が生じる事が示せる。図2のようなスピンの配置があるところに別のキャリアが近づいてきたとする。このとき、キャリアとスピンの相互作用のために、キャリアのspinはスピンの配置の変化に応じて回転する。キャリアの運動に伴うスピンの回転

は、磁場と同様の効果を持つことが示せる。

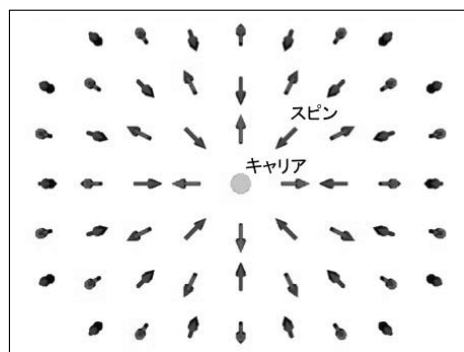


図2

配置があるところを通るキャリアにはローレンツ力が働く。一方、個々のキャリアは図2のspin配置を伴って動き回っている。したがって、キャリアは互いにローレンツ力を及ぼし合い、対を形成することになる。また、擬ギャップ状態についてはキャリアが図2のspin配置を伴った複合粒子であるという描像で理解できる。

## 最後に

前項で述べた理論的描像に基づいて、銅酸化物高温超伝導の様々な側面を説明することが可能である。また、微視的な形成機構についても明らかになりつつある。しかし、理論を確立するには既知の現象を説明するだけでは不十分であり、本質が明らかとなる現象を予言し、それを実験的に検証しなければならぬ。この点については今後の研究課題であるが、何とか克服して物理学における新たな「常識」を確立したいと考えている。

- (5) 電子のスピンは、小さな磁石と想像してもらえば良い。
- (6) 正確には電子の抜け穴であり、ホールと呼ばれる。水中の泡をイメージしていただきたい。
- (7) 小形正男、現代物理学最前線4（共立出版、二〇〇一年）。
- (8) 試料を合成していた研究室ではバートまで動員して試料作りをしていたそうである。
- (9) T. Morinari, "Half-Skyrmion theory for high-temperature superconductivity," in "The Multiaxial Skyrmion" (World Scientific, 2010) ed G.E. Brown and M. Rho.
- (10) Berry, 位相効果に46-48(2014) T. Morinari, "Mechanism of unconventional superconductivity induced by skyrmion excitations in two-dimensional strongly correlated electron systems," Phys. Rev. B 65, 064513 (2002).
- (11) T. Morinari, "Topological Spin Texture Created by Zhang-Rice Singlets in Cuprate Superconductors," J. Phys. Soc. Jpn. 81, 074716 (2012).

# 資源の自治的共同管理制度 が地域環境に果たす役割

廣川 祐司

YUJI HIROKAWA



廣川 祐司（ひろかわ ゆうじ）

一九八四年静岡県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。現在、北九州市立大学地域創生学群・基盤教育センター講師。専門は法社会学、コモンズ論。

## 一、地域社会における環境問題と法社会学

私は地域環境資源の共同利用・共同管理によって、地域環境を維持・改善するための仕組みを研究してきた。地域環境資源とは、地域社会に存在し、我々の日々の生活に密接に関係している資源である。具体的には、山野海川などの自然環境資源に加え、景観、まちなみ、公園、広場などの生活環境資源を含む概念である。

地域環境資源（以下、資源）は、個人で保全的な取り組みを行ったとしても、その効果は限定的である。そのため、資源を持続的に利用し続けられる状態で維持しようと

思えば、特定のルールの下、共同的な管理を行っていないかなくてはならない。この特定のルールは、地域の実情や資源の性質に適したものでなくてはならないため、地域ごとに違いが現れる。地域で独自に作られたルールは、慣習法と呼ばれる。慣習法は地域社会の行動規範として機能するため、地域社会独自の社会秩序を生み出す。その多くは歴史的に醸成されてきた慣習に基づいて作られるルールであって、文章化されておらず「不文律の約束事」として地域社会に根付いている。

地域社会の構成員のたった一人でもそのルールを無視し、資源を過剰利用したり、乱開発をしたりすれば、その資源は持続可能なものではなくなってしまう。したがって、このようなルールは、地域社会の構成員の全員が守らなければならない。そのため、慣習法を順守しない者には特定の罰則を地域コミュニティによって課されている地域が多い。現在でも、集落の共有林などの管理作業を住民が共同で行おうとする際に、その作業に参加しない者からは、「不参金」という罰金を徴収する地域も存在する。歴史的には「村八分」という制度があり、火事等の非常時と人が亡くなった際に行われる葬儀以外は、日常的な繋がりを絶つという罰則も存在した。慣習法によるルールを順守しないものは村八分となり、住民が共同で利用することができる共有地（入会地）を利用することもできない。資源が破壊されたり、荒廃し枯渇したりすることは、住民にとって日々の生活を困難にさせ、また居住環境の悪化に繋がるため、

慣習法に基づく相互監視とルールの順守は必然的なものであった。

また、持続可能な資源利用や資源管理にとって大きな阻害要因となるのが、資源管理に関するコストを負担せずに環境的メリットを享受しようとする「フリーライダー（ただ乗り）」の存在である。慣習法やそれに基づく地域社会独自の自治的共同管理・利用制度の構築は、このフリーライダーが発生するリスクを最小限に抑える効果があると言える。なぜなら、前述のように資源を日常的に利用している住民は、その行為自体が共有地の巡回を兼ね、相互監視の役割を果たしているためである。資源を日常的に利用し続けることこそ、フリーライダー的な資源利用を抑制し、秩序ある社会規律を維持するための方法であった。

したがって、私はこのような慣習法に基づく自主的なルールによって維持されている社会秩序が、「持続可能な地域社会の構築」にどのような貢献を果たしているのか、また慣習法の形成・継承過程を分析するとともに、時代の変化によって、国家法と慣習法との間に齟齬が生じた場合の解消法について、法社会学の知見から研究してきたのである。

## 二、地域環境保全のための現状と課題

今回は紙幅も限られているため、都市部における生活環境資源については割愛し、農村部を念頭に資源の共同利用・共同管理に関する現状と課題について述べたいと思う。昭和三〇年代頃までは、国産材価格が



写真1 手入れが行われている京都府旧京北町（現 京都市右京区）の共有林

高い水準で推移していたため、集落の共有地（入会地）において、共同造林事業を行っていた地域が多く存在した（写真1）。木材を売却した際の収益は、地域活動費、地域内のインフラ整備費、祭事等の経費として使用され、自治活動を円滑に行うための貴重な自主財源となっていたのである。このような資源をめぐる住民の共同的活動は、集落の公益増進を図り、地域社会の福祉向上に寄与していた。このような仕組みは、実際に共有林の手入れ（管理業務）を行うことによって、自分たちの生活の質が向上していることを住民が実感できるものであった。そのため、共有林を持続的に利用するために管理し続けようとする強力なインセンティブが住民には存在した。しかし、経済のグローバル化に伴う安価な輸入材の流入による価格競争によって、国産材価格は低下し、収益の確保が困難になって

きたのである。間伐や下草刈りのような山の手入れを行うと費用的な面だけでなく、労力という面においても管理コストがかかり、手をかければかけるほど、集落の財政は赤字になり、山の管理は滞っていく。したがって、共有林は手入れされず、放棄された里山となるのである。この放棄された里山をいかに再生していくのかが、持続可能な地域社会の構築に向けた課題の一つである。

しかし、慣習法に基づく資源の共同管理制度が、地域環境の保全に寄与してきたことは紛れもない事実であり、現在でも地域環境保全に有効な策の一つであることは間違いない。よって、私は共同管理制度を様々な法制度に依拠し、現代社会に適合するように再構築するための方法を研究してきた。資源の共同管理制度が環境保全的な仕組みであったとして評価される一方、管理コストに見合うだけの収益が確保できないために、資源が放棄されてしまっていることが、現代的な課題である。この課題を解決するための方法として、私は二通りの可能性を模索した。

一つ目の手法としては、管理コストを地域で十分吸収しえるだけの収益を確保するシステムを再構築することである。例えば、豊かな自然環境を残すことや資源価値を向上させることによって、都市住民にとって魅力ある観光資源として活用できるようにする方法がある。具体的には、利用しなくなった茅資源を魅力ある草地景観として整備し、その眺望を売りにして観光客を呼び込む戦略をとる地域（静岡県伊東市池区）

（写真2）や、また集落全体で温泉街としての風情や情緒を住民が共同で維持しつつ、温泉資源の共同管理によって地域社会全体で経済的メリットを享受しようとしている地域（長野県野沢温泉村、兵庫県豊岡市城崎温泉）などがある。このような地域では、資源を地域住民が共同で管理し続けることのコストを十分吸収しえるだけの経済的収益を地域社会全体で上げており、資源保全的な管理や利用をし続けようとするインセンティブは非常に強いままである。資源の利用方法を歴史的な利用形態（木材生産↓売却）を単純に維持するだけではなく、現代社会の需要にマッチした形で新たに組み替えることができれば、既存の資源の共同管理システムが持続可能な形で維持され、また利用しつつ相互監視によって地域社会秩序が維持できる。地域コミュニティの弱体化が全国的に叫ばれている中、資源の共



写真2 大室山に登山リフトを設置し営業する「池観光開発株式会社」



同管理やそれに伴う社会秩序の維持によって、地域社会の連帯感強化されていくという副次的効果も期待できるであろう。

また、二つ目は資源利用による経済的な収益を求めるのではなく、レクリエーションとして自然環境を楽しむことによって、地域社会に愛着を持つ者を増やすという方法である。例えば、フットパスの整備によって健康志向のウォーキング者を集客するとともに、彼らに対し地域の郷土料理等を振る舞うことによって、その地域のファン（愛好者）となつてもらい再訪を促すような仕組みを、地域活性化の起爆剤として利用する方法である（写真3・写真4）。フットパス等は、決して多額の収益を得られるような仕組みではない。むしろ、「優れた魅力ある資源が、我々の地域にある」というのを広く社会に評価してもらふことによって、住民にその自覚を促すとともに、地域環境を保全・管理していくための協力者の輪を広げていくことに主眼が置かれている。したがって、ここでの「地域活性化」とは決して地域経済の活性化ということを指しているわけではない。地域社会全体が資源を認識し、それを利



写真3 フットパスの標識

用・管理・保全していくための活動が活発になり、その活動にかかわる人々が増加することこそ、地域活性化と言えるのではないだろうか。



写真4 町田フットパス（小野路）

問題となつている管理コストに関しても、地域社会への郷土愛がある者やその地域に居住していかなくとも何回か訪問している間にその地域の愛好者となる者は、多少経済的な負担があろうとも、資源や環境を維持しようとするため、管理コストが問題となることはあまりないだろう。

資源や環境の保全に関する地域活動が活発な地域は、公共的な役割を期待され、行政や企業からの資金援助を得ることも多い。その資金は活動資金となり、より一層、活動が活性化される。単なる何気ない雑木林や田畑、そして竹林などを、フットパスに指定することで、資源の使用価値が高まる。農村部の住民は気付かないことも多いが、

何気ない日常的な自然環境が都市住民にとつては、貴重な魅力ある景観であり資源であると認識されることが多々ある。「自然を楽しむ」というレクリエーションの可能性を今後は模索していくべきなのである。

### 三、資源の共同管理のための法的な課題

これまで資源の共同管理制度に関する現代的課題と可能性について述べてきた。本稿では二つの可能性を示唆したが、法的な課題は依然として残されている。まず一つ目の観光資源化による管理コストの吸収という方法にとっては、その活動主体をどうするかという根本的な問題がある。つまり、歴史的に継承されてきた集落の財産を利用・管理し続ける主体は、その地に長年住み続け資源の維持・管理に貢献してきた住民であるべきである。しかし、集落名での財産登記は行えないため、集落が集落名で財産の管理業務を行うことは不可能である。地域コミュニティによって共同財産を登記するために、「認可地縁団体」という法制度が整備されたが、これはその地域に居住する者であれば全員権利者となるため、他地域より引越してきた新住民と、何代にもわたり地域の資源管理に関り続けてきた旧住民との権利が同一のものとして法的には位置付けられてしまったため、この制度を利用している地域は一部に限られる。また、観光資源化し収益を確保しようとするのであれば、一般的な観光事業であるため、集落による事業ではなく、株式会社

等の法人格を取得することが望ましい。集落営株式会社などの設立に際し、会社法や民法等の規定をいかに援用することによって、慣習法を現行の法制度に埋め込み、維持することができるのかを分析する必要がある。

前記した静岡県伊東市池区では、観光事業に特化した活動をおこなう集落営株式会社を設立した。しかし、株式会社形態をとることによって、歴史的に集落が保持し続けてきた集落有財産が株式を取得しようとする外部主体に流出してしまう懸念が生じる。その懸念を解消するために、会社法によって設立が認められている「非公開会社」や「譲渡制限株式会社」の形態を池区では採用している。このような形態の会社は、取締役会の承認がなければ株式の譲渡や売買は行えない。

個人と法人とを法的人格の主体として法律は整備されているため、現行法では地域において歴史的に継承されてきた総有的財産（集落有財産）をそのままの形で担保する法制度は存在しない。慣習法と現行法（国家法）の相克を、現在認められうる法制度の下で、いかに資源の自治的共同管理制度や慣習を維持できるのかが法的な課題としてあげられるであろう。

またフットパスは、私有地に無断で設定するわけにはいかないので、法定外公共物であり誰が通っても良いとされる「里道（赤線）」に設定するのが望ましい。フットパス発祥の地でもあるイギリス（イングラント・ウェールズ）では、一九三二年に「歩く権利法（Right of Way Act）」が、そ

して二〇〇〇年には「カントリーサイド歩く権利法（Countryside and Right of Way Act）」が制定され、法的に歩く権利が認められ、公的なアクセス権が確立している。日本においては、里道をつなぎ合わせたフットパス、もしくは広大な敷地を有する（例えば牧場等）私有地に設定されるフットパスが多く、私有地を開放しフットパスとして指定するためには所有者の同意を得る方法しかないのが現状である。フットパスというアクセス権の法的な問題は、良好な自然環境を享受する権利が人間の基本的な人権として認められうるのかどうかという、自然享受権の論争と通底するだろう。

このように、環境保全的な資源の共同管理制度を現代的に再生し、地域環境に寄与する制度を構築するためには、乗り越えなければならぬ法的な課題も数多く山積している。

地域環境は単なる山や田畑の所有者（地権者）のためだけのものではなく、都市住民や他地域の人々も利用し、環境的メリットを享受できる仕組みが現代社会では期待されている。その際、地元住民や地権者とのコンフリクトをいかに解消しつつ、地域の歴史性を担保する制度を構築できるかが問われている。

地域の自然環境は荒廃しつつも、一定の安定した生活が営めている場合、自然環境保全活動を行おうとする外部主体が新たに地域社会に侵入するのは、極めて高い障壁が存在する。現在、私の勤務する大学の実習先においても、放棄竹林の管理に関するプロジェクト（写真5）を立ち上げようと

しつつあり、地域の方や地権者へ理解と協力を得るために、日々学生とともに奔走している。地域外のアクターによる新しい活動によって、地域社会の日々の安寧が脅か



写真5 放棄された竹林の様子

されるのではないかという漠然とした不安を地域住民は持つのである。その不安を解消するために、前提として住民との間に、深い信頼関係の築く努力をすることは最低限必要であるが、それとともに地域住民の権利や地域社会の慣習を最大限尊重しつつ、市民に対しても自然環境に触れ合える機会を制度的に構築する術を模索しなければならぬ。その際、法社会学が果たすべき役割は極めて大きい、と私は感じている。

# 遺伝子が物語る 高山植物の歴史

池田 啓

HAJIME IKEDA



池田啓（いけだ はじめ）

1981年東京都生まれ。京都大学大学院人間・環境学専攻博士課程修了。京都大学博士（人間・環境学）。東京大学理学系研究科特任助教を経て、現在、独立行政法人国立科学博物館植物研究部研究員。植物の多様性に興味を持ち、環境適応や進化に関する研究を行っている。

## 1 高山植物

山登りがレジャーとして知名度を上げてきたのはここ十年くらいのことだろうか。実に様々な人を山の上で見かけるようになった。長年の趣味として登っている人だけでなく、自然と親しむために始めた人や定年後の趣味として楽しむ人。昔ながらの道具に身を包まれた人もいれば、流行のブランドに身を固められた人もいる。有名な山では外国人の団体に会うこともある。こうした昨今の登山ブームもあいまって、山の上では実に多様な人と出会うことができ面白い。しかし、山の上で多様なものは

人だけではない。高い山の上で私たちの目を一際引きつける多様性の一つが高山植物であろう。

山の斜面一面に広がり、色とりどりの花が見られるお花畑。岩場の限られた場所に生い茂る矮性な植物だけでなく、岩の割れ目に生える植物もある。標高の高い山の上は年間を通じて雪で閉ざされている期間が長い。そのため、植物の生育は短い夏（六月〜九月）に限られてしまう。そのうえ、森林限界を越えた標高の高い地域では夏でも気温が低い。生育期間の気温が低いことは植物の生理活性だけでなく、花粉を媒介する送粉者の活動をも制限するため、植物の生育に大きな制約を与える。また、霧に覆われる日も多いため、植物が光合成する期間が限られてしまう。その一方で、晴れた日には日差しが強く、紫外線を初めとする光によるストレスから植物はダメージを受ける。このように標高の高い地域の環境は、植物の生育にとって非常に過酷である。それにも関わらず、高い山の上には様々な植物が生育し、ユニークな植物群落を見ることができる。

こうした標高の高い地域に生育する植物は『高山植物』と呼ばれる。山岳地域では、一般に標高が高くなるにつれて気温は低下する。そして、一定以上の標高に至ると樹木が生育できなくなる。この樹木が生育できなくなる標高を『森林限界』という。森林限界よりも標高の高い地域を『高山帯』と呼び、高山帯に生育の中心を持つ植物が高山植物と呼ばれる。日本列島の標高の高い山岳では、ハイマツ（マツ科）と呼ばれ

るマツの仲間が大規模な群落を作る。ハイマツは日本列島の山岳地帯では地を這った高さ一メートル程度の群落を形成するが、日本列島より高緯度の地域ではグイマツ（カラマツの仲間）林の林床に生育する。このことは、日本列島の山岳地帯では、気温の面からは森林が発達しうる環境に高山植物の群落が形成されていることを意味している。これは樹木の生育限界が、標高の上昇とそれに伴う気温の低下だけでなく、積雪量や風の強さなどの環境要因からも影響を受けて形成されるためである。



図1 ニベソツ山（北海道・大雪山系）の高山植物群落。矢印はハイマツ群落を示す。



## 2 氷河時代の遺存種

なぜこのような標高の高い山岳地域の極限的な環境に生育する植物があるのだろうか。このことを理解するためには、地球の歴史の中で起きた気候変動を考える必要がある。現在から約二百六十万年前までは第四紀と呼ばれる地質区分に当たり、地球の気候環境が劇的に変化した時代である。特に、地球の気候が寒冷化した時期であるとともに、温暖化と寒冷化を繰り返した時代である。こうした寒暖の変化は地球上の生物の分布や進化に非常に大きな影響を及ぼしたことが考えられている。

気温が変化することは、植物が生育地を失い局所的に絶滅してしまうリスクを持つ一方で、異なる場所へと移動する機会を与える。気候が寒冷化することで、植物の生育適地が緯度や標高の低い温暖な地域へと変化するため、植物の分布は全体的に低緯度・低標高へとシフトする。これに対して、気候が温暖になった間氷期（現在も該当する）には、植物の分布が高緯度や高標高へと再び移動する。こうした気候の変化に伴った植物の南北方向、あるいは垂直方向への分布変遷が、高山植物の起源を理解する上で重要なカギとなる。

日本で見られる高山植物の起源を考えるには、日本列島に分布する高山植物やその近縁な種の分布を明らかにすることが大きな示唆を与える。日本列島の高山植物相を他の地域の植物相と比較した研究からは、高山植物の約三割が周北極地域に分布する種と近縁であることが明らかにされている。

三割と言うと割合としては少ない印象を持つが、実際に日本列島の高山帯で見られる植物の大部分はこの三割に含まれる。また、北極圏の山岳地域においても日本の高山と類似した植物から成る群落が広がっている。つまり、元来は高緯度地域に分布する植物、特に北極を取り巻く地域（周北極地域）に分布する植物が高山植物の祖先にあたり、現在よりも寒冷な氷期に南下したことによって日本列島に移動してきたものと考えられる。寒冷な環境を好むこれらの植物は、地史的に温暖な現在では、標高の高い山岳地域へと生育地が追われたため、高い山に限られた分布を持つと考えられる。

## 3 遺伝子が紐解く高山植物の起源

ここで一つ疑問が生じてくる。第四紀には氷期と間氷期が約十万年の周期で繰り返してきたことが知られている。このことは、日本列島の高山植物が日本列島へ到来するチャンスが何度もあったことを意味している。一方で、気候が温暖な間氷期のたびにその生育が脅かされ、地域的に絶滅する可能性もある。こうした氷期―間氷期の繰返しとそれに伴う植物の分布変遷を踏まえると、現在見られる高山植物の歴史を理解するには二つの仮説を考えることができる。

一つ目は、最終氷期（約二万年前が最寒期）に一度だけ高山植物が日本列島に移動してきたとする仮説である。約二万年前に日本列島へと分布を広げた高山植物が、後氷期に気候が温暖になるにつれ、その生育地が縮小させられてきた。その結果、標高

の高い山岳地域の中に、現在も絶滅せずに生育が保たれているとする仮説である。これに対して、高山植物が最終氷期よりも古い時代に日本列島に到来したと考えることもできる。繰返し起きた氷期と間氷期のサイクルの中で、最終氷期よりも古い氷期に高山植物の祖先が日本列島に到来し、その後の気候変動の繰返しを日本列島の山岳地域で生き延びたとする仮説である。後者の仮説では、高山植物がより長期間、日本列島に生育してきたことになる。

こうした高山植物の起源を考えた仮説に示唆を与える結果が、遺伝子を用いた研究から得られている。これらの研究は、系統地理学と呼ばれ、ある生物の遺伝的変異を様々な地点から明らかにする研究アプローチにより、遺伝的変異の地理的な広がりを明らかにするものである。多くの生物では同一種であっても遺伝的変異を持っているだけでなく、これらの変異が地理的構造をもつて広がっている。つまり、地域ごとに異なる遺伝子型が特異的に分布しており、地域的な遺伝的分化が作られるのである。こうした遺伝的分化が作られる背景には様々な要因を考慮することができる。中でも、地域間における遺伝的な交流が制限されたことは遺伝的分化を生み出す究極的な要因として挙げられる。異なる地域の個体の間で遺伝的な交流が長期間に渡って制限されることにより、それぞれの地域に生じた特有の遺伝構造が互いに混ざり合うことなく保たれた結果、遺伝子型の地理的な構造が作られることになる。

これまでに日本列島に分布する複数の高

(1) International Commission on Stratigraphy が二〇一二年八月に発行した地質年表に基づく。

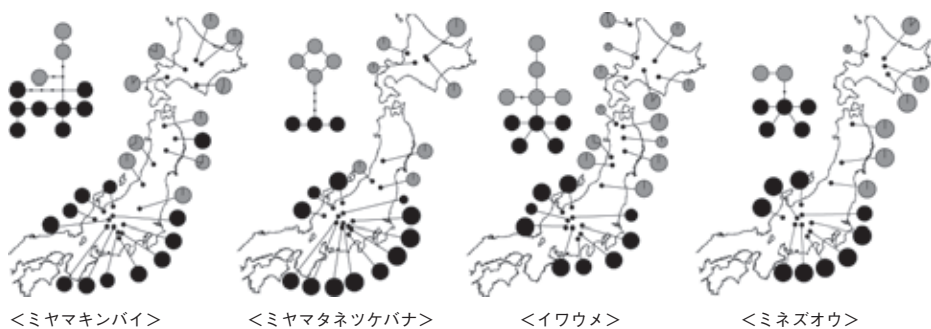


図2 日本列島に分布する4種の高山植物における遺伝子型の地理的広がり。中部地方からは黒系統の遺伝子型が、東北地方以北からは灰色系統の遺伝子型が見つかっており、南北地域間で遺伝的に分化していることが分かる。

山植物について行われた系統地理の研究では、様々な植物について複数の産地から採取した植物の遺伝子型が決定されている。その結果、日本アルプスをはじめとした中部地方の個体が、東北地方や北海道（北日本）の個体とは異なる遺伝子型を持つことが明らかとされてきた。これは特定の植物種に限られたものではなく、多くの高山植物で共通した結果として明らかにされている。

この結果を先ほど挙げた高山植物の歴史を考えると併せて見直してみたい。もし第一に挙げた仮説の通り、現在見られる高山植物が最終氷期に一度だけ日本列島へと移動してきたものであるとするならば、中部地方の高山植物は北日本の高山植物と遺伝的に類似していることが期待される。これは植物の移動に伴って新たな遺伝子型が生じないことを仮定しているが、移動先の地域とその起源となった地域が共通した遺伝構造を持つことは多くの研究から知られている。そのため、高山植物が最終氷期に日本列島へと広がってきたとする一つ目の仮説では、現在の中部地方の高山植物における北日本とは異なった特有の遺伝子型を説明することが難しい。

これに対して、最終氷期より過去の氷期に高山植物が日本列島へと移動してきたとする第二の仮説はどうであろう。中部地方に特有の遺伝子型が見られることは、中部地方の個体が、北日本の個体と遺伝的に隔離されてきた歴史を持つことを意味している。つまり、最終氷期より前の氷期に中部地方へと到来した高山植物が、それ以降も中部地方に隔離された生育地を保ち、特有の遺伝構造を持つに至ったことを意味している。間氷期には高山植物の生育地が縮小したと考えられるが、その過程においても中部地方に生育が保たれ続けてきたのであれば、この説明に大きな問題はない。このように考えてみると、日本列島の高山植物が持つ遺伝構造は、最終氷期よりも古い時代の氷期に高山植物が日本列島へと到来したとする仮説を支持するものと考えられる。

であろう。

最新の研究ではまた、最終氷期より前に日本列島の高山植物が起源したとする仮説を強く支持する結果が得られている。日本固有の高山植物の一種であるミヤマタネツケバナ（アブラナ科）について、中部地方と北日本の生育地が分岐した年代が推定された結果、約十一万年前に分布が分断したと示されている。この年代は最終氷期の一つ前の間氷期に当たる。つまり、最終氷期の一つ前の氷期（約十四―二十万年前…日本ではヨーロッパの呼称に従いリス氷期と呼ばれる）に日本列島に分布を広げた高山植物が、最終間氷期には中部地方と北日本に隔離的に取り残されたという歴史を描くことができる。この歴史の中で、中部地方と北日本の生育地では、互いに異なる遺伝子型が分化したと考えられる。そして、両地域の個体は、最終氷期にも遺伝的な交流を遂げることなく隔離されてきたと考えられる。こうした分岐年代を含めた知見は、まだ例が限られている。そのため、高山植物の歴史を一般的に理解するには、さらなる研究が必要である。

#### 4 高山植物の適応進化

このように日本列島の高山植物の分布が作られてきた歴史的背景を考えてきた。ここで、一つ改めて考え直してみたい。中部地方の高山植物は元来、寒冷な氷期に北方地域から移動してきたものである。このような南下が氷期の間に繰返し起これば、中部地方と北日本の高山植物は遺伝的な交流

を行うことができるはずである。それにも関わらず、最終氷期にはそうした遺伝的交流が起きなかったことを遺伝子の結果は示唆している。なぜこのような矛盾した結果が得られてしまうのであろうか。

植物は動物と異なり能動的な移動能力を持たない。そのため、生育環境に対して適応することは植物にとって非常に重要である。光合成をする植物にとって、日長を初めとする光環境は、環境応答における重要な役割を果たすであろう。日本列島の代表的な高山植物が周北極地域に起源した植物であることは先に挙げた。周北極地域（約北緯七五度）と日本列島（北緯約三五度）では、当たり前ではあるが、その緯度が大きく異なる。そのため、同一の植物であっても、日長の大きく異なった環境で生育することになる。こうした日長の違いは日本列島の北海道と中部地方の間でもわずかながら（夏至で約五十分）も認めることができる。そのため、中部地方と北日本の間で隔離された植物が、それぞれの日長に対して適応した進化を遂げたことも考えられる。こうした適応進化が、異なる地域の個体同士が遺伝的に交わることを妨げ、中部地方と北日本が独自の遺伝的組成を持つに至ったのではないだろうか。

植物が日長を初めとした光環境をモニターするには、光受容体と呼ばれるタンパク質が大きな役割を持つ。そのため、南北地域間における光環境に対する適応進化を考える上で、光受容体の進化様式を調べるのが手掛かりとなるであろう。特に、遺伝子の進化様式を調べることで、光受容体

がそれぞれの地域の間で自然選択を受けて分化してきたか否かを明らかにすることができる。これまでに二種の高山植物に対して、光受容体の遺伝子における進化様式が明らかにされている。それらの結果では、中部地方と北日本の個体は、植物の赤色光受容体の一つ（フィトクロム）において、地域ごとに異なる遺伝子型を持つだけでなく、それぞれが自然選択を受けて分化していることが示されている。こうした結果は、日本列島の高山植物が南北地域の間で光環境に適応した進化を遂げていることを示唆している。つまり、地域適応が、中部地方と北日本の個体における遺伝的な交流を妨げてきた可能性を支持している。

とはいえ、高山植物が中部地方に到来した後の氷期では、高山植物の生育地が日本列島に大規模に広がらなかったため、北日本と中部地方の個体が遺伝的に交流しえなかったことは否定できない。また、それぞれの地域の個体間で生殖的な隔離が進化したために、遺伝的な交流が起こらなかった可能性も考えることができる。高山植物が持つ南北分化の背景を理解するためには、様々な角度からの研究が進められる必要がある。それでもやはり、中部地方と北日本の個体間で、光受容に関わる仕組みが自然選択を受けて進化していることは、一つの切り口として大きな意味を持つであろう。山に登り自然に触れ合うという現代人の趣味としては珍しくはない一コマ。その中で見られる生き物の歴史を考えることだけでも、多くのことが詰まっているだけでなく、分からないことがたくさんある。こう

した素朴な身の回りの自然を科学することが、自然史研究の楽しみであり、好奇心を大いに湧き立てる一時だ。



# 梃子と支点

## 那須耕介

KOSUKE NASU



那須耕介（なす こうすけ）

1967年京都府生まれ。京都大学大学院博士課程指導認定退学。京都大学博士（法学）。

摂南大学法学部准教授等を経て京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専攻は法哲学。

先日ある講義中、「やっかいな問題に組み組むときには問題の『本丸』だけを攻めてもダメで、むしろ遠回りをして周囲の内堀や外堀を埋め、城下町に広く浸透するような手段をとった方がいいことがあるよね」という趣旨の話をしたところ、これをおもしろがってくれた学生さんが何人かいた。自分ではありきたりの話をしたつもりだったのですが、その反応にはちよつとびっくりしたのだが、この話にはかなり舌足らずなところがある。この場を借りて不足を補うことにしたい。

講義での話は大略次の通りである。

何かショッキングな事件に出くわすと、私たちはしばらくの間、同種の事例をやっ

きになって追い回し、即効性ある対策を探しまわる。メディアにはそんなそつかしい例が目白押しだが、実際のところ、この引力に逆らえる人はいないのではないのか。私たちは、「少年による凶悪犯罪が頻発している」と言われると次々とその実例を発見してこの確信を深め、「役人が税金を無駄遣いしている」と聞くとあらゆる役所にその証拠が転がっているような気持ちになる。言葉を知る前にその問題を把握できる人はまだだが、いったんその言葉を覚えると、大方の人はそれ以前の世界がどんな風だったか忘れてしまうようだ。「セクハラ」や「ストーカー」という言葉を知るまで、私たちは自分たちの周辺にそうした現象を（少なくとも、解かれるべき社会問題としては）認めることができなかった。たぶん、私たちは自分で思っている以上に言葉の奴隷なのである。

たとえば、家庭内での児童虐待について考えてみよう。それが子どもの心身や生命をひどく損なってしまうことに憤激して、事件が発覚するたび、私たちはその被害をもれなく食い止める「対策」を要求してきた。実際この問題が注目されるようになって以降、「虐待防止」の名の下に学校や児童相談所や警察のいつそう積極的な介入が奨励され、さまざまな対策がとられてきたのである。

にもかかわらず、このような『本丸』への攻撃はほとんど事態を改善しない。こうした場面で好まれる最もシンプルな対策は刑罰主義的な発想にもとづく犯罪化と厳罰化だが、虐待をこの手法で抑えきえることは

むずかしいだろう。それは多くの場合（他の親密圏の暴力と同じく）、一つ一つは刑事罰の対象にはなりにくい些細な行為によつて成り立っている（そのため虐待者が自分のふるまいの暴力性を自覚しにくい）からであり、被虐待者がしばしばそうした暴力的な関係に深く依存し、これを進んで受け入れている（ようにみえる）からであり、さらにはこれらの事態がすべて私秘圏という場所で生じているからである。この種の現象への刑罰主義的な介入は、すでに起きてしまった事態の処理の仕方としても賢明とはいえないし、まして将来の被害を防ぐにはほとんど無力なのだ。

こうして私たちは、『本丸』への専心、特に政府による直接の干渉を断念し、さまざまな迂回路を探らざるをえなくなる。いわばわざとよそ見をするようにして、虐待とは呼びにくい事象、一見それとは無関係のことがらを広く視野におさめる必要があるのだ。本講のテキストも強調するとおり、虐待を防ぐのは虐待そのものをめがけた強権的な介入だけではない。たとえば、子育てにストレスや不安を抱えている（が、べつに虐待を行っているわけではない）圧倒的多数の保護者への日常的な支援を組み合わせ、継続していくこと、またそうした働きかけを円滑にする制度的・文化的環境を整えていくこともまた、深刻な虐待を生む経路を一つ一つ塞いでいく可能性をもっているのである。

ある問題が複雑な文化的背景や政治的背景、構造的要因や組織体質の影響下で生じているとはそういうことだ。このとき、闇

（1）国家・社会法システム論IBのこと。

（2）社会秩序の形成や維持・回復には「刑罰」的な制裁が唯一不可欠の方途であり、それは規制対象者にじかに苦痛を与えるものでなければならず、それが与える苦痛の大きさに応じてその効果が期待できると考える立場のこと。一般的な用語ではない。

（3）実際のところ、親密圏の暴力の暴力性は、そうした目につくやうい行為そのものではなく、その反復とエスカレーション、そしてその余地を与える長期にわたる閉鎖的な関係性によつて成り立っている。したがっていじめられる子どもが被っている暴力とは、からかわれることでも殴られることでも金をせびられることでもなく、それが果てしなく続くことであり、誰もがそれを黙認していることであり、自分自身がそのような屈辱に甘んじてしまっていることである。

（4）大村敦志『生活のための制度を創る シビル・ロー・エンジニアリングにむけて』（有斐閣、二〇〇五年）

雲に「本丸」だけを叩こうとするのは「言葉の奴隷」の反射でしかない。私たちの考える力が試されるのは、むしろ、その背景的文脈をとらえて迂遠でも確実な手段を見いだそうとするときではないか。虐待対策の構想は、その「本丸」の外に視線を転じるところから始まるのである。

講義ではこんな趣旨のことを述べたのだ。だがこのときはその場の思いつきだったこともあり、いくつか言い足しておくべきことをそのままにしまっていたような気がする。

この話の難点の一つは、学問的な訓練こそがこの「本丸叩き」を逃れる秘訣なのだ、という偏見を助長しかねないところだ。たしかに、紋切り型の思い込みから多くの人が安直な「本丸叩き」に没頭しているときには、ある種の学問的知見が目覚まし役を果たすこともあるだろう。常識に反する見方を示して私たちの神経を逆撫でにし、硬直した信念の再考を促すことは、あらゆる学問が担うべき本領の一つである。「本丸」とは無関係にみえたところに梃子をさしこみ、びくともしなかつた難問を動かす可能性を見いだすには、自明視されてきた問題のとらえ方を別の文脈のなかに移し替えて異化する、学問という「よそ見」の能力が欠かせない。

しかしながら、学問があらゆる言葉への隷属から自由だと考えるのは間違いだ。むしろ私たちは、通念から抜け出せたという慢心と共に別の言葉の体系のなかでまどろんでいるだけなのかもしれない。たしかに経済学を学べば——あるいは心理学を、統

計学を、医学を学べば——、新たな問題の因果とその解決のための梃子が見えてくるように思えるだろう。だがその人が再び文脈感覚を失って、「学識あるラッダイト運動」の提唱者と化してしまわないという保障はどこにもないのである。

もう一つの難点は、「本丸叩き」の抑制が、結果的に責任の所在をぼかしてしまいかねないことだ。親が子どもを殴っているときに、「ほんとうの原因は他にあるのだから、これを食い止めるには、殴る親を責めるのではなく、別のところに働きかける必要がある」と言い張ることは、道義上の（もしくは政治的・法的な）責任逃れを助長するのではないか。新たな梃子の構想と改良を促す因果の連鎖の発見は、「本丸」と思われていたところから遠く離れて、いくらかでも広く周辺領域に拡散するだろう。虐待を防げるのは、住環境の改善かもしれないし、景気の回復と経済格差の是正かもしれないし、地域共同体の活性化かもしれない。だがその事実、ほんとうに「本丸」での問責を無効にするのだろうか？

いうまでもなくこれは決定論と自由、責任をめぐる周知の哲学的問題の一変奏であり、ここであつて深入りするわけにはいかない。だが、（先の教壇上の私のように）ある事象に関する文脈的認識の大事さを強調するあまり、素朴な「本丸叩き」に冷笑的な態度をとってしまうことには、どこか道徳的退廃の臭いがしないだろうか。ここには、物知りが陥るもう一つの愚かさのわなが潜んでいるような気がする。

私たちにとってふつう、「知ること」は

必ずしも「許すこと」を意味しない。子どもを一方的に殴っている大人がいればその腕を握り上げてでもこれを止めねばならない。どれだけ短絡的にみえたとしても、このとつさの判断もまた、私たちが手放すことのできない、もう一つの梃子なのではないか。虐待の背景にどれだけ深刻な事情が潜んでいたとしても、実際に手を下した者への非難をまるごと棚上げにするならば、私たちの社会は社会ではなくなってしまうのではないか。訳知り顔で「ほんとうの原因は別にある」と言いながら、この梃子を捨ててしまうことには慎重であるべきだ。たとえそれが素朴な刑罰主義のような梃子であつても。

因果的判断に拠るにせよ、規範的判断に拠るにせよ、私たちはついめざましい梃子の発見と活用、心を奪われてしまいがちだ。だが、梃子が梃子として機能するのは、それが安定した支点の上に据えられているからだだろう。どんなによくできた梃子でも、そこから切り離されればただの棒である。梃子がまるで魔法の杖のように振り回されるのは、それが何によって梃子でありえたのかを、人が忘失してしまうからにちがいない。というわけで、今の私の関心は、立派な梃子の探索や構想よりも、梃子にその仕事をさせる支点の所在や成り立ちの方にあり。

(5) もちろん、通念的な「本丸叩き」の流れに棹さしてその学問的な補強（粉飾？）に手を貸すことは論外である。

移民のグローバル化は現代社会に新しい挑戦をつきつけている。その主な問題の一つが、差別リスク軽減と移民のホスト社会への友好的統合の保証だ。本研究の目的はエスニシティという現象を社会的リスク管理として記述することにある。エスニシティ形成過程が、社会的排除（差別）のリスクを減少させること、またホスト社会からの信頼獲得を目的とする民族的マイノリティの側からの不断の探求であることを明らかにするものである。

日本、アメリカ、ロシアの三国におけるコリアン移民のエスニシティ形成過程はそれぞれ異なると同時に似通っている。移民の経験には著しい相違がある一方、リスク管理の点で共通する部分があるのだ。各場合において、ホスト社会との統合成功にはホスト社会からの期待の理解だけでなく、その期待によって民族的境界線を際立たせることが要求される。言い換えれば、コリアン・エスニシティは文化的差異の言葉の中でホスト社会の自己記述を再生産するのである（再参入）。

三国におけるリスク管理の支配的モデルを単純化すると、コリアン・エスニシティはロシアではソ連・ポストソ連文化の政治化、アメリカではアメリカ文化の貨幣化、日本では日本文化のモラル化を反映している。つまりコリアン・エスニシティは、ロシアでは社会における政治権力の分配、アメリカでは社会の欠乏リスクの分配、日本では規範違反へのモラル的な感受性維持の分配の形をとるのだ。これは、属するものの表象において民族境界が支配的役割を異にするためであり、ソ連・ロシアでは国の

自治に、アメリカでは金融制度に、日本では抗議運動に帰属する。

しかしながら、社会的差別リスク軽減の試みは新たなリスクを産出する。エスニシティの政治化、貨幣化、モラル化は、政治経済、モラルのリスクにつながる。つまりロシアでは政治的二項対立の中でエスニシティが機能し、民族境界は権力とのパラレル構造を表象し、政府への支持（政治的忠誠）が政府への不支持となる（分離主義）。その結果は否定的制裁（政府の圧力）、肯定的制裁（政府の援助）のどちらにもなり得る。アメリカでは、支払い／不支払いの経済的二項対立の中でエスニシティが機能し、民族境界は将来の報酬への期待の形をとる。エスニシティの貨幣化は経済における民族境界の依存、また民族境界からの経済的業績の独立性を増大させる。その結果民族境界は瞬間的取引においての記述が困難になり、エスニック・コミュニティはグローバル市場への投機にますます依存的になっていく。日本においてエスニシティは善／悪のモラル的二項対立の中で機能し、民族境界はモラル規範の違反に対する感受性の維持の形をとる。つまりエスニシティは肯定的な（共感、尊敬）、または否定的な（批判、軽蔑）モラル上の反応を引き起こすのだ。

このモデルの本質は、ホスト社会における統合成功の是非が移民によるホスト社会の自己記述の再生産次第だということにある。これはドイツ社会学者ニクラス・ルーマンが「再参入」と名付けた、システムと環境間の差異がシステム内で再生産されることに類似している。本研究のこのアプローチはホスト社会における移民の最大限に成



オレグ・パホーモフ  
一九八一年ロシア・ウラジオストク生まれ。  
二〇一〇年京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。  
二〇一一年京都大学博士（人間・環境学）。沿海地方行政国際協力局勤務。

功した統合モデル形成を助けるものだ。より正確には、本研究で提示するモデルは、社会的複雑性と社会的リスク管理の大きな問題の二環として、一般に特定の文化的多様性の民族境界形成の過程について説明するものである。それは社会的統合モデル構築、ホスト社会への民族的マイノリティの統合の効果的方法を開発するモデル構築に役立つものとなる。社会的モデルの構築は、社会的統合の過程で起こりうるリスクを予測し、異文化コミュニケーションにおける様々なリスク戦略が引き起こしうる結果の推定に役立つのだ。本研究によって得られる成果は多文化社会における国家管理プロジェクト開発への応用が可能なのである。民族・人種差別リスクの軽減のためには、移民だけでなくホスト社会の変容が必要となる。何よりも、イデオロギーと組織編成のレベルで変化が国家に対して要求される。本研究の成果はこの変化の過程がいかにモデル化できるか、制御可能かを理解する助けとなる。国家が社会的複雑性の増大に適応し自らの正当性を保持しながら、多文化社会における管理統制の効率をいかに高めるのかという問いに答えることも可能である。



埼玉に住む私の祖父は九四歳、祖母は八七歳で今なお健在で、毎朝欠かさず歩いて天理教の教会に日参している。祖父は自転車にも乗る。家の掃除・修繕は祖父が、買い物・炊事・洗濯は祖母がいまも行っている。祖父は太平洋戦争終戦後にシベリア抑留で、不十分な食事や休養のもと厳寒環境下で過酷な労働に従事し、昭和二年春に舞鶴港に帰還した。祖母は浅草にて昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼け出され、祖父が働き貯めてきたお金をいただきながら、大学院に通わせていただいていたからだろうか、いつのまにか導かれるように高齢者研究に従事することとなった。

現在の日本人の平均寿命は八十歳を超えているが、このような長寿社会にあつて重要なのは単に寿命が延びることよりも、心身ともに健康で自立した状態を長く維持することであろう。七五歳以上の後期高齢者の要介護の要因として、サルコペニアと呼ばれる「骨格筋の量と質の低下」の問題が挙げられる。

私の研究の一つの軸は、サルコペニアを評価する簡便で正確な方法を検討することである。CT（一九七九年ノーベル生理学・医学賞受賞）やMRI（二〇〇三年同賞受賞）は、非侵襲的に生体内の情報を画像化することができ、骨格筋断面積や体積を測りることができ、確かに可視化された情報にはインパクトがあり、それが骨格筋を反映しているということに対しては、非常に説得力がある。国際学会での指針もCTやMRIによる骨格筋量計測をゴールドスタンダードと提案している。しかし、私の研究はCTやMRIがゴールドスタンダードとして本当にふさわしいかを問ひかけるもので、いわば世界の常識に対して孤独に戦いを挑んでいる。

サルコペニアにおいては、骨格筋内の脂肪・結合組織のほかに細胞外液も増加するが、MRIやCTなどの画像法では筋細胞とその間隙にある細胞外液を弁別することができない。つまり、従来の画像法では骨格筋の真の細胞量を過

大評価していることに大きな問題がある。私は、筋細胞膜の電気的な性質を利用した、部位別多周波生体電気インピーダンス分光 (BIS) 法という方法を用いて、細胞外液を骨格筋量から除いた骨格筋細胞量を非侵襲的に定量化すること、骨格筋細胞量が老化に伴って大きく減少し、筋力と強く関連するというデータを得た。投稿した論文は計五人の査読者にまわり結局一年半かかって、アメリカ老年学会誌に受理されたのだが、幸いなことにその年が、アメリカ老年学会が設立六十五年目ということで（学会がWHOの定義の高齢者になった）、その六五周年記念論文に選ばれたという結果になった。掲載までに時間がかかった理由としては、インピーダンス法は、家庭用の体組成計で用いられている方法で、極めて簡単な方法であり、そのようなものが使えるということに対しての驚きがあったのだろうと思う。

私自身、BIS法が使えるという結論に到達するまで、多くの測定を繰り返した。

私はもともと文系で総合人間学部に入学したので、理系の知識に乏しく、運動科学の研究室に配属したものの、実験が得意でなかった。また、体育会でラクロスの練習に明け暮れていたため、ろくに論文も読まず、実験もしていなかった。そこで、もともと手軽に使えるインピーダンス体組成計で、競技選手の筋肉量を測定するという誰でもできるテーマを選んだ。人間・環境学研究科に進学してもラクロスばかりしていたので、論文を読んでもわかりなかつた。ただ、インピーダンス法が簡単という理由で、とりあえず測定をしているうちに、いつのまにか千人以上のデータが集まっていた。それをまとめている際に、文献の推定式から得られる高齢者の下腿筋量が、施設入所高齢者で逆に高いという不思議な結果を得た。そのころには、既に修論も切目前で、他に行っていた実験もなく、このおかしい結果と向き合うしかなかった。どうにかその現象の理由と問題点を解釈するために、苦手の論文を読みあさり、従来のイン

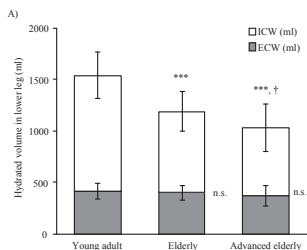


図2. 下腿骨格筋における細胞内液量 (□) と細胞外液量 (■) の加齢変化。



図1. 正常 (左) と筋萎縮した (右) マウス腓腹筋組織。筋萎縮に伴って、細胞間隙が相対的に拡大する (Sartorelli et al. 2005)。



山田陽介 (やまだようすけ) 一九八〇年埼玉県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程指導認定退学。京都大学博士 (人間・環境学)。現在、京都府立医科大学、日本学術振興会特別研究員 (SPD)。専門分野はスポーツ・健康科学。

ピーダンス法は、主に体水分を測定しているということをはじめとした様々な原理を理解した。施設入所高齢者では下腿が浮腫によって象の脚のようになっていた人が存在し、その結果、従来のインピーダンス法では高齢者の筋量を測定するのに限界があることを知った。通常であれば、その後、MRIやCTを使った研究に進むのだったが、幸か不幸か、実験に使えるお金もなく、結果としてインピーダンス法とことごとくまで付き合うしかなかった。その結果、リン脂質二重層からなる細胞膜がコンデンサとして模式化され、交流電気回路では周波数帯によって得られる情報が異なるということを知り、BIS法という新しい方法を用いることで、細胞外区画と細胞内区画の水分情報を得られることを学んだ。その後はとにかくデータを測定し、試行錯誤を繰り返した。確信はもてず、国際学会で体組成測定の権威の先生方に質問してみても、インピーダンスは限界があるという答えばかりだった。そこで、データをもつて飛び込みで、アメリカのウイスコンシン州立大学の Schoeller 先生のもとに留学し、拙い英語で先生とデイスカッションを繰り返した。そのデイスカッションのなかで、最終的に仕上げた論文を先生に提出した翌日、Schoeller 先生は、院生室にすごい勢いで入ってきて、私にこういった「Yosuke, it's very exciting!」。までもそのときの興奮は忘れられない。

実際のところ、まだまだ実証データが乏しいため、今もなお、証明しなければならぬ課題は山積みである。しかし、データ収集と実験、先行研究の読み込みを積み重ねながら、自分のなかで少しずつ核心に近づいているように感じるこのわくわく感はとても楽しい。多くの先生方との出会いで、いまの研究に導かれていることに心から感謝している。

Yamada, Schoeller, Nakamura, Morimoto, Kimura, Oda (2010) Extracellular water may mask actual muscle atrophy during aging. J Gerontol A Biol Med Sci 65:510-516. 65th Anniversary Celebration Article.

# 奈良の庭園 ―古代から近代まで―……小野健吉

KENKICHI ONO



小野健吉（おの けんきち）  
一九五五年和歌山県生まれ。一九七八年京都大学農学部林学科卒業。  
博士（農学）。現在、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部長、京都大学大学院人間・環境学研究科客員教授。専門は庭園史・歴史遺産の保存と活用。主な著書に、『岩波日本庭園辞典』『日本庭園―空間の美の歴史』（いずれも岩波書店）など。

奈良の文化遺産といえ、誰もが思い浮かべるのが寺社建築と仏像だろう。世界遺産の構成資産を見ても、「古都京都の文化財」には天龍寺・金閣寺・龍安寺など庭園が重要な位置を占めるものが少なくないのに対し、「古都奈良の文化財」のほうは大寺・興福寺・薬師寺・唐招提寺・元興寺・春日大社などいずれも建築が中心で、庭園としては平城宮跡の中で発掘されて復元整備された平城宮東院庭園（以下、東院庭園）があるだけだ。とはいえ、奈良の庭園にも、今あげた東院庭園をはじめ、京都にはない奈良ならではのものも多い。以下、時代を追って奈良の庭園を紹介してみたい。奈良においての際には、庭園にも足を延ばしていただければと思う。

## 平城宮・京の庭園

古代の庭園としては、まず東院庭園と平城京左京三条二坊宮跡園（以下、宮跡庭園）。いずれも奈良時代に造られた庭園だが、もちろん、これらは地上にずっと庭園の形をとどめてきたわけではない。平城京が八世紀末に首都としての地位を失うと、寺社地などを除く多くの土地は農地へと転換し、奈良時代の遺構は地中に埋もれてい

く。東院庭園や宮跡庭園も千二百年近く人々の目に触れることなく、地中に眠ってきた。

東院庭園が発掘で初めて見つかったのは昭和四二年（一九六七）。それまで正方形だと考えられていた平城宮の東側に張り出し部が付きそうだということが明らかになって間もない頃だ。その張出し部の東南隅で、この庭園の池の跡が見つかったのだ。以来幾度かにわたる発掘調査で全容が明らかになった。築地塀と板塀で囲われた区画の中に、東西五〇〜六〇m、南北五〇mほどの池を中心とした庭園が展開する。実はこの庭園は奈良時代の後半に大きな改修があり、改修の前と後では池のデザインが大きく変化する。改修前の庭園の池では、輪郭に直線的な部分も見られ、また、池の中の岸に近い部分には汀線に沿うように帯状に石が敷き詰められていた。それが改修後の庭園の池では出島と入江が連続する流麗な曲線が岸辺をなし、池底から緩い勾配の岸辺の立ち上がりまで一面に拳大の石を敷き詰めた仕上げとなる。また、池の中には島が一つ設けられ、北岸の低い築山には三〇個近い石を用いた見事な石組が作られる。後世につながる日本庭園の形が、確かにここに

物ともども復元されているので、ぜひ御覧いただきたい。

なお、池は、遺構を保存するため全体的に土をかぶせてその上に新しい材料で復元したものだ

だが、庭景の焦点となる北岸の石組はほぼ発掘されたときのままである。

もうひとつの発掘された奈良時代庭園として知られるのが宮跡庭園だ。こちらは、平城京内、つまり宮殿域ではなく都市域にあるが、宮殿と同じ文様の瓦が出土していることなどから、公的な宴遊施設だったと考えられている。造られたのは、奈良時代の半ば頃。旧河川流路をなぞるような、蛇行する池が庭園の中心だ。竜の形を模したという説もある全長五五mの池の底には上面の平らな石が隙間なく敷き詰められる。岸辺には、主に玉石を立て並べるような手法が用いられている。少し池に突き出す岬



宮跡庭園・池は竜の形？



東院庭園・北岸の石組



状の場所を中心に石組が置かれ、また、岸から離して池の中に据えた岩島も見える。この庭園は、発掘された池の遺構をそのまま見せる形で、復元建物ともども整備されている。石材の劣化防止等が大きな課題だが、一二〇〇年以上前の庭園の池全体がそのままの姿で見られる世界的にもたいへん貴重な例だ。

### 中・近世の寺院庭園

奈良というと古代のイメージが強いが、中近世の奈良も興福寺・東大寺といった神社を中心に、宗教や文化の面では重要な位置を占めていた。庭園については、奈良ホテルの南側に広がる旧大乘院庭園が中世以来の面影を残す遺構として知られる。

興福寺の門跡寺院だった大乘院。その庭園については、十五世紀後半の門跡・尋尊の日記を収録する『大乘院寺社雑事記』に記事が見える。筆まめだった尋尊は、普通あまり書かないような庭園の工事などについても記しているのだ。なかでも注目されるのは、作庭の名手として足利義政の同朋衆に加えられた善阿弥とその子・小四郎が、徳政一揆による火災からの復興の仕上げとして作庭にかかわっていることだ。完成した庭園は名園の評判が高く、皇族や有力武家が見物に訪れたことも記されている。その後、江戸時代に入っても、豊かな経済基盤をもとに、大乘院の庭園は改修や整備が重ねられる。江戸末の『大乘院四季真景図』には、見事な庭園が詳細に描かれている。近代に入って大乘院庭園は時代の荒波

に翻弄されるが、近年になってようやく保存と活用の枠組みが確立し、発掘調査に基づく整備が行われた。発掘では、完全に埋もれていた西小池がほぼ『大乘院四季真景図』に描かれたとおりの形で姿を現した。優美さを感じさせる西小池が、大勢を保っていた東大池ともども復元的に整備され、江戸末のこの庭園のイメージが現地によみがえっている。

もう一つ近世奈良の庭園として見逃せないのが、大和郡山にある慈光院だ。慈光院は、茶人大名として知られる大和小泉藩主・片桐貞昌（石州）が創建した寺院。建物を含めた境内地全体が庭園的な構成を持つが、とりわけ注目されるのは東向きに開けた書院の庭園だ。白砂敷きで、生垣越しに大和盆地の景色が大きく広がる東庭は、往時の田園風景は失われたものの、石州の茶人そして領主としての美意識がよくうかがえる。

### 近代の「自然主義」庭園

明治維新以降の西洋文化の移入や近代化の中で、日本庭園もその様相を変える。自然主義的なデザイン、すなわち「見立て」や禁忌から解放され、周辺の景観を活かしつつ、心地よい空間を創造しようという風潮が現れるのだ。明治時代の早い時期に東京で始まったこの種の庭園は、山縣有朋の京都別邸・無鄰庵で庭師・植治こと小川治兵衛の技量とも相まって見事な姿に結実する。その後、このタイプの庭園は一世を風靡するのだが、奈良でもこうした自然主義

的なデザインの庭園が現れる。それが、東大寺の西隣りに位置する依水園だ。

奈良の実業家・関藤次郎が依水園の築造に着手するのが明治三二年（一八九九）。無鄰庵庭園の完成が明治三十年（一八九七）頃だから、かなり早い時期と言える。以後、一〇年あまりをかけて造り上げられた。新造された東の池庭では、すぐそばを流れる吉城川から引いた水で溪流や池を造るとともに、山里のイメージをかきたてる水車小屋なども置く。さらに、隣接する東大寺南大門、その背後左手の若草山、右手の御蓋山、さらにそれらの背景をなす春日山を借景とする。類まれな歴史的風土を活かし、心地よい空間に仕上げられた依水園は、立地環境を活かきつた近代庭園として見事な出来栄えを見せる。ちなみに、依水園のすぐ南隣にある吉城園も大正時代に造営された邸宅だ。東が一段高くなった地形を活かし、茶室と庭園の一体感を意図した秀逸な構成が見どころとなっている。



依水園・池庭と借景



慈光院・書院からの眺望



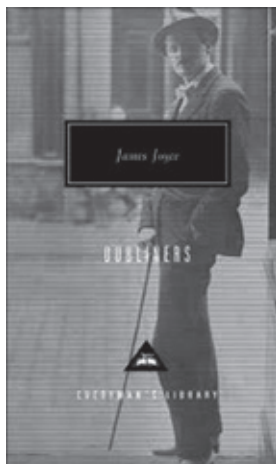
旧大乘院庭園・復元整備された西小池



# ゴースト・ダブリンの幻——ジェイムズ・ジョイスの「死者たち」を読む

小島基洋 | MOTOHIRO KOJIMA

グレシャム・ホテルの街灯



「さあね。彼に会うためなんじゃないの？」

彼女は彼から視線を外すと、何も言わずに、光の線に沿って窓の方を見た。

「彼は死んでるわ」長い沈黙の後で彼女は言った。「ほんの十七歳で死んだのよ。そんなに若くして死んでしまうなんて、ひどいと思わない？」

(二三七—三八…傍線筆者)

一九〇四年一月六日、ダブリン。大学講師のゲイブリエルとその妻グレタはクリスマス・ディナーを堪能した後で、市内の高級ホテルに向かう。久しぶりに訪れた二人の甘美な夜に気もそぞろな夫ゲイブリエル。そんな夫になぜか妻グレタは泣きながら告白を始める。彼女にはどうしても忘れられない初恋相手がいいたのだ。

「・・・ゴールウェイに行きたがったのは、そのためだったんだね」と彼は冷たく言った。

彼女は夫に視線をおくると、驚いたように尋ねた。

「何のためですって？」

彼女の目はゲイブリエルを動揺させた。

彼は肩をすくめて言った。



小島基洋（こじま もとひろ）  
一九七五年愛知県生まれ。京都大学大学院文学研究科修了。博士（文学）。札幌大学外国語学部、愛知大学文学部を経て、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。専門は英文学。主な研究対象はアイルランド作家、ジェイムズ・ジョイス。著書に『ジョイス探検』（ワネルヴァ書房、二〇一〇年）。

「彼は何の仕事をしてたというんだい？」ゲイブリエルは、依然として皮肉な調子で尋ねた。

「ガス工場で働いてたのよ」彼女は言った。

(二三八)

衝撃的な告白の直後にしては、間の抜けた質問だが、謎解きのヒントを提示するタイミングとしては悪くない。石炭からガスを生成する「ガス工場」(gasworks)に勤務していたフューリー。それゆえに、彼は今、ガス灯から光を放つのである。その先にいるのは、かつて命懸けで愛した恋人グレタだ。二人が最後に会ったのは、ある大雨の晩のこと。病床から抜け出したフューリーは、濡れになりながら彼女の部屋を訪ねたのである。そして、この夜、フューリーは再び彼女が泊まる客室を懸命に照らし続けているのだ。当時、アイルランドの最高級ホテルであったグレシャム・ホテルの売り文句は、電灯(Electric Light)が設置されていることだった。しかし、夫妻が部屋に入った時にこんなトラブルが告げられてもいる。





門番は電気のコセンントを指差して、謝罪の言葉を呟き始めたが、ゲイブリエルはそれを遮った。

「照明はいらないよ。通りの明かりで十分だ。それからね」と彼は蠟燭を指差しながら言い添えた。「お願いなんだけど、その結構な代物、どこかに持って行ってくれないかな」

門番は再び蠟燭を手にしたが、その動作はゆっくりとしていた。こういう奇妙な考えに驚いたのだ。彼はもともと、おやすみなさいませ、と呟いて部屋を出て行った。ゲイブリエルは鍵をかけた。

街灯から青白い明かりが射しこみ、長い光線となって、窓からドアまで伸びた。

(二三四)

門番は室内の電灯に問題があることを告げ、代わりに蠟燭を置いていこうとする。しかし、「奇妙な」ことに、ゲイブリエルはそれを持ち去るよう命じる。おそらく彼は真つ暗闇の中でグレタと二人きりになったかったのだ。しかし、その瞬間、窓の外からは「青白く明かり」(“ghostly light”)が…。

## Gas, Chaos, Ghost

なぜ死者フューリーはガス燃料が放つ光といった奇妙な形で現れるのか―その答えはテキストの外にも見出すこともできる。

ポイントとなるのは *gas* という単語の語源だ。ジョイスが「死者たち」を執筆当時(一九〇七年)に愛用していた『英語語源辞典』第三版(一八九八)では、その起源を以下のように記述している。ここで語源学者のスキートが自信なさげに披露している *gas* の語源、それはなんと、オランダ語の *geest* だ。英語で言えは *ghost* である。「ガス」の起源は「幽霊」だと言うのだ。真相が明らかになるのは―すなわち *gas* という語を

**GAS**, an aeriform fluid, (Dutch.) The term is known to have been a pure invention. The Belgian chemist Van Helmont (died A. D. 1644) invented two corresponding terms, *gas* and *blas*; the former came into use, the latter was forgotten. We may call it a Dutch word, as *gas* is the Du. spelling. ¶ As the word is thus known to have been an invention, it is absurd to find an origin for it. The utmost that can be said is that Van Helmont may have had in his mind the Du. *geest*, spirit, ghost, volatile fluid, as a foundation for *gas*; and the verb *blazen*, to blow, as a foundation for *blas*. Der. *gas-e-ous*, *gas-o-meter*. [†]

ギリシヤ語の *chaos* (混沌(カオス))から作ったとする化学者 J・B・ファーン・ヘルモントのメモが見つかるのは―この数年後のことである。

## ノラの恋人あるいは空虚のヴィジョン

二〇〇九年十月三十日、ゴールウェイ。駅から車で十五分ほど、市街地を見はるかす丘にラフーン墓地はある。ケルト十字を

あしらった墓石が立ち並ぶ一角で、マイケル・ボドキンは今も眠っている。作家ジョイスの妻であるノラの初恋相手だ。短編「死者たち」に登場するグレタの恋人マイケル・フューリーのモデルである。

後にダブリンの街角でジョイスと出会うことになるノラ・バーナクル。彼女はアイランド西岸の港町ゴールウェイ市で生まれた。当時、近所の教会で受付をしていた美少女が恋におちた相手がマイケル・ボドキンだ。ガス会社で働いていた彼は、二十歳の若さで結核を患い、この世を去った。それ以上のことはよく分らない。

アイランドには珍しい大粒の雨に打たれながら、一つ一つ墓碑銘を読んでいくと、北門に程近い大きな墓石にそれはあった。折からの雨をたっぷり含んだ枯葉を取り除くと、辛うじて文字を読み取ることができた。

... IN LOVING MEMORY OF THEIR  
DEARLY BELOVED SON MICHAEL  
WHO DIED ON THE 11th OF  
FEBRUARY 1900 AGE 20 YEARS...

一人の男がある冬の日に二十歳で死んだ。百年前に刻まれた文字はそれ以上の事を語るわけではない。ただその切ない想いが、墓石に置いた右手からはつきりと伝わってきた。

「ずっと探していたのか?」

背後から男の声がした。



参考資料  
James Joyce, *The Portable James Joyce* (New York: Penguin Books, 1978)  
Walter W. Skeat, *An Etymological Dictionary of the English Language*, 3rd and 4th ed. (Oxford: Clarendon Press, 1898)  
小島基洋『ジョイス探検』(ミネルヴァ書房 二〇一〇年)

# 「サン＝シュルピス広場 —ありふれた日常を見つめる場所—」

塩塚秀一郎

SHIOTSUKA SHUICHIRO



塩塚秀一郎（しおつか しゅういちろう）  
京都大学大学院人間・環境学研究科  
比較文明論講座文明交流論分野 准教授

パリのサン＝シュルピス教会は、小説・映画『ダ・ヴィンチ・コード』に登場して、ひと頃多くの観光客を集めることになった。ノートルダム大聖堂に次ぎパリ第二の大きさを誇る教会堂であり、ドラクロワのフレスコ画『天使とヤコブの闘い』を始めとする数々の芸術作品を収蔵するこの建物は、移り気なブームなどに関わりなく、もともと堂々たるパリの観光名所であったと言ってもよい。だが、本稿ではこの教会ではなくその西側に位置するサン＝シュルピス広場に視線を移してみたい。一九七四年十月十八日から二十日までの三日間、作家ジョルジュ・ペレックはこの広場の一角に陣取り、普通なら目にとまるはずのない車、人、雲

など、要するに目立つものの以外のすべてを書き留めようと試みた。その結果は『パリのひとつの場所を書き尽くす試み』（一九七五年）として出版され、そこでは、道行く人の持ち物、犬、通り過ぎる路線バスの行き先や混み具合、鳩、人々の歩行のリズムなどなど、およそ誰の興味も引きそうにない平凡で些細な事柄が、目録のように素っ気ない文体で記されているのだ。こんな書物を手に取った人は誰しも思わずにはいられないだろう。いったいこれは何なのか？

現代の百物語とも称される『人生 使用法』やEの文字をひとつも含まない小説『煙滅』など、大胆な文学実験で知られるペレックは散歩の達人でもあり、見慣れたはずの街を新鮮な視点で見つめ直す彼の一連の試みは近年再評価が著しい。それらの源流にあると思われるのがちに「場所」と呼ばれることになる企てである。一九六九年、ペレックはパリ市内から自らの人生と深く関わる十二の場所を選び出し、毎月二箇所ずつ描写していくことにした。二箇所のうち、一方は現場で書き記し、もう一方は描写対象とは別の場所でもつばら記憶だけをたよりに記すのである。付随して甦ってくる思い出もすべて書き留めるようにし、書き終えると封筒に入れ封印してしまふ。どの月にどの場所を描写するかは特殊なアルゴリズムによってあらかじめ決められていた。こうした作業を十二年間、すべての場所が、〈現場での描写〉と〈思い出〉として二度ずつ、十二回記述されるまで続くはずの計画だったが、実際に

は一九七五年に企ては放棄され、草稿だけが残されることになった。

これもまた真意をつかみかねる試みであるが、当の本人にも結果について確たるあてがあったわけではないようだ。終わってみなければ何が得られるか分からない実験という面もあるし、結果よりも過程こそが意味をもつコンセプトチュアル・アートとも見なせよう。いずれにしても、ペレックは「時間の経過」が重要なファクターになると予想していたようであり、残された草稿をみるとその痕跡が確かに刻まれていることが分かる。作家が選び出した十二の場所の中には、彼が両親とともに幼少期を過ごしたヴィラン通りも含まれている。ペレックはここで人生最初の幸福な数年間を過ごし、そして、ユダヤ系であった彼の母親や祖父母はまさにこの場所から収容所へと送られたのだった。そのヴィラン通りにおける〈現場での描写〉は六年分が残されている。この間の時の流れをよく証言している。年一度の記述を通じて、時の流れがもたらすもの、とりわけ「破壊」の爪痕がくつきりと浮かびあがってくるのである。それも、再開発による破壊のみならずホロコーストによる破壊が。そもそも、作家の母、祖父母をはじめとして、この場所で暮らしていたユダヤ人たちは根こそぎ連れ去られたわけだから、ヴィラン通りは六〇年代から七〇年代の再開発で傷つけられる前に、すでに理不尽で圧倒的な暴力の犠牲になっていたとも言えよう。さらに、最初の破壊を免れた人や建物にも時間の経過が容赦なく襲いかかる。一九七四年の第五回訪問時にペ





ピエール・ジェツレル撮影のサン＝シュルピス広場

レックが目にしたのは、広場の用地として土地を接収する旨のパリ市広報であり、これによって彼は、母の記憶を留めていた人々までも消え去ったことを残酷にも思い知らされるのである。

興味深いことに、冒頭で紹介したサン＝シュルピス広場の三日間にわたる定点観測が行われたのは、一九七五年に「場所」の企てが決定的に頓挫する前であった。つまり、「書き尽くす試み」は「場所」から派生した企画であるとも考えられるわけだが、前者からは後者にあつたはずの「時間の契機」はすっかり影を潜めている。「場所」は十二年間におよぶ時間の経過を組み込んでいたのに対し、「書き尽くす試み」はたった三日間の記録なのだから。また、「場所」で記述される空間は何らかの意味

でペレックの人生と深い結びつきをもつものであったが、サン＝シュルピス広場はそうした意味合いをもたない。そして、ヴィラン通りは再開発の対象になり消滅の危機に瀕していたが、サン＝シュルピス広場にはそうした脅威はなかった。したがって、企ての焦点は経年変化から現在時に移行していると言えるし、自己から外界へとというシフトも生じていることになる。サン＝シュルピス広場を「書き尽くす試み」は、他人にとつてのみならず自分にとつても特別な意味を持たない、ありふれた、何げない場所の、ごくあたりまえの日常を記録する試みなのである。

「書き尽くす試み」が行われる一年前の一九七三年、ペレックは雑誌に寄稿した小文で、「ありふれたものごとをめぐる人類学」を提唱しつつ、こう問いかけている。

我々は日常の物事に慣れすぎてしまっているのだ、それらが投げかけてくる問いを意識できずにいるが、そうした問いかけに気づき、応答するにはどうすればよいのか、と。つまり、サン＝シュルピス広場での試みは、あまりにありふれていて、視野に入らつてこないものを「見る」ための実習だったようなのだ。

先に、サン＝シュルピス広場を「書き尽くす試み」からは時間の契機は失われていると述べたが、根源的なところでは必ずしもそうは言い切れない。というのも、ペレックにおける日常的なものの探求は、やはり喪失の感情に由来しているようにも思われるからである。彼は戦争中の数年間に、いつまでも続くと思っていたありふれた風



ピエール・ジェツレル撮影のサン＝シュルピス広場

景を失ってしまった。彼が抱く日常への関心の根底にはやはりこの原体験があるのだろう。当たり前に目にしていたはずの何かが消えてしまった、あるいは消え去るかもしれない。空虚の感覚や欠如への恐怖を追い払う方法として、彼は日常的なものの目を向け、執着したのではないか。

もうお分かりのように、「世界の街角」というテーマのもとで「サン＝シュルピス広場」と標題を掲げたのは口実に過ぎない。日常的でありふれたもの、よく見知ったもの、あれこれにあえて目をとめ、ゆっくりじっくり眺めるならば、世界の果てまで行かずとも、見慣れた周囲の空間が、未知なるものに溢れた、新鮮で心ときめかせる風景に変わるかもしれない。いつ消えるかもしれないその風景は、今、我々こそが心に刻まねばならぬものなのだ。

# グローバル化と多言語主義

一全ての言語は「対等（イコール）」であるが、  
英語は他の言語に比べ、より「対等（イコール）」である

ベル・アッベス・ネダール

BEL ABBES NEDDAR



1960年アルジェリア・オラン生まれ。ロンドン大学修士課程修了。応用言語学博士。  
アルジェリア・モスタガネム大学上級講師、京都大学人間・環境学研究科客員准教授。  
専門は英語学・英語教育学。語用論、ディスコース分析を中心に研究している。  
著書 *Schema, Discourse and Language Teaching: An Introduction* (2004) など。

## はじめに

この話のきっかけは、私が聖護院付近を散策中、一団の外国人観光客とすれ違ったところにある。彼らは道に迷った様子で、そのあたりの住人に道を尋ねているように見受けられた。ここまではありがちな光景だ。しかし私の興味を引いたのは、彼らが英語で話していて、それは彼ら自身も、尋ねられた人も得意でないらしい、ということだった。私は彼らをその訛りからしてフランス人と見た。言語に携わる私は、なぜ彼らが基礎すらもよく知らない言語をわざわざ使うのが気になった。なぜ、フラン

ス語でも日本語でもなく英語なのか？なぜ彼らはゆきずりの人が英語を話せると思ったのか？こういった疑問は次第に、我々が外国旅行をするときの常習的行動になってしまった現象への関心に収斂していった。なぜ英語はまるでアメリカ・ドルのように強い影響力を持ち広く使われるようになったのか？私はこれが、グローバル化と台頭しつつある新世界秩序に関連していると思う。しかしデカルトの弟子を自認する私は、結論を急ぐリスクを回避し、分析が必要だと考えた。以下はその分析の結果である。

## 定義

「グローバル化」は昨今の最重要問題を示す用語としてその意義を増している。この概念に対する（特に新興諸国の）恐怖は、グローバル化の概念が誤解されているか懸念されている重要な指標である。実際この語は異なった意図、さまざまな目的に用いられる。その影響は、肯定的にも否定的にも捉えられるが、いまだに十分に理解されているとはいえず、さまざまな推測や仮定の余地を残している。グローバル化は常にアメリカ化と、アメリカ主導型世界と結びつけられてきたことを考えると、これらの恐怖や不安はもつともなものである。バティアによる定義「国々間の結びつきというよりは、国々のアメリカ的生活様式への依存、を意味する怪しい用語」にもそれは表れている。(177)

グローバル化という語は世界の縮小、距離の短縮の過程を指している。(Larsson 1)

グローバル化は世界中の人々の間の接触をより頻繁で親密なものにする。M・ウォーターズの描く風景は殺伐としたものである。一つの社会、一つの文化が地球を覆い、中央集権的政府も、文化的嗜好や規範の縛りもなく、社会的文化的原理としての領土の概念もなくなる、というのだ。グローバル化された世界では、ある場所の地理的な位置によって、その場所の社会的な慣習や嗜好を予測することは不可能になる。従って、ウォーターズによるグローバル化の定義は次のようなものとなる。「経済、政治、社会、文化で起こることに対する地理的制約が縮小し、人々はそれを実感し、それに従って行動する、そのような社会的過程」(55)ウォーターズの描き出すグローバル化社会においてはコミュニケーションと言語が重要な位置を占める。従ってグローバル化を論じる者は言語に注目し、逆に、言語教育者はグローバル化に注目する。ウォーターズによれば人間関係は領土に縛られなくなり、当然共通言語が用いられるようになる。この言語は、それぞれの土地の言語が用いられることを阻害することなしに、リングワ・フランカ（共通語）として働く。

## 世界の共通語 (lingua franca) と一つの英語

現代的視点から国際社会を見たとき、英語がこの共通語 (lingua franca) となることは十分考えられるし、また実際そうになっている。英語の世界支配の理由は三つに整理できる。(1) 大英帝国の力 (2) アメ

リカの経済力(3)他の言語に比べたときの英語の文法的シンブルさ。

実際、「共通語としての英語」(English as a Lingua Franca 以下ELFと略記する)はアメリカがその原理、信念、道徳的価値観に沿って世界を支配しようとする戦略の一部である。ここから話は英語とそのヘゲモニーに移る。

ハウスの表現を借りると、英語は今や「強大な国語(a great national language)」である。一九九五年のブリティッシュ・カウンシルの調査では、一三九八人の回答者のうち九六・三%が、英語が世界のコミュニケーションの主たる言語であり、また将来もそうであろう、と答え、七九・二%が、英語の地位を脅かす言語は無いだろう、と答えている。英語は国連(一九四五)、世界銀行(一九四五)、国際通貨基金(一九四四)、世界保健機構(一九四八)、国際原子力機関(一九五七)、コモンウェルス(一九四九)といった国際組織の共通語(lingua franca)である。

英語の優勢はかくも明らかなものである。フィッシュマンなどはきつぱりと「地域の文化、言語、アイデンティティがいかに強固に築き上げられ、保護されている」とも「この優勢は続くだろう、と言い切っている。(268)要するに英語はグローバル化の根本にある現象である。それは、英語が世界の国家および個人のアイデンティティを再定義し、政治的断層を移動させ、新しい富のパターンと社会的疎外を生み出し、人権と市民の責任の新しい概念を提案することによる。(Graddol 12) グラドル

はまた、グローバル化によって世界は新しい社会的、経済的、政治的秩序へと急速に、いや、唐突にといおうか、移行しつつあり、それに伴い言語間にも新しい世界秩序が形成されつつある、という。まさにグローバル化と英語とはびったり結びついている。英語はグローバル化を加速させ、グローバル化は英語の拡張を加速させている。この傾向を示す数字を見てみよう。英語を話せる人は一五億人以上いて、そのうち英語を第一言語とする人は約四億人、第二言語とする人は約六億人、あとの約六億人は外国語として英語を話せる人々である。また、英語によるコミュニケーションの八〇%は、英語を母語としない人どうしの間で行われている。さらに、クリスタルによれば、二〇二五年までには、グローバル化によって、母語として英語を話す人よりも外国語として英語を話す人の方が多くなると予想されるという。今日世界で二〇億人の人が毎日何らかの英語に接している。英語学習者の増加は留まるどころを知らず、一〇年から一五年のうちに二〇億人に達するであろう。パターンとして見ると英語の非母語話者は増加する一方、母語話者は減少しているのである。

ELFに関する二つの言説を紹介しよう。第一の言説はデ・スワーンとその世界言語理論に関わるものである。人類は移動を繰り返す中で多様性を生み出し、言語システムとしての世界地図を作り上げてきた。このシステムはデ・スワーンが「超中心言語(hypercentral language)」と呼ぶ英語を頂点とする四層からなるヒエラルキーをなし

ている。これを図に表すと次のようになるだろう。(Fig.1) 第二の言説は英語の有用品としての有効性と道具としての価値に関わるものである。(Gray) 英語は一つの国の近代化の門番であり、個人の社会的経済的成功のカギとなっている。(Pan and Booc) 英語は進行中のグローバル化のプロセスにおいて最重要の役割を果たす。この立場は、多くの国々において英語の能力が高等教育や就職に要求されるという現象に裏打ちされている。(Philipson 82)

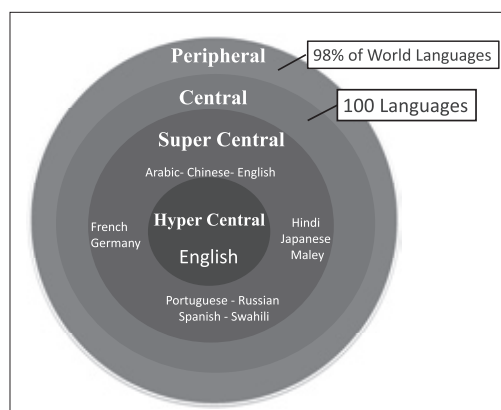


Fig 1 スワーンのヒエラルキー

### グローバル化社会における言語行動

次に、グローバル化社会において言語行動の手段はどのようになると予測されるであろうか、考えてみよう。考慮すべき選択肢は(a)多言語環境を維持する。(b)英語を共通語(lingua franca)として受け入れる、の二つである。まず多言語環境派の議論を見てみよう。グラドルによれば、

(1) ELFは、母語の異なる話者どうしのコミュニケーションの手段として用いられる英語を指し、必ずしも英語のネイティブスピーカーの基準に従うことを要求せず、伝達という機能を重視するもの。文法的に単純化されているという特徴を持つ。



英語はもはや唯一の選択肢ではない。(62) 地域によっては中国語、スペイン語といった他の言語が英語の支配的地位を脅かしつつあり、多国籍ビジネスにおいて英語は唯一の言語ではない。中国語の地位は着実に上がり、日本語、ヨーロッパ諸語の大半の地位は相対的に沈みつつある。グラドルはこの状況の原因を次のように分析している。

(1) 非英語話者のインターネットユーザーの増加、(2) コンピューターソフトが多言語をサポートするようになったこと、(3) インターネットが地域の情報発信に用いられるようになったこと、(4) インターネットが友人や家族などの個人的な伝達に用いられるようになったこと、(5) インターネットが離散した言語コミュニティを結びつけていること。(42)

次に英語共通語(ELF)派について見てみよう。騙されてはいけない。英国の言語学者の唱える、『英語』は『もうひとつの英語』すなわちELFに脅かされている」という言説には理論的な裏付けはないように思われる。確かにELFに関する大量の文献はELFに独特の地位を与えているが、この地位は脆弱で疑わしいものである。敢えて言うが、ELFに関する議論は推測的で机上の空論である。しかもELFを記述する十分な資料がないことが、それに拍車をかけている。もちろん、モウラネン、ザイドルホファー、ジェンキンズなどの努力があることは認める。しかし、彼らの研究は利点がないわけではないが、やはり視野が狭く、世界言語としてのELFの意義に関する論争を終わらせるにはいたっていない。

い。ELFは結局英語と深く関わり英語のお陰で勢力を保っており、いわばそれなりに優れたところもあるにせよ、英語の一派ジョンに過ぎない。とらえどころがなく、実際に存在しているのか、少なくとも独立して存在しているのか、甚だ怪しいものである。

### 多言語主義—ヨーロッパの流儀

グローバル化社会の言語についてのヨーロッパ的意见は、多言語主義である。これはポストモダン世界の重要な特徴であり、ヨーロッパ諸国は少なくとも書類上は多言語主義に努力を注いでいると言われる。多言語主義はEU(欧州共同体)のスローガンでもある。一九九五年のEU教育・訓練白書では、一九九六年の目標の一つとして、三つのヨーロッパ言語を使えるようになることを掲げている。

「一九九五年三月三十一日の教育閣僚会議の決議に伴い、EU内の各人は、母国語に加えて少なくとも域内の二言語の能力を獲得し、維持することを求められる。」

(“Towards the Learning Society” 47)

この政策を成功させるためにEUは各国に次のような方策をとることを勧めている。たとえば、域内言語を教えるための財政援助、域内言語を教える学校への「ヨーロッパ品質保証ラベル」の授与、域内言語の早期教育など。これをさらに支持するのがEU委員会資料「言語習得と言語的多様性の推進：2004-2006 行動計画」(二〇〇三年七月二四日)である。そこには「共通語

(lingua franca)を一つ習得するだけでは十分ではない……英語だけでは十分ではない……非英語使用国での英語による教育という最近の流れはその国の国語の正統性に対して予測もできなかった影響を与えるかもしれない」(Comision 4-8)とある。

### 英語：同輩中の第一人者 (Primus inter pares)

しかしながら、これは絵に描いた餅のようなもので、フランス人、ドイツ人、スペイン人をはじめとする多くのヨーロッパ人はこの多言語主義には懐疑的である。ここには根本的な逆説がある。EU内でも、原則は「言語的多様性と参加国の言語間の平等性」であっても、結局英語がその存在感を増しているのである。(Phillipson 4) 英語が、今ヨーロッパ内で果たしている多くの役割から切り離されるなどと誤って信じる人は誰もいない。EU内部の活動においては英語が主導権を握っている。例えば、EU文書の草稿の三分の二は英語で書かれ、新たなEU加盟国との最近の交渉では討議も交渉も英語で行われた。フィンドの首相は、個人的には多言語主義者であるにもかかわらず、常にEU内の会議では唯一の伝達手段として英語を用いることを強制されていると感じてきたという。例えば次のような反応がある。「多言語主義を持ち上げる熱い宣言に騙される人間なんていない。それは英語拡張の隠れ蓑にすぎない」(Chaudenson 297)「EU内の……言語の数が増えれば増えるほど……英語が増え

る」(De Swaan 174)「ひとつのヨーロッパ」というモットーが英語だけで書かれているという状況は再考を要する：本来スペイン語こそその位置にあるべきなのだ(二〇〇二年コペンハーゲンでのEU首脳会議での横断幕が英語だけで書かれていたことにスペイン外務大臣アナ・パラシオが反発して、二〇〇二年十二月十六日新聞「エル・パイス」に)

### 英米のグローバル化観

世界銀行その他英米人が支配している機関において英米人が英語の強化に直接、間接に責任があることは多くの観察者、分析者の目にあきらかである。この政策は常に明言されてきた。「我らの国家は世界のモデルとなるべく神に選ばれ、歴史に任されているのだ」(Bush)「アメリカ流の価値観は普遍的なので、アメリカが利益を追求すれば、世界の他の国々は最も潤うのだ」(Condoleezza Rice, 二〇〇〇年六月十四日、デンマークの新聞『インフォメーション』に語って)「アメリカが世界を支配するという計画…それはアメリカが有力になるべきだとか、最有力になるべきだ、ということではなく、アメリカが絶対的、有力国になるべきだ、という意味である。」(Armstrong)「グローバル化は相互依存を、相互依存は共通の価値体系の必要性を生む。…何世紀にもわたって、英国の運命は他国を導くことであった。しかし我が国の歴史の一部であるものを運命と呼んではならない。それは我々の未来の一部であるべきな

のだ。我々は国々の指導者以外の何者でもない」(T. Blair 1997 選挙演説)

これらが、英米の政策なのであり、英米の政治家たちからみたグローバル化なのである。そこでは英語を通じた「言語的統一」こそが望ましい理想なのだ。(Cameron 2002, p.86)

### 英語：帝国の唯一の言語

キッシンジャー外交政策研究所長のデイヴィッド・ロスコフは次のようにのべている。「もし世界が共通言語の方向へ進むのであれば、その言語が確実に英語であるようにすること、もし世界が共通の遠距離通信、安全、そして品質基準の方向へ進むのであれば、それらはアメリカ製であるようにすること、もし共通の価値観が育つのであれば、それらはアメリカ人にとって心地よいものであるようにすること、これらはアメリカの経済的、政治的利益に叶うのである。これらははかない夢などではない。英語が世界を結びつけるのだ」(Rothkopf 45)

我々はこの多言語主義から、英語が新しい地位をまとう新しい形の帝国にやってきたのである。英語はヨーロッパの多くの学者・政治家たちから、言語帝国主義の兆候だと見なされている。

### なぜ中国語？

先ほど私は、中国語が英語の世界支配にストップをかける大きな脅威だと述べた。

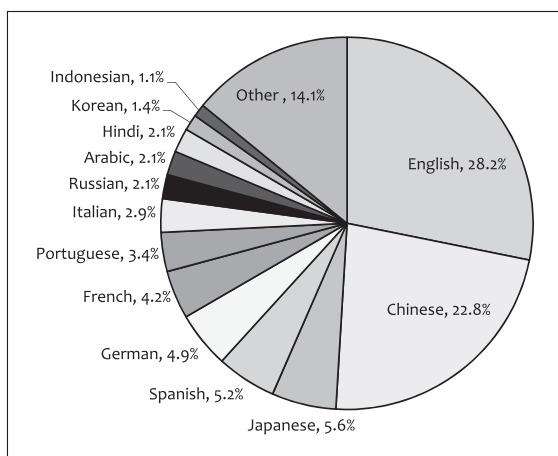


Fig 2 2010年における言語別の国内総生産 世界内割合

ここで立ちどまってその脅威を精査し、なぜアラビア語、スペイン語でなく中国語が英語への挑戦者足りうるのかを考えてみよう。言語の拡散に関係する二大要素は、人口分布と経済発展である。前者について言えば、中南米、カリブ海およびアフリカに中国企業が進出して来たことが、大きな政治的、経済的、言語的影響力を持っている。後者の経済発展について言えば、輸出額は二〇一〇年に中国はアメリカとドイツに追いつき、世界最大の輸出国となり、その地位をしばらくは保つと予測されている。(OECD 20) 情報通信技術製品の輸出額で中国は二〇〇三年に一四九〇億ドルを上げて日本とEUを抜き、二〇〇四年には一八〇〇億ドルを上げてアメリカをも抜いて世界最大の輸出国となった。(Chiang) デイヴィスによれば、二〇一〇年における言語ごとの国内総生産GDPの世界内の割合で

は、中国語(二二・八%)は英語(二八・二%)について二位にランクしている。(Davis) (Fig. 2) 中国経済は急速に伸長し、二〇五〇年には世界のトップ一〇経済体の頂点に立つだろうと言われる。(Goldman Sachs) 業務処理の外注(BPO)の請負という点では、中国はインドについて二位であり、年一五%の勢いで増え続け、首位に立つのも時間の問題であろう。このような中国経済発展の理由として、(1) 国内市場の強さ、(2) 教育インフラの改善、(3) 熟練労働者の低賃金労働、(4) 包括的情報技術インフラ、(5) 業務処理外注請負の成長のための政府の強力なサポート、などが挙げられる。(Raghuve) 経済にとっての必要条件である都市化に関しても、中国は世界で最も都市化進行率が高く、ここ一〇年間に都市部へ転居する人は三億人になると予想されている。(Graddol 10) このような経済の活況と財政的繁栄が世界の主要な経済・政治権力としての中国の地位を強めていることは間違いない。このように概観したところでは、予測される将来、中国語が共通語(lingua franca)となつて英語と競い合うようになると結論できそうである。このような予言／仮説はどこまで当たるであろうか？

### 中国語の未来は？

将来、中国語が共通語(lingua franca)として英語と覇を競い合う可能性を秘めていることは多くの指標が示している。しかし私は懐疑的である。というのは、そのよ

うな地位を獲得しようとすれば、その前に莫大な財政投資が必要だが、中国が現在、そして近未来においてそのような投資ができるとは考えられないからである。もう一つには、中国語の表記はあまりに複雑である。まったく興味深いことに、中国人自身までもが英語を、中国の国際化とグローバル化の便利なツールだと見なし、「英語は多くの中国人によって、ビジネスや教育といった社会活動の分野において中国語と同等かむしろより高い位置に置かれ始めている」という。(Pan and Block 400) 政府レベルにおいても、政策立案者は外国語学習とくに英語学習を推進する重要な政策を打ち出している。中国は現在のところ、世界最大の中国語学習者人口―中等教育までの英語学習者は二億人超、高等教育では一三〇〇万人―を誇っている。こういった状況を考えると、現在の英語が享受している地位を中国語が脅かす可能性に私は大きな疑念を持たざるを得ないのである。

とはいえ、これらはすべて予言にすぎず、予言は科学ではない。誰が水晶玉を見るかによって、解釈はさまざまになる。

### 結論

グローバル化が推進する価値観、倫理、政策が英米流のものであり、言語ツールとしての英語が国際的な機関と手を取りあつて、グローバル化を進行させる手段となっていることは疑いを容れない。英語はアメリカの通貨ドルと同様、我々が自身のコミュニティ以外で活躍しようとすれば必ず

獲得しなければならぬツールである。どの国家にも世界における主要な地位と権力を求める権利があるのだから、英米にも十分その権利はあるのだ。しかし容認できないのは、人々が母国語を使用しようとするときにその口をふさぐことである。「あちらか、こちらか」という問題設定ではなく、それは我々の「未来」の本質である。次の絵によって、英米流の言語的(不)寛容の姿を示すことで本論を終わりたい。(Fig. 3)



Fig 3 「英語を話すか、出て行くかだ！」

本稿は二〇一二年十一月二十九日、京都大学大学院人間・環境学研究科第四一回国際交流セミナーにおける発表「グローバル化と多言語主義の死―私の言葉はどうなるの？もう要らないの？」に加筆・修正を施したものである。

### 文献

- Armstrong, David. "Dick Cheney's Song of America: Drafting a Plan for Global Dominance." *Harper's Magazine*. Oct. 2002: 76-84.
- Bhatia, Aditi. "Comment 1." R. Phillipson, ed. *Linguistic Imperialism Continued*. London:

(2) アメリカを象徴するアインクルサムが呼びかけるデザインは一九一七年の米軍への募兵ポスターのパロディである。英語を話さない移民やマイノリティに対する反感を表明するポスターやTシャツのデザインとして用いられている。



- Routledge, 2010. 177-178.
- Blair, Tony. "A Battle for Global Values." *Foreign Affairs* Jan/Feb 2007.
- Block, David and Deborah Cameron, eds. *Globalization and Language Teaching*. London: Routledge, 2002.
- Bush, George. "Remarks at the Simon Wiesenthal Center in Los Angeles March 6, 2000." Gerhard Peters and John T. Woolley. *The American Presidency Project*. Web.
- Byram, Michael. *The Council of Europe and Language Education Policy*. A formal lecture given at the Department of English, University of Mostaganem (Algeria 2012).
- Chaudenson, Robert. "Geolinguistics, Geopolitics, Geostrategy: The Case of French." Maurais, J. and M.A. Morris. *Languages in a Globalizing World*. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 291-97.
- Chiang, John C. "The Open and Close of China ICT Industry Policies." *OECD Global Forum on Trade, Innovation and Growth*. Oct. 15-16, 2007. Web.
- Commission of the European Communities. *Promoting Language Learning and Linguistic Diversity: An Action Plan 2004-2006*. COM 449 (2003). Web.
- Crystal, David. *English as a Global Language*. 2nd Ed. Cambridge: Cambridge: UP, 2003.
- Davis, Mark. "Unicode Technical Note #13: GDP by Language." *Unicode Technical Notes*. 22 Jan. 2003. Web.
- De Swaan, Abram. *Words of the World: The Global Language System*. Cambridge: Polity, 2001.
- Fishman, Joshua et al, eds. *Post-Imperial English: Status Change in Former British and American Colonies, 1940-1990*. Berlin: Mouton de Gruyter, 1996.
- Goldman Sachs "Global Economics, Commodities and Strategy Research." "The World in 2050: 2003 Perspective." *Global Economics Paper*. Dec. 2009. 192.
- Graddol, David. *English Next: Why Global English May Mean the End of English as a Foreign Language*. Plymouth: British Council, 2006.
- Gray, John. *The Construction of English: Culture, Consumerism and Promotion in the ELT Global Coursebook*. Palgrave: London, 2010.
- House, Julianne. "English as a Lingua Franca: A Threat to Multilingualism?" *Journal of Sociolinguistics* 7. 4 (2003) : 556-578.
- Jenkins, Jennifer. "Points of View and Blind Spots: ELF and SLA." *International Journal of Applied Linguistics* 16.2 (2006) : 137-162. Web.
- Larsson, Tomas. *The Race to the Top: The Real Story of Globalization*. Washington, D.C.: Cato Institute, 2001.
- Mauranen, Anna. "The Corpus of English as a Lingua Franca in Academic Settings." *TESOL Quarterly* 37.3 (2003) : 513-27.
- OECD. *Active with the People's Republic of China*. nd. Web.
- Pan, Lin and David Block. "English as 'a Global Language' in China: An Investigation into Learners' and Teachers' Language Beliefs." *Science Direct*. Elsevier System 39. (2011) : 391-402.
- Phillipson, Robert. "Disciplines of English and Disciplining by English." *Asian EFL Journal*. 11.4 December 2009 Web.
- Pope, Rob. *English Studies : An Introduction to Language, Literature and Culture*. London. Routledge, 2002.
- RiteSite Team. "5 Reasons China Will Dominate Business Processing Outsourcing." *RiteSite.Asia*. 8 Feb. 2010. Web.
- Rothkopf, David. "In Praise of Cultural Imperialism?" *Foreign Policy* 107, Summer (1997) : 38-53.
- Seidlhofer, Barbara. "A Concept of International English and Related Issues: From 'Real English' to 'Realistic English'?" Council of Europe Conference Paper. Strasbourg, 2002.
- . "Research Perspectives on Teaching English as a Lingua Franca." *Annual Review of Applied Linguistics* 24 (2004) : 209-39.
- Teaching and Learning : Towards the Learning Society*. White Paper on Education and Training. 1995. COM 95.590. Web.
- Waters, Malcolm. *Globalization*. London: Routledge, 2001.

# 掛け合い歌を書き起こす

—中国貴州省の「山歌」

梶丸 岳

GAKU KAJIMARU



二〇一〇年三月のある日、中国貴州省羅甸県のあるお宅。新しい三階建ての一室で私はYさんとビデオカメラを再生していた。流れる映像はその数日前にこの家で撮影した「山歌」とくに歌での使用言語にちなんで「プイ歌」と呼ばれる掛け合い歌である。

貴州省は中国の西南部に位置する内陸の省である（地図1）。中国内陸部は沿岸部の上海や広州などに比べて著しく経済発展が遅れているが、この省はそのなかでも屈指の貧困地域である。ウイグルやチベット



地図1 貴州省の位置

のような激しい民族紛争があるわけでもなく、経済的魅力にもとほしく、日本での知名度はかなり低い。観光に来る日本人もとても少ない。

だが、この省は気候もよく、なにより雲南省に次ぐ多様な少数民族文化が花開く地域である。なかでも私が調査対象としているプイ族はここに古くから暮らす先住民族であり、日本でこそ無名だが、人口二九〇万人以上という、かなり大きな民族でもある。

この地域は古来より「歌海」などと呼ばれ、ここに住む民族は伝統的に大変な歌好きであるとされている。なかでも、一定の旋律にその場で歌詞をつけて掛け合う掛け合い歌（「歌垣」や「歌掛け」ともいう）はさまざまな場面で歌われてきた。私は二〇〇四年から二〇一〇年にかけて、この歌の掛け合いを追いかけてきた。

## 掛け合い歌「山歌」の現状

「山歌」はもともと「民謡」に近い意味の言葉だが、ここ貴州省ではおもにプイ族や漢族などが歌う歌を指す。近年は単なる合唱で歌われることもあるが、元々そのほとんどは掛け合いで歌われていた。

もろもろの資料によれば、山歌は相当古くから歌われていたらしい。文化大革命時

梶丸 岳（かじまる かく）  
一九八〇年兵庫西宮市生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員（国立民族学博物館）。専門は人類学。主な論文に「中国貴州省プイ族の「年歌」—プイ語による長詩型歌掛け」（『アジア民族文化研究』一〇・一一四〇・二〇一一年）、歌掛けを見る／聞く—前観光的芸能としての中国貴州省山歌」（『人文学報』九九・六一七七、二〇一〇年）など。

代には山歌をふくむ少数民族文化はすべて「封建的である」として弾圧が加えられたが、その後一九八〇年代には復活した。しかし一九九〇年代になると、急速な経済発展と社会環境の変化により衰退の一途をたどった。二〇〇〇年代に入ると政府が少数民族文化を無形文化遺産として振興するようになり、政府が掛け合いの場を設けるなどした結果、山歌が再びよく歌われるようになってきた。

私が調査している山歌は中国語で歌われる「漢歌」と、プイ族独自の言語であるプイ語で歌われる「プイ歌」がある。漢歌は中国語で歌詞を書けばよいので比較的歌詞の記録は簡単で、すでにいくつも歌詞集が出版されている。だがプイ語は一九九五年に正式採用されたアルファベットによる正書法などはあるものの、一般に広まっている文字はない。そのため、プイ歌の歌詞の記録、とりわけ実際の歌われ方を記録した資料はほとんどない。

これは歌を研究するうえで大問題だ。私たちが普通に考える「歌」と掛け合い歌は、相手の歌を聞いてその場で歌詞を考えてそれに返さなくてはいけないという点で決定的に異なる。ほとんどの場合、同じ旋律に歌詞だけをどんどん入れ替えて歌っていくため、歌詞がわからないとなに行われて

(1) 中国では「民族」が行政的に定められており、すべての国民は（実際には族かはともかく）政府に認められたならから民族に属している。そして漢族以外の民族は「少数民族民族」と規定されている。よって少しばかり人口が多くても「少数民族」となる。ちなみに最大の少数民族はチワン族で、総人口は一六〇〇万人以上いる。中国本土に十二億人いる漢族に比べれば確かに「少数」である。

(2) 中国では中国語が圧倒的な影響力を持っており、少数民族の言語は程度の差はあれ衰退していつている。プイ族でも地域差はかなりあるが、全体として年を追ってプイ語の話せる人は減っている。

(3) こうしたプイ歌の分析が私の博士論文の重要な一部分になった。書き起こし資料と分析、さらにビデオ資料を含めた本を二〇一三年三月に京都大学学術出版会から出版する予定になっている。

いるのかさっぱりわからないのだ。

### 山歌を書き起こす

そんなわけで、プイ歌の正確な書き起こし資料を得るために、まずプイ歌をビデオカメラで収録することにした。最初は春節の時期に政府が主催する山歌のステージを収録して書き起こしたりしていたのだが、どうしても周りが騒々しかったりして、よく聞き取れない箇所がいくつも発生してしまった。そこで、それまでも書き起こしを手伝ってもらっていたYさんをお願いして、ご自宅に歌手を呼び、二日間にわたって朝の九時から夕方六時までプイ歌を収録することにした（写真1）。

この収録を終えた時点ですでにひと仕事終えたような気分になるが、重要なのはここからである。プイ語はイントネーションで語彙を区別する声調言語なので、歌ってしまうと発音が変わってしまつて、プイ語



写真1 Yさん宅での収録風景

のできる人でも、慣れていないとプイ歌は聞き取れない。そこで書き起こしではほかの人の協力を得つつ、中国語が堪能でプイ歌も聞き取れるYさんにひとふしひとふし歌詞を翻訳してもらった。しかしYさんの中国語はかなり貴州なまりが強く、時々聞き取れない。たとえば、書き起こし中に「プーチエープラーウ、サムムアン：これは「老人の心はタースーだ」という意味だ」「たーすー？」「タースー。こう、しっかりしていると、いか落ち着いているのか」「ああ、踏実、ね」「そう、踏実」といったやりとりが交わされることがままあった。

書き起こし作業では、少し聞いてはビデオを止め、歌詞をプイ語で繰り返してもらつてそれをパソコンに打ち込み、発音を確認し、全体を中国語に訳してもらい、私の知らない単語、わからない箇所をひとつひとつ教えてもらった。時には私とYさんの意見が食い違い、なにを歌っているのか議論になることもあった。なるべく間違いないように神経をすり減らす作業だ。こうしてなんとか、三日間朝から晩まで作業を続け、一時間分ほどを書き起こし終えることができた。掛け合い全体に比べればまだほんの始まりの部分に過ぎないが、掛け合いのやりかたを知るには十分だ。なにより、もうすでに帰国の日が迫ってきていた。作業はこれで終わりではない。帰国してから聞き漏らしや書き漏らしなどを、ふたたび録音聞きながらひとつひとつ直していく。あれほど神経をすり減らしたのに重大なミスが見つかつてとても落ち込むこと

もあるが、正確な資料を残すためにはやらないわけにいかない。そして、Yさんとのやりとりの録音や書き起こし中のメモ書きを参照しながら、中国語の翻訳をひとつひとつ日本語に訳していく。

### 書き起こした先にあるもの

こうして書き起こし、翻訳した資料を分析した結果、プイ歌が美辞麗句を連ねるよりも、ユーモアに重きを置いた表現を追求していること、必ず「あなたの歌を聞きました」「あなたはこの歌を聞きました」「私のかくかくしかじか歌います」「それでは私の歌はおしまいなので、よかつたら続きを歌ってください」という順番でひとつひとつの歌を構成して歌を掛け合っていることなどがわかった。これは、通常の会話では暗黙の了解とされていることをすべて明言しながらやりとりしている点でとても興味深い。

掛け合い歌はどこでも衰退しつつあり、精密な書き起こし資料を残すこと自体も文化遺産の記録として価値がある。だがそれだけではもったいない。掛け合い歌の根底にある「人間がやりとりする作法」の多様性と普遍性を明らかにすること。地味な書き起こしの先にあるのは、この遠い目標である。現在私はラオス北部の掛け合い歌を調査する計画を進めている。面倒な書き起こし作業には時に辟易させられるが、そこからどのような「作法」が見えるのか、今から楽しみである。



林 貴啓 著 評者・澤井 努 (京都大学人間・環境学研究科博士後期課程)

# 「問いとしてのスピリチュアリティ

——「宗教なき時代」に生死を語る——

京都大学出版会

二〇一一年六月 二六二頁

定価 三二〇〇円



どうして自分は生まれてきたのか。死んだらどこに行くのか。こうしたスピリチュアルな「問い」は、人生をとおして誰の関心事ともなりうる。

およそ死を目前にした人々は、否応なく生死の問題に向き合う。もとより、揺るぎない信仰、確固とした世界観をもつ人ばかりではない。スピリチュアルな「問い」に「答え」を見いだすことができない場合、「スピリチュアルベイン」という形で人を苦悩させる」のである。本書の著者、林貴啓氏は、子供の頃からスピリチュアルな「問い」を抱いていたという。ところが、自らの「問い」に対して「答え」を見いだすことはでき

なかった。そればかりか、学校や家庭などの場で、「問い」を共有することさえできなかった。その結果、「二重の疎外感に直面せざるを得なかった」という。

従来、生死の問題、実存的な問いに対して、宗教が「答え」を提供してきた。世界の多くの地域では今もなお、宗教がその役割を果たしている。ところが戦後、日本社会では、憲法や教育基本法の制約もあって、公教育の場で「宗教」は限定的にしか扱われてこなかった。また、「宗教離れ」が進んだと言われる今日の社会では、家庭の場で「宗教」が語られることもほとんどない。

一方、スピリチュアリティに関わる事

象は衰えるところを知らない。セラピー文化から大衆文化にいたるまで、現代日本のスピリチュアリティ文化の興隆は広く知られるところである。そこに人々の精神的ニーズを読み取ることもできよう。もとより、「人の健康や幸福は、この次元「スピリチュアルな次元」を抜きにして考えられない」というのが著者の根本的な主張である。現在、終末期医療では、スピリチュアルベインを抱える人々に対して、スピリチュアルケアが切実に求められている。ところが、本来、誰もが関心を示しうるスピリチュアルな問いに対して、常日頃から真摯に向き合っていく必要があるのではないかと、著者は提唱するのである。

以下、本書の内容に注目しながら、その特徴を概観したい。本書は三部構成、十章から成る。まず、著者のスピリチュアリティ研究において要となる、スピリチュアリティを「問い／答え」の位相に区別する視座が詳述される。つまり、縦軸を「問い」がスピリチュアルか否か、横軸を「答え」がスピリチュアルか否かとして座標を描いた場合、スピリチュアリティをめぐる四つの象限が浮かび上がる。この視座によって、さまざまなスピリチュアルな事象において、「問い」がスピリチュアルなのか、「答え」がスピリチュアルなのかを、それぞれの側面にしたがって見極め、分類することができ。著者の言葉を援用すれば、「生死の危機に直面しての実存的なスピリチュアルベインや、真の自己をめぐる求道的ともいえる探求と、単なる非日常的な刺激や現世的関心、娯楽的な興味のもとで追い求められる（スピリチュアル）とを字面上的の類似性だけから結びつけるような論調」に対して、「両者の違いを見きわ

め、何が批判の対象となっているのかを明確にする」うえで有効となる。

以上の「問い／答え」の構図をとおして本書では、さまざまな形で見られるスピリチュアリティの事象、「スピリチュアリティ」概念の定義が極めて分かりやすく整理される。さらに、スピリチュアリティ言説の源流を「広義の宗教」論、V・E・フランクルの「意味への意志」の中に見いだすことによって、スピリチュアリティの意義が丁寧に説明される。こうしたスピリチュアリティに関する理論的な考察を踏まえて、「問い」のスピリチュアリティの観点からスピリチュアル教育やスピリチュアルケアなど、いわばスピリチュアリティの現場における展望が開かれる。

よく知られているように、フランクルはナチスドイツによって強制収容所に送られ、絶望的な状況を生き抜いた数少ない生き証人の一人でもある。収容所における凄惨な状況の中にあつて彼は、「どんな時にも人生には意味がある」という「意味への意志」を抱き、尊厳を見失わずに生き延びた。戦後、心理臨床家として活躍したフランクルによれば、彼のもとを訪れたクライアントの多くが物質的に豊かであるにも拘らず、人生の意味を見いだすことができず、「実存的空虚」の状態に陥っていたという。こうした精神状況は、現代日本社会にも当てはまる。その意味で、著者が一貫して主張しているように、スピリチュアリティを「問い」の次元として捉える営みは、個人のみならず社会を見つめ直す契機となるであろう。スピリチュアルな問いは誰にとつての関心事ともなりうるだけに、スピリチュアリティの研究者だけでなく、広く一般読者にも、本書をお勧めしたい。

金子守恵 著 評者・森下 翔 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)

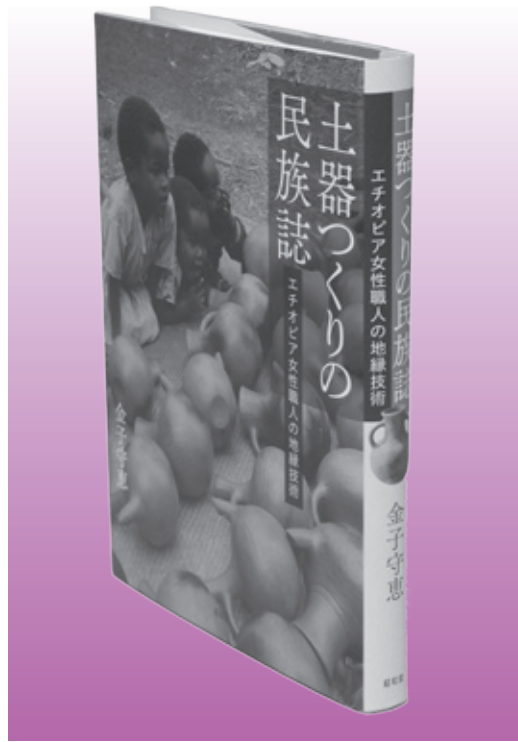
## 「土器づくりの民族誌」

——エチオピア女性職人の地縁技術——

昭和堂

二〇一一年四月 三一六頁

定価 五三〇〇円



本書はエチオピア高原南端における「アリ」と呼ばれる人々の、土器をめぐる生活を記述している。タイトルこそ「土器づくりの民族誌」であるが、内容は土器の作り方についての単なる技法の記述に留まるものではない。各章のタイトル——「土器をつくる身体と生活のなかにいきる土器」「つかう」「つくる」「知る」「かわる」「うる、創る」「地縁技術としての土器づくり」——を眺めてみても、土器づくりをめぐるアリの生活形式のおよそあらゆる側面が検討に付されていることが分かるだろう。著者が目指すのは、「人間の社会的な行為として土器づくりをとらえる」ことを通じて、「人と素材

との関係や土器を介した人と人との関係を双方向のかつ包括的にとらえる」ことなのである。各章の内容は以下のようなものである。第一章では先行研究の紹介と調査地の概要が示される。人類学における身体技法の技術的側面に関する研究は、進化論的な見方と相対主義的な見方のはざまにあって十分には進展してこなかったという。著者は技術を社会的産物とみなすフランスの文化技術学の潮流に着想を得つつ、土器づくりの実践・習得・変化・創造について検討すると宣言する。第二章では、アリの人びとの土器の利用形態が、使用個数、分類・識別法、用途などの実証的

分析を通じて示される。第三章では、材料の採取・成形・焼成という土器生成の一連の過程を紹介し、二十人の職人による土器の成形過程を詳細に比較する。第四章では身体性・物質性・空間性といった非言語的要素に着目しつつ、土器成形技法の獲得・継承過程について描く。第五章では婚姻・移動に関わる土器のづくりの個人史について描写することを通じて、著者が「テクノ・ライフヒストリー」と呼ぶアプローチの有効性について提起する。第六章では「生業としての土器づくり」に焦点が当てられ、土器づくりをめぐる社会関係が、土器の「態」という独自の観点から考察される。第七章では「地縁技術」という概念を用いてそれまでの記述が総括される。

中でも評者の興味を惹いたのは、第四章の土器成形の継承過程である。私たちのものづくりや技術は、模型づくりから大工仕事に至るまで、設計図やマニュアルに沿って行われる。そこには何かしらの「正しいやり方」や「正しい作り方」があり、ものを作るというのはその方法を学ぶことだと考えがちだ。評者が調査対象とする自然科学の領域では、こうした理解はときに全く正しい。学生が測定機器を用いた測定の方法を学ぶときには、「正しい測定の方法」がマニュアル化されて教えられ、間違った測定方法を行えば教官から厳しく正される。

しかし、アリの土器づくりはこのような仕方では習得されない。職人たちはそもそも、誰にでも真似できる「正しい土器のつくり方」などというものが存在するとは考えていないのだ。たしかに娘は母と共に土器をつくりながらそのつくり方を学べけれども、母から逐一土器の作業工程について「教わる」わけではない。

また母も娘の土器の作り方が自分と異なるからといって、作り方を直すよう命じるわけでもない。母と娘では「アーニ(手)がちがう」のだから、娘と自分の土器の作り方は異なっていて当たり前だと彼らは考える。土器づくりの技術は、素材を相手として試行錯誤を繰返すという、自らの身体と素材との「対話」の中で培われる。

文化人類学者のレヴィ・ストロースは、素材に意味を見出しながら組み立て、新たな構造を生成する行為を「ブリコラージュ(器用仕事)」と名付けた。本書における土器職人と素材の「対話」は、モノに窺われた意味や構造が言語という顕示的な次元ではなく、身体と対象との相互行為という暗黙的な次元において生み出される可能性を示唆しているといえる。ひとつ惜しまれることがあるとすれば、そのような土器そのものに埋め込まれたきわめて微視的な差異が、人間同士の関係に具体的にどのような形で影響するのか(著者の言葉で言えば、「アーニ」はなぜ違うのか)が、明白には示されていないように思われることである。

とはいえこうした批判は、精細な記述に満ちた本書の価値を些かも傷つけることはないだろう。本書の何よりの魅力は、人間の生活形式を窮屈な型に嵌めようとするあらゆる決定論を退け、土器をめぐるアリの人びとの実践の動態をありのままに描き出していることにある。人間の実践の細部は常に統一的な理論へと回収されることを拒否しており、またその細部にこそ人間の一回的で偶然的な生を彩るさまざまな意味が宿っている。よい民族誌はいつも我々にそのことを思い起こさせてくれるのであるが、本書もまたそういう民族誌のひとつと言えるよう。

岡田敬司 著 評者・藤田雄飛（九州大学大学院人間環境学研究院准教授）

## 「自律者の育成は可能か」

## 「世界の立ち上がり」の理論

ミネルヴァ書房

二〇一一年七月 二四四頁

定価 二八〇〇円



カントがその構図を明確化して以来、自律をめぐるアポリアは長らく教育学を呪縛し続けてきた。子どもの自律をめざした他律的な働きかけが当の自律をどこまでも妨げてしまうというこの論理的な難問は、教育という子どもへの他律的な働きかけから目を反らすことの出来ない教育学にとっては、喉もとに突きつけられた刃であり続けてきたに違いない。しかしながら、今日の教育学の学問的動向に鑑みるに、このアポリアはいつの間にか「アポリアである」という認識さえ持てばそれ以上は問う必要のないものへと希釈され、棚上げされてしまっているかのようだ。この延長上では、自律をめぐる問いそのものが忘れ去られてしまう地平が待ち構えているような雰囲気さえ漂ってくる。

しかし、それでもなお、自律は教育学にとって欠くべからざる問いであると本書『自律者の育成は可能か』の著者岡田敬司は考えている。それを端的に示すかのように、岡田は本書に先立つ『「自律」の復権』の冒頭ですでに次のように宣言していた。「教育に限らず、昨今の人間科学ではいわゆる「他者」や「他者性」を語るのが流行であり、人間の自律性を語らうなどという人は間違いない時代錯誤者に見られる。にもかかわらずそれを試みようというのは、流行に逆らいたいという私の生来のへそ曲がりもあるが、何よりも私が本気で、教育で自律性を育むことの重要さを信じているからである。」一連の「かかわりの教育学」の著作に続く、岡田の「自律」シリーズ（こう呼んで良ければの話だが）がここに幕

を開けることになった。本書はその3作目に位置づけられている。

さて、この「自律者の育成は可能か」の眼目は何よりも、自律と世界との関係性への注目にある。すなわち、ある判断によって自律的に行為するといふとき、「この判断が成立するためには出会った出来事、出くわした状況の意味を知ることが不可欠であり、そのためにはその出来事や状況をその中に位置づける全体性としての（関連）世界が立ち上がっていることが必要」だとされる。ここで岡田の指す「（関連）世界」とは、主体によって構成されるような対象ではなく、主体をそのうちに巻き込んで立ち上がってくる座標系である点は強調されなければならない。それは、こう言ってよければ、知覚や経験などを通した主体と実在の世界との絡まり合いのうちで、自ずと立ち上がってくる意味の体系だと言える。そして、ひとたびこの座標系としての「（関連）世界」が立ち上がれば、出来事や行為の意味がその世界の位置値として理解されるようになることも、そうした意味に到達する行為や行動を自らの判断や身体知に基づいて執り行うことが可能になるのである。こうした主体の状況こそが自律と呼ばれる。

このように、岡田の「自律」概念は、理性や意志の自由による根拠を置いてきた従来の「自律」論と「自律するとは、自分の判断によって自分の行為を決定することである」という姿勢を共有しながらも、そうした判断を支える「（関連）世界」との関係性を重視するなかで、身体知や行為知をも自律の地平へと組み込んでいく広がりを持つ。ここには、自律を可能にするものを意志の問題へと切り結めることなく、人間の複合的な実践によって取り結ばれる世界との関係へとその位相を拡大していく岡田のスタンスが伺える。

またこのことは、教育の対象を、個人の意志に局限してしまうのではなく、各人が世界と取り結ぶ関係性の意味体系へとスラしていくこともある。教育とは、「当人における世界の立ち上がりを促進

すること」であり、その延長上で、各人の「（関連）世界」の座標系におけるグリッド線や配置を、共同体によって支えられたものへと時に少しずつ、しかし時に劇的に組み替えていく有意・無意の営為として再定義されることになるだろう。

ところで、この「（関連）世界」が立ち上がるのはどのようにしてなのだろうか？ 最後にこの素朴な疑問について考えてみたい。岡田はここで、図らずも2つの解を用意しているように思われるからである。

そもそも、「（関連）世界」の成立については、要素的知識断片が蓄積され、ある一定の閾値を超えると、それがカテゴリー化され圧縮されるという仮説を岡田は採用してきた。「世界は自動詞的に立ち上がる」という、ある意味で自然法則的な立ち上がりである。しかしながら、岡田も吟味している、母と子の関係性へと目を向けていくなら、そこには母の乳房と子どもの口が充実したネットワークをなして閉じることでできている「萌芽的な世界」を見出しうるように思われる。これはおそらく、断片も無ければ、圧縮なども生じていない世界である。この母型から発展して、世界は細胞分裂的に座標系を立ち上げていくという図式を岡田の議論から引き出すことが出来るのである限り、要素の蓄積が座標系となるということと、プリミティブな癒合性が座標系の母型をなすということとの関係が問われなければならないだろう。あるいはこれは、読者あるいは評者である私に岡田から出された問いであるようにも思われる。

本書は教育学の書であることを銘打ちながらも、カントやピアジェ、フッサールやメルロ＝ポンティの思想だけでなく、免疫学や外国語学習、さらには自閉症者の世界経験などへと縦横無尽に踏み出していく。この人間諸科学を飛び交うスタイルこそ、この著者の一貫した魅力である。ディシプリンに閉じ籠もろうとする教育学に何かしらの息苦しさを感じている方々にこそ、本書をお薦めしたい。



大倉得史Ⅱ著

評者・浜田寿美男（奈良女子大学名誉教授）

## 「育てる者への発達心理学―関係発達論入門」

ナカニシヤ出版

二〇一一年十月 三二頁

定価 二九四〇円



この本は、鯨岡峻氏が発達心理学の世界で長年にわたって独自に切り拓いてきた「関係発達論」を、氏の教えの下で育った大倉得史氏がいわば「祖述」し、その理論形成の基になった発達諸理論を合わせ解説したものである。鯨岡氏がこれまで公刊してきた著作群は、具体的な子育て場面に密着して精細な記述を重ね、そこに通底する基本的な流れを現象学の言葉を用いて論じたものとして、保育関係の現場の人たちをはじめ多くの発達関係者から熱く受け容れられてきたが、一方で一般の読者には少し難しいとの評判もあった。その意味で大倉氏の今回の仕事は鯨岡理論への格好の入門書であり、

同時に氏自身のこれからの理論展開への礎の確認でもあるように思われる。

鯨岡氏は子どもの発達を養育者との関係の現象として捉え、子として「育てられる者」がその育てられることを通してやがては自らが子を生み「育てる者」になつていくその流れを、関係の発達の展開として論じてきた。「育てられる者」は「育てる者」と言わば「対」をなしてその関係を展開し、世代から世代へと生の流れが引き継がれていく。世代がそうして循環していく過程は、人類がまだサルだった時代から連綿と繰り返されてきたはずのものである。ところが、これまでの発達心理学は、ほんらい「対」をな

すこの関係から子どもだけを単体として取り出して、個体としての能力の発達を追うという個体能力論のパラダイムに長く囚われてきた。鯨岡氏の仕事は関係の現象を単に「個」の組み合わせとしてではなく、文字通りに「関係」として取り上げ、現実には繰り返される具体的な子育てのエピソードを分厚く記述し、メルロ・ポンティの現象学をもとに「間主観性」「両義性」「相互主体性」の概念を用いて、その関係発達のかたちを理論化してきた。

人はみな、子どももおとなも「人とつながろうとしている」と同時に「自分自身であらうとしている」。この根源的な「両義性」を軸にして、当初はほとんど癒合的につながっていた「間主観性」がやがてはたがいの主体性を根っこにおいて「相互主体性」に展開していく。この弁証法的とも言うべき流れをまさに具体的なエピソードに沿って理論化した鯨岡氏の力業は、氏を恩師とする大倉氏によって、本書のなかで見事に引き継がれている。「育てられる者」が育てられることを通して「育てる者」になるといふ鯨岡氏の議論を借りて言えば、「教えられる者」が教えられることを通して「教える者」になるといふ引き継ぎを、大倉氏はここでなし終えたとも言える。

ただ、子どもの発達を「育てる者」と「育てられる者」の関係の展開として捉えようとする関係発達論の枠組が、子どもの発達全体のどこまでおおうもののかについては検討を要する。一つ気になるのは、関係発達論が近代において典型となった核家族的な関係を前提にしている点である。近代以前においては子が親になるといふ世代交代以前のところで、まだ「育てられる者」の位置

にいる子が、自分より少しだけ遅れてこの世に生まれたきょうだいを守り、「育てる者」の立場にも立つことが少なくなかった。実際、評者自身の子ども時代（一九五〇年代）にはこの日本でもまだ小さな子どもが背中に赤ん坊をおんぶして子守りしている姿はけっして珍しくなかった。第一次産業が生業の中心だった時代には、子守りというかたちで子どもが子どもを守り育てる一環を担うことはむしろ常態であり、子どもたちの世界にすでに子育ての文化が根づいていたと言つてよい。そうしてみれば時代、文化を越えて、この関係発達論がどこまであてはまるのが問題となる。

もう一つ気になるのは、人の生活がけっして人と人との関係で終わらないということである。たしかに子どもの育ちにとって「育てる者」との関係は重要だが、一方で子どもは生身の自然として自らの身体を抱え、「個」としてさまざまに成形され、さまざまに壊れうる可能性を持つていて、この「個」のレベルの現象も無視しない。また、人どうしの生身の関係を越えたレベルで、子どもたちはさまざまのモノ（自然）との関係を生き、あるいは自分では左右できない「状況」を強いられている。つまり人はみな、そしてもちろん子どもたちもまた、生身の関係を含みつつ「個・関係・状況」の全体を生きる。関係発達論がこの人の全体にどのように迫ることができるのか。この問題もまた無視できない。

しかし、考えてみれば、これらは問題としてあまりに大きく、いまや「育てる者」となり「教える者」となった大倉氏たちに引き継がれるべき課題なのかもしれない。

## 人環図書

— 本研究科教員・出身者の新著より —

## 複言語・複文化主義とは何か

— ヨーロッパの理・状況から日本における学習・文脈へ

細川英雄／西山教行編

くろしお出版 二〇一〇年十一月

ヨーロッパには欧州連合（EU）と異なる、もう一つの国際機関がある。それは一九四九年に設立された欧州評議会であり、民主主義と法治国家、人権の保護の推進などを目的としている。欧州評議会は言語教育を文化政策の一環に位置づけ、二〇〇一年に「ヨーロッパ言語教育参照枠」（CEFR）という外国語教育・学習の指針を発表し、新たな外国語教育の方向性を打ち出した。日本でCEFRはもっぱら英語教育や日本語教育のベンチマークとしてのみ受け取られているが、CEFRはそれにとどまるものではない。それはあらゆる言語教育に開かれ、個人の内部に複数の言語文化の共存を実現する複言語・複文化教育のツールなのである。この教育リソースによれば、言語教育・学習は技能の獲得にとどまるものではなく、自らを他者へ開き、相互理解や異なる他者に対する寛容を養うことなど実存経験をも目標とするのである。

本書は、このようなヨーロッパに生まれた言語教育思想がどのようにしてヨーロッパ以外の地に文脈化し、最適化するのか、その軌跡をたどり、新たな言語教育の可能性を探っている。西洋起源の言語教育が思想として日本の教育文化にどのように接続されるのか、本書は興味深い事例と考察を提示する。

「A5判 一九二頁」

二四〇〇円＋税

## オランダ語学への誘い

河崎 靖著

榊大学書林 二〇一二年八月

日本におけるオランダ語の研究の歴史は長い。「蘭学」として古くから日本人はオランダ語を通して西洋の学問一般を学んだのである。江戸時代に栄えた「蘭学」はいわば西欧への窓の役割を果たしたということになる。その端緒は当時の「ハルマ」や「訳鍵」といった蘭日辞書の編纂にあった。わずかに四〇〇〇坪の長崎の出島は日蘭貿易の拠点であったのみならず、日本にヨーロッパの思想や近代科学（医学など）が流入する唯一の窓でもあったのである。

本書は、オランダ語を柱にして、近隣のゲルマン系諸言語をも視野に収め、ヨーロッパという文脈の中でオランダ語のもつ特性を浮かび上がらせることを目標としている（第1章 文化誌的側面・第1節ゲルマン人とキリスト教、第2節ベルギーの言語境界線）。小さな国の小さな言語でありながら、中世初期から今日まで小さからざる役割を果たしてきたこの言語の辿つて来た通時的道筋を具体的なテキストを豊富に用いた実証的に解き明かす（第2章 言語史的側面・第1節フランク語とサクソン語、第2節中世オランダ語）。

本書は、オランダ語に興味があり、オランダの文化誌をその歴史的背景も含めて理解したいと思われる方々に向いていると言える。

「A5判 一二〇頁」

三二〇〇円＋税

## ワグナーと恋する聖女たち

— 中世伝説と現代演出の共演

奥田敏広著

榊松籟社 二〇一一年三月

近代芸術において、中世伝説の何が解体され、何が受け継がれ、そして何が付け加えられたのかという変容をテーマとして論じたのが本書である。それは、単なる継承でもなければ完全な解体でもなく、題名にもあるように、中世伝説と近代の「共演」に他ならない。そういうわけで本書は、タンホイザー伝説、ワルトブルク歌合戦の伝説、聖エリーザベト伝説、ジークフリート伝説、ハーメルンの笛吹き男の伝説などの実態を実証的に追跡し、ワグナーを中心に、フランツ・リスト、ゴットフリート・ケラー、ルートヴィヒ・ティエイク、ハインリヒ・ハイネ、クリスティアン・アンデルセンら、広く欧米近代芸術一般における、伝説の利用、ないし痕跡を追求している。

他方で本書は、ますます大胆かつ先鋭に「改作」と言えるほど斬新な実験を繰り返している現代のワグナー作品の諸演出を、伝説継承の対抗軸として議論の中心に置いている。戦後のヴァイラント・ワグナーに始まり、バイロイト音楽祭一〇〇周年を飾るパトリス・シエローを経て、カーセン、コンヴィチエニ、フリードリヒ、ヘルツ、ヴァイクル、クプファー、ラングホフ、カタリーナ・ワグナーらの現代演出が試みているのは、伝説の現代における意味を批判的に問うことだと考えるからである。

「四六判 三二〇頁」

三三〇〇円＋税

# 瓦 「かわらばん」 版

## ◆「人環」とは？

本雑誌の表題「人環フォーラム」の「人環」とは、平成三年四月に新たに開設された「京都大学大学院人間・環境学研究科」の略称です。

## ◆受賞

田部 勢津久（相関環境学専攻教授）

W. Turner 賞（二〇一二年六月）

萩生 翔大（共生人間学専攻修士課程）

第二二回日本バイオメカニクス学会奨励賞（基礎部門）（二〇一二年九月）

有元 志保（共生文明学専攻PD）

日本カレドニア学会学術奨励賞（二〇一二年九月）

岩木 真穂（相関環境学専攻修士課程）

日本陸水学会国際交流奨励賞（二〇一二年九月）

スミス マイケル ライオン（共生人間学専攻修士課程）

京都国際文化センターエッセイコンテスト最優秀賞（二〇一二年一月）

新谷 光 アルベルト（共生文明学専攻修士課程）

Global Voices from Japan フォラムプレゼンテスト渥美財団賞（二〇一二年二月）

水野 千依（共生人間学専攻PD）

第三四回サントリー学芸賞（二〇一二年二月）

久山 雄甫（共生人間学専攻修士後期課程）

第三回（平成二四年度）日本学術振興会 育志賞（二〇一三年三月）

瀬戸口 浩彰（相関環境学専攻教授）

第三四回沖縄研究奨励賞（二〇一三年一月）

玉置 紗芸（共生人間学専攻修士課程）

第二三回ヤンマー学生懸賞（特別優秀賞）（二〇一三年二月）

## ◆催し物のご報告

◇第二八回人間・環境学フォーラム「人環・総人 秋の交流会―隣は何をする人ぞ―」

●日時 二〇一二年十月二十五日（木）一八時一五分～二〇時

●会場 生協吉田食堂一階

●主催 人間・環境学フォーラム実施委員会



## ◇環on映画会第三四回

●日時 二〇二二年十月二十九日(月) 一八時

●上映映画 「バニシング・ポイント」(リチャード・C・サラフィアン監督一九七一年)

●案内人 宮本嘉久先生

●会場 人環・総人図書館 環on

## ◇第四〇回国際交流セミナー「足利義満と中世京都」

●日時 二〇二二年十一月五日(月) 一八時一五分～一九時三〇分(講演会) 一九時四〇分～二〇時四〇分(懇親会)

●講演 Matthew Stavros 先生(オーストラリア・シドニー大学准教授)

●場所 京都大学大学院 人間・環境学研究所棟 一〇五会議室

●主催 人間・環境学研究所国際交流委員会

## ◇第四一回国際交流セミナー

●演題 「グローバル化と多言語主義」

●日時 二〇二二年十一月二十九日(木)

●場所 一八時一五分～一九時三〇分(講演会) 一九時四〇分～二〇時四〇分(懇親会)

●場所 人環棟一〇五会議室

●講演者 Bel Abbes Neddar 先生

(アルジェリア民主人民共和国モスタガネム大学上級講師・本学客員准教授)

●主催 人間・環境学研究所国際交流委員会

## ◇環on映画会第三五回

●日時 二〇二二年十一月三〇日(金) 一七時三〇分

●上映映画 「アレクサンドリア」(アレハンドロ・アメナバル監督二〇〇九年)

●案内人 岡真理先生(現代アラブ文学)

●会場 人環・総人図書館 環on

●あらすじ・みどころ 四世紀のアレクサンドリア。女性哲学者ヒュパティアはなぜ、殺されなければならなかったのか。

その死を通してアメナバル監督が描くのは、この現代社会の病理に他ならない。

「アゴラ」という原題に監督が込めた思想とは何か？

## ◇環on映画会第三六回

●日時 二〇二二年十二月一九日(水) 一八時一五分

●上映映画 「意志の勝利」(レニ・リーフェンシュタール監督一九三五年)

●案内人 池田浩士先生(京都精華大学客員教授、京都大学名誉教授)

●会場 人環・総人図書館 環on

●テーマ人びとはなぜ、あんな政治屋に熱狂したのか？

——ナチズムと私たちのいま

●あらすじ・みどころ ヒトラー政権下のナチス・ドイツ、それは人類史上の汚点ともいえるべき残虐非道な国家社会だった・・・とされている。

だが、この映画に記録されたその時代の人びとの姿に、私たちは何を見るだろうか？  
当時の現場に立ち戻って、そこから私たちの現在の姿を見つめるとき、私たちはどんな姿で生きているのだろうか？

——戦後ドイツでは、現在に至るまで、この映画の上演は禁止されている。

# ◇新春アート大講演会「美意識の変容」

●日 時 平成二五年一月五日（土） 午後一時～五時三〇分（展示は六時三〇分）

●講 演 新宮一成「フロイトは何を見ていたのか」

鷲田清一「芸術におけるハ生（なま）Vなもの？」

建畠 哲「草間彌生の世界—オブセクションと救済—」

●作品展示協力 石橋義正、伊東宣明、井上明彦、岡田彩希子、奥村里菜、

倉知敬子、高橋 悟、南條沙歩、林 剛、前谷康太郎、前田葉月ほか

●会 場 大阪市中央公会堂

●主 催 京都大学大学院人間・環境学研究科 新宮研究室

精神医学的精神分析学プロジェクト

# ◇環 on 映画会第三七回

●日 時 二〇一三年一月三日（水） 一八時一五分

●上映映画 「今夜、列車は走る」（ニコラス・トゥオツツォ監督二〇〇四年）

●案内人 崎山 政毅先生（立命館大学文学部教授）

●会 場 人環・総人図書館 環 on

●テーマ「生きづらさ」の瀬戸際で、わたしたちはどうに絶望と希望をとらえることができるかを

感じ取ってみよう。

●あらすじ・みどころ ネオリベリズムによる圧迫の下におかれたアルゼンチンで、生きる道と意味を奪われた国営鉄道労働者とその家族が織りなす群像劇。

明日を望めない状況の只中におかれた人びとは、どのような生（そして死）を選ぶのか。

# 『人環フォーラム』三二号の訂正とお詫び

瓦版の「シンボジウム・美学VS.マンガ」第一部、講演二の武田美紀さんは、正しくは石田美紀さんです。謹んで、お詫び申し上げます。

## 『人環フォーラム』編集委員会からのお願い

『人環フォーラム』誌は「書評」「人環図書」「瓦版」の記事を掲載する欄を設けています。「書評」と「人環図書」では、本研究科の出身者の方々の新著もご紹介しております。「瓦版」は、研究科の活動を内外の方々に伝達するものです。紹介したい記事がありましたら、原稿を平成二五年五月末日までに編集委員会宛にお寄せください。委員会で検討のうえ、三三号（平成二五年九月刊行予定）または、三四号（平成二六年三月刊行予定）に掲載させていただきます。

1. 「書評」については、ご著書を一冊、ご寄贈ください。  
なお評者についてはご自身でお考えのうえ、お願いしてください。
2. 「人環図書」は、ご著書の内容を五〇〇字程度でおまとめいただき、表紙と奥付のコピーを添えてお届けください。なお、これは〈紹介〉であつて〈宣伝〉ではありません。
3. 教員・院生の表彰、顕賞、受賞についてお知らせ下さい。

なお、掲載の採否は編集委員会にご一任くださいますよう、お願いいたします。

資料の送付先 ― 千六〇六一八五〇一 京都市左京区吉田二本松町

京都大学大学院人間・環境学研究科

『人環フォーラム』編集委員会

問い合わせ先 ― 編集委員会事務局 ○七五―七五三二―九八四（TEL）



# 人環フォーラム

第 33号予告 HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM NO.33

巻頭言

山田 誠

対談

大学の教養教育を考える【PartⅡ】

富田恭彦／小倉紀蔵

特集

大学と教養

高橋由典／大川勇／石原昭彦／水野眞理



表紙写真  
裏表紙写真  
ハイデルベルク城址（撮影 問宮陽介 二〇一一年）  
カタリーニャの山村ボラにて（撮影 問宮陽介 二〇一五年）

## 編集委員会

委員長  
副委員長  
委員

宮道水林中立瀬阪岡鶴石安小間  
下坂野 嶋木口上 飼川部倉宮  
英昭眞達節秀浩雅真大尚 紀陽  
明廣理也子樹彰昭理介人浩蔵介

## 人環フォーラム

第32号

平成二五年三月二〇日発行

編集『人環フォーラム』編集委員会

発行 京都大学大学院人間・環境学研究科  
〒606-8501 京都市左京区吉田 本松町  
FAX 〇七五・七五三・七九〇八  
印刷製本 関北斗印刷社

## 編集後記

この数年来、弊誌の編集委員長を御務め下さっているのは、問宮陽介先生である。鳥兎忽々。定年退職の為、先生は今号を以てその任を辞される。先生の絶えざる御高配と多大なる御尽力なくしては、弊誌が現在の水準を保った儘、今日迄連続と刊行され続けることは凡そありえなかった。問宮先生に對し、編集委員一同を代表してここに衷心より万謝申し上げる所以である。

嘗てケーベル博士は、文明開化期の日本人の浅薄皮相を痛罵した。彼が忌み嫌った、この種の『指導者』と呼ばれる人たちは、森鷗外や貴栄達の為の「手段」にして一人々々に相当するであろう。「このドイツ語で最も適切に表わされる種類の成功主義者」に潜む難点を三木清はこう指摘した。「もしひとがいくらかの権力を持つていたら、成功主義者ほど御し易いものはないであろう。部下を御してゆく手近かな道は、彼等に立身出世のイデオロギーを吹き込むことである。今日、我々はこれを昔話にすぎぬと一笑に付しうるであろうか。否。立身出世主義の亡霊は、嘗てのシュトラーパーであり、現在は「権力を持つている」ことを臆面も無く誇示する「指導者」の上意下達により、「グロバール・リーダー」なる当世風の装いを凝らして復活し、今特に大学を席捲せんとしているのではないか。

ケーベルは他方で、幕末に学問を修めた旧世代の「本物の人間」を敬愛した。蓋し問宮先生が去られることは、前述多難な現況下では尚更寂しいものがある。だが我々としては、我々の道を歩んでいくしかあるまい。その道のりはやがて七転び八起きか。将又七転び八起きか。

(H・A)





HUMAN AND ENVIRONMENTAL FORUM